

玉名市内遺跡調査報告書 I

平成11・12年度の調査

平成14年3月

玉名市教育委員会





写真1 立願寺廃寺出土軒丸瓦（A地点1T出土）

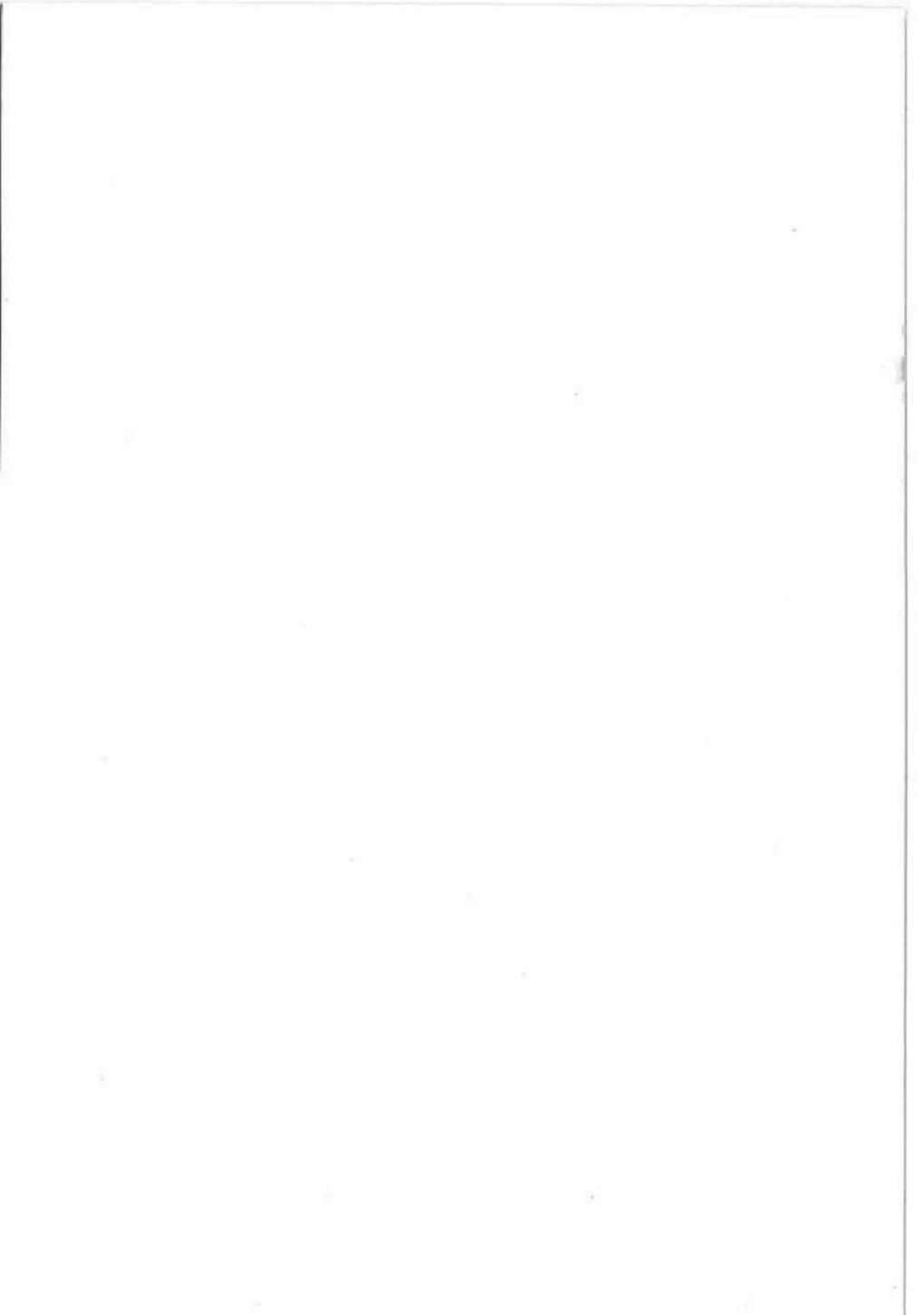


写真2 立願寺廃寺出土軒丸瓦（B地点2T出土）



写真3 立願寺廃寺出土軒丸瓦（A地点2T・B地点2T出土）





序 文

玉名市は、柳町遺跡で日本最古級の文字資料が出土するなど、弥生時代の昔から今日に至るまで、長い歴史を持つ地域です。古墳時代には、大坊古墳や永安寺東・西古墳、石貫穴觀音横穴群や石貫ナギノ横穴群など有数の装飾古墳が築かれ、古代には玉名郡家や立願寺廃寺など玉名郡の中心施設がおかされました。また、中近世には菊池川の河口港として繁栄を極めました。近年では、国道208号線玉名バイパスの建設や、九州新幹線の新駅が予定されるなど、県北部における、政治経済・教育文化・観光の中心都市として、さらなる発展を遂げようとしています。

このような中で、開発に伴う埋蔵文化財の保護対策が、重要な使命となっております。本市では、専門職員の増員を図るなど、体制の充実に努めてまいりました。さらには、その成果の公開・活用を通じて、広く教育・文化の発展に寄与できればと考えております。

本書は、各種開発に伴い平成11・12年度に実施した、試掘確認調査などの成果をまとめたものです。本書が市民の方々の埋蔵文化財に対する理解の一助となり、また、学術研究に広くご活用いただければ幸いに存じます。

平成14年3月31日

玉名市教育長 三次 昭也

例　　言

1. 本書は、玉名市教育委員会が平成11年・12年の2カ年に国・県の補助を受けて実施した、玉名市内遺跡の調査報告書である。
2. 調査は、玉名市教育委員会社会教育課職員西田道也、竹田宏司、田中康雄、末永崇が担当した。
3. 本書掲載遺構及びトレンチ等の実測図は、各担当者のほか、中尾健照、北睦美、藤好貴彦、古賀武子が作成した。このほか、中尾・春出地区試掘確認調査については、その一部を、(有)埋蔵文化財サポートシステム及び(有)遺跡整備計画に委託した。業務委託については、全て市単費による。
4. 遺物の実測図は、竹田、中尾健照、古閑敬士が作成した。精図は、遺構・遺物とも竹田が行った。城の浦横穴の須恵器については、実測・精図とも木村龍生氏（熊本大学大学院）による。
5. 調査時の写真撮影は、各調査担当者が行い、遺物写真撮影は竹田が行った。城の浦横穴の遺構写真は、岡本真也氏（熊本県文化課）の提供による。
6. 掘図に使用している座標値は、国土調査法第2座標系に基づいており、単位は全てmである。方位はすべて座標北を示す。
7. 調査地の位置図・字図等については、特に明示していない限り、上が北である。
8. 同一年度に同遺跡の調査を複数行っている場合には、年度毎に、アルファベットによる調査地点名を付している。
9. 調査地の地番については、原則として文化財保護法に基づく届出・通知の際の地番を表示している。いくつかの調査地点については、分筆等により、新たな地番が付されている場合がある。
10. 出土遺物の整理作業は、玉名市教育委員会で行った。
11. 出土遺物は、玉名市教育委員会で保管している。
12. 第Ⅰ章は竹田が執筆した。第Ⅱ・Ⅲ章は、各担当者が調査直後に作成した報文を原文とし、竹田が加筆した。編集は竹田が担当した。

本文目次

口絵

序文

例言

本文目次

挿図目次

写真目次

Iはじめ	1
1 調査の体制	1
2 調査の方法	1
3 調査の概要	1
II 平成11年度の調査	5
1 蓬華遺跡・古闕遺跡	7
2 高岡原遺跡（A地点）	8
3 大塚遺跡	9
4 高岡原遺跡（B地点）	10
5 高岡原遺跡（C地点）	12
6 高岡原遺跡（D地点）	15
7 玉名平野条里跡（A地点）	
両追間日渡遺跡	17
8 玉名平野条里跡（B地点）	17
9 下村城跡	18
III 平成12年度の調査	21
1 中尾・春出地区	23
2 築地東遺跡（A地点）	54
3 高岡原遺跡（A地点）	55
4 亀甲遺跡	61
5 城の浦横穴	63
6 岩崎城跡	71
7 西田遺跡	73
8 菊尾遺跡・天満宮古墳参考地	74
9 築地東遺跡（B地点）	81
10 五郎丸遺跡（A地点）	82
11 刀研遺跡	84
12 玉名郡倉跡推定地（A地点）	85
13 糸峯遺跡（A地点）	95
14 春出遺跡	97
15 糸峯遺跡（B地点）	98
16 高岡原遺跡（B地点）	98
17 五郎丸遺跡（B地点）	99
18 立願寺庵寺（A～D地点）	101
19 一本松遺跡	117
20 上小田宮の前遺跡	118
21 玉名郡倉跡推定地（B地点）	119
22 岩崎原遺跡・高瀬藩邸跡	120
23 玉名平野条里跡	121
24 吉九西遺跡	122

挿 図 目 次

第1図 玉名市内遺跡分布図	3
第2図 蓬華遺跡・古閑遺跡調査地位置図	7
第3図 高岡原遺跡調査地位置図（A地点）	8
第4図 高岡原遺跡調査地周辺字図	8
第5図 高岡原遺跡遺構配置図	8
第6図 大塚遺跡調査地位置図	9
第7図 大塚遺跡調査地周辺字図	9
第8図 高岡原遺跡地点調査地位置図（B地点）	10
第9図 高岡原遺跡調査地周辺字図・トレンチ配置図	10
第10図 高岡原遺跡遺構実測図	11
第11図 高岡原遺跡出土遺物実測図	11
第12図 高岡原遺跡調査地位置図（C地点）	12
第13図 高岡原遺跡調査地周辺字図	12
第14図 高岡原遺跡遺構配置図及び実測図	13
第15図 高岡原遺跡出土遺物実測図	14
第16図 高岡原遺跡調査地位置図（D地点）	15
第17図 高岡原遺跡調査地周辺字図	15
第18図 高岡原遺跡トレンチ及び遺構配置図	16
第19図 高岡原遺跡遺構及び遺物実測図	16
第20図 玉名平野条里跡調査地位置図	17
第21図 玉名平野条里跡トレンチ配置図（A地点）	17
第22図 玉名平野条里跡トレンチ配置図（B地点）	17
第23図 下村城跡調査地位置図	18
第24図 下村城跡調査地位置図	18
第25図 下村城跡遺構配置図	19
第26図 下村城跡トレンチ配置及び実測図	19
第27図 中尾・春出地区調査地位置図	28
第28図 中尾10・11トレンチ配置図	30
第29図 中尾10・11トレンチ実測図	30
第30図 中尾39トレンチ実測図	30
第31図 中尾39・40トレンチ配置図	30
第32図 中尾40トレンチ実測図	30
第33図 中尾44・45トレンチ配置図	31
第34図 中尾44トレンチ実測図	31

第35図	中尾45トレンチ実測図（1）	32
第36図	中尾45トレンチ実測図（2）	33
第37図	中尾61・63トレンチ配置図	33
第38図	中尾61・63トレンチ実測図	33
第39図	中尾69・70・71トレンチ配置図	34
第40図	中尾69・70・71トレンチ実測図	34
第41図	中尾106・113・114トレンチ配置図	35
第42図	中尾106・113・114トレンチ実測図	35
第43図	中尾117トレンチ配置図	36
第44図	中尾117トレンチ実測図	36
第45図	中尾118・119トレンチ配置図	37
第46図	中尾118・119トレンチ実測図	37
第47図	中尾119トレンチ実測図	38
第48図	中尾123トレンチ配置図	39
第49図	中尾123トレンチ実測図	39
第50図	中尾132トレンチ配置図	40
第51図	中尾132トレンチ実測図	40
第52図	中尾142・145・146・147・148トレンチ配置図	41
第53図	中尾142・145トレンチ実測図	41
第54図	中尾146トレンチ実測図	42
第55図	中尾146・147・148トレンチ実測図	43
第56図	中尾151・153・154・156・157・158・159トレンチ配置図	44
第57図	中尾151トレンチ実測図	44
第58図	中尾153・154トレンチ実測図	45
第59図	中尾156・157・158トレンチ実測図	46
第60図	中尾159トレンチ実測図	47
第61図	中1430・1439・1441トレンチ配置図	48
第62図	中1430・1439・1441トレンチ実測図	48
第63図	中1446・1449・1454トレンチ配置図	49
第64図	中1446・1454トレンチ実測図	49
第65図	中1449トレンチ実測図	50
第66図	中尾・春出地区出土遺物実測図（1）	51
第67図	中尾・春出地区出土遺物実測図（2）	52
第68図	中尾・春出地区出土遺物実測図（3）	53
第69図	築地東遺跡調査位置図（A地点）	54
第70図	築地東遺跡調査地周辺字図・トレンチ配置図	54

第71図 高岡原遺跡調査地位置図	55
第72図 高岡原遺跡調査地周辺字図・トレンチ配置図	55
第73図 高岡原遺跡調査区位置図	55
第74図 高岡原遺跡遺構実測図	56
第75図 高岡原遺跡遺物実測図（1）	58
第76図 高岡原遺跡遺物実測図（2）	59
第77図 亀甲遺跡調査地位置図	61
第78図 亀甲遺跡調査地周辺字図・トレンチ配置図	62
第79図 亀甲遺跡土層断面図	62
第80図 城の浦横穴位置図	63
第81図 城の浦横穴出土遺物実測図（1）	65
第82図 城の浦横穴出土遺物実測図（2）	66
第83図 城の浦横穴出土遺物実測図（3）	67
第84図 岩崎城跡調査地位置図	71
第85図 岩崎城跡調査地周辺字図	71
第86図 岩崎城跡調査地現況及びトレンチ配置図	72
第87図 岩崎城跡トレンチ実測図	72
第88図 西田遺跡調査地位置図	73
第89図 西田遺跡調査地周辺字図・トレンチ配置図	73
第90図 西田遺跡トレンチ実測図	73
第91図 菊尾遺跡・天満宮古墳参考地調査地位置図	74
第92図 菊尾遺跡・天満宮古墳参考地調査地周辺字図・トレンチ配置図	74
第93図 菊尾遺跡遺構実測図	75
第94図 菊尾遺跡遺物実測図	76
第95図 天満宮古墳参考地現況及びトレンチ配置図	77
第96図 天満宮古墳参考地トレンチ実測図	78
第97図 築地東遺跡調査地位置図（B地点）	81
第98図 築地東遺跡調査地周辺字図・トレンチ配置図	81
第99図 築地東遺跡トレンチ実測図	81
第100図 五郎丸遺跡調査地位置図（A地点）	82
第101図 五郎丸遺跡調査地周辺字図・トレンチ配置図	82
第102図 五郎丸遺跡トレンチ実測図	83
第103図 五郎丸遺跡遺物実測図	83
第104図 刀研遺跡調査地位置図	84
第105図 刀研遺跡調査地周辺字図・トレンチ配置図	84
第106図 刀研遺跡トレンチ断層断面図	84

第107図	玉名郡倉跡推定地調査地位置図（A地点）	85
第108図	玉名郡倉跡推定地調査地周辺字図	86
第109図	玉名郡倉跡推定地遺構配置図	88
第110図	玉名郡倉跡推定地遺構実測図（1）	89
第111図	玉名郡倉跡推定地遺構実測図（2）	90
第112図	玉名郡倉跡推定地遺構実測図（3）	91
第113図	玉名郡倉跡推定地遺構実測図（4）	92
第114図	玉名郡倉跡推定地遺構実測図（5）	93
第115図	糠峯遺跡調査地位置図（A地点）	95
第116図	糠峯遺跡調査地周辺字図・トレンチ配置図	95
第117図	糠峯遺跡トレンチ実測図	96
第118図	糠峯遺跡遺物実測図	96
第119図	春出遺跡調査地位置図	97
第120図	春出遺跡調査地周辺字図・トレンチ配置図	97
第121図	春出遺跡トレンチ実測図	97
第122図	糠峯遺跡調査地位置図（B地点）	98
第123図	糠峯遺跡調査地周辺字図・トレンチ配置図	98
第124図	高岡原遺跡調査地位置図	98
第125図	高岡原遺跡調査地周辺字図	98
第126図	五郎丸遺跡調査地位置図（B地点）	99
第127図	五郎丸遺跡調査地周辺字図・調査範囲図	99
第128図	五郎丸遺跡調査範囲実測図	100
第129図	五郎丸遺跡遺物実測図	100
第130図	立願寺廃寺調査地位置図	101
第131図	立願寺廃寺調査地周辺字図・トレンチ配置図	102
第132図	立願寺廃寺遺構配置図（A・B地点）	104
第133図	立願寺廃寺トレンチ実測図（A地点）	105
第134図	立願寺廃寺トレンチ実測図（B地点）	107
第135図	立願寺廃寺遺構配置図（C地点）	109
第136図	立願寺廃寺トレンチ実測図（C地点）	110
第137図	立願寺廃寺トレンチ配置図（D地点）	112
第138図	立願寺廃寺トレンチ断面図（D地点）	112
第139図	立願寺廃寺トレンチ実測図（D地点）	113
第140図	立願寺廃寺出土遺物実測図（1）	114
第141図	立願寺廃寺出土遺物実測図（2）	115
第142図	立願寺廃寺出土遺物実測図（3）	142

第143図	一本松遺跡調査地位置図	117
第144図	一本松遺跡調査地配置図	117
第145図	上小田宮の前遺跡調査地位置図	118
第146図	上小田宮の前遺跡トレンチ配置図	118
第147図	上小田宮の前遺跡トレンチ土層断面図	118
第148図	玉名郡倉跡推定地調査地位置図（B地点）	119
第149図	玉名郡倉跡推定地調査地周辺字図・調査範囲図	119
第150図	玉名郡倉跡推定地土層断面実測図	119
第151図	岩崎原遺跡調査地位置図	120
第152図	岩崎原遺跡調査地周辺字図・トレンチ配置図	120
第153図	岩崎原遺跡土層断面図	120
第154図	玉名平野条里跡調査地位置図	121
第155図	玉名平野条里跡トレンチ配置図	121
第156図	玉名平野条里跡トレンチ実測図	121
第157図	吉丸西遺跡調査地位置図	122
第158図	吉丸西遺跡調査地周辺字図・トレンチ配置図	123
第159図	吉丸西遺跡トレンチ実測図	123

写 真 目 次

写真1	立願寺廃寺出土軒丸瓦（A地点 1 T出土）	卷頭
写真2	立願寺廃寺出土軒丸瓦（B地点 2 T出土）	卷頭
写真3	立願寺廃寺出土軒丸瓦（A地点 2 T・B地点 2 T出土）	卷頭
写真4	玉名郡倉跡推定地柱穴⑨～⑯検出状況	卷頭
写真5	玉名郡倉跡推定地柱穴⑯・⑰検出状況	卷頭
写真6	立願寺大塚古墳近景（北より）	9
写真7	大塚遺跡調査地近景（大塚古墳墳丘より）	9
写真8	高岡原遺跡B地点住居址完掘状況	10
写真9	高岡原遺跡B地点住居址遺物出土状況	11
写真10	高岡原遺跡遠景（西より）	12
写真11	高岡原遺跡C地点遺構検出状況	14
写真12	高岡原遺跡C地点SD-01土層堆積状況	14
写真13	高岡原遺跡D地点住居址完掘状況（南より）	15
写真14	玉名平野及び下村城跡遠景（西より）	20
写真15	下村城跡遠景（西より）	20
写真16	中尾地区遠景（西より）	23
写真17	春出地区遠景（西より）	23
写真18	中尾11番地全景（西より）	23
写真19	中尾39番地 2 T土層堆積状況	23
写真20	中尾40番地近景（東より）	24
写真21	中尾44・45番地近景（東より）	24
写真22	中尾44番地遺構検出状況（東より）	24
写真23	中尾61番地調査状況（東より）	24
写真24	中尾63・69～71番地全景（北より）	25
写真25	中尾63番地 1 T土層堆積状況	25
写真26	中尾106・113・114番地全景（南より）	25
写真27	中尾117番地 2 T遺構検出状況	25
写真28	中尾118番地調査状況	37
写真29	中尾119番地近景（南より）	38
写真30	中尾123番地 1 T全景（北より）	39
写真31	中尾159番地調査状況（東より）	47
写真32	中尾132番地調査状況（東より）	50
写真33	中尾145番地 1 T全景（東より）	50
写真34	中尾146番地 4 T全景（東より）	50

写真35 中尾148番地調査状況（西より）	50
写真36 築地東遺跡調査地近景（南より）	54
写真37 築地東遺跡1T全景（北より）	54
写真38 高岡原遺跡調査地近景（南西より）	55
写真39 高岡原遺跡調査地近景（北より）	55
写真40 高岡原遺跡S01完掘状況（西より）	58
写真41 高岡原遺跡S02完掘状況（西より）	58
写真42 高岡原遺跡S03完掘状況（北より）	58
写真43 高岡原遺跡S04完掘状況（南より）	60
写真44 高岡原遺跡S05遺物出土状況（西より）	60
写真45 高岡原遺跡S06完掘状況（北より）	60
写真46 高岡原遺跡完掘状況（西より）	60
写真47 亀甲遺跡調査地近景（北より）	61
写真48 亀甲遺跡2T（南より）	61
写真49 城の浦横穴遠景（西より）	63
写真50 城の浦横穴近景（西より）	63
写真51 城の浦横穴玄室	64
写真52 城の浦横穴玄室奥壁	64
写真53 城の浦横穴玄室奥壁・南側壁	64
写真54 城の浦横穴玄室奥壁・北側壁	64
写真55 城の浦横穴表探遺物1・4	68
写真56 城の浦横穴表探遺物3	68
写真57 城の浦横穴表探遺物5	68
写真58 城の浦横穴表探遺物6	68
写真59 城の浦横穴表探遺物7	68
写真60 城の浦横穴表探遺物8	68
写真61 城の浦横穴表探遺物12	68
写真62 城の浦横穴表探遺物13	68
写真63 城の浦横穴表探遺物14	69
写真64 城の浦横穴表探遺物16	69
写真65 城の浦横穴表探遺物17	69
写真66 城の浦横穴表探遺物19	69
写真67 城の浦横穴表探遺物25	69
写真68 城の浦横穴表探遺物26	69
写真69 城の浦横穴表探遺物27	70
写真70 城の浦横穴表探遺物28	70

写真71	城の浦横穴表探遺物30	70
写真72	岩崎城跡調査地近景（北より）	71
写真73	岩崎城跡堀状遺構現況（北より）	71
写真74	菊尾遺跡・天満宮古墳参考地調査地遠景（南より）	79
写真75	菊尾遺跡・天満宮古墳参考地調査地遠景（西より）	79
写真76	菊尾遺跡調査地近景（南西より）	79
写真77	菊尾遺跡1T全景（西より）	79
写真78	菊尾遺跡1T全景（南東より）	79
写真79	菊尾遺跡S01完掘状況（南より）	79
写真80	菊尾遺跡S02完掘状況（北より）	79
写真81	菊尾遺跡S01出土遺物1	79
写真82	天満宮古墳参考地調査地遠景（西より）	80
写真83	天満宮古墳参考地2T全景	80
写真84	天満宮古墳参考地2T土層堆積状況	80
写真85	天満宮古墳参考地3T全景	80
写真86	天満宮古墳参考地4T全景	80
写真87	天満宮古墳参考地4T土層堆積状況	80
写真88	天満宮古墳参考地5T全景	80
写真89	天満宮古墳参考地5T土層堆積状況	80
写真90	五郎丸遺跡調査地近景（西より）	82
写真91	五郎丸遺跡1T遺構検出状況	82
写真92	玉名郡倉跡推定地調査状況（南より）	85
写真93	玉名郡倉跡推定地調査状況（北西より）	93
写真94	玉名郡倉跡推定地礫石検出状況（東より）	93
写真95	玉名郡倉跡推定地遺構検出状況（北西より）	93
写真96	玉名郡倉跡推定地柱穴⑨～⑯検出状況（南より）	94
写真97	玉名郡倉跡推定地柱穴⑪・⑫検出状況（南東より）	94
写真98	玉名郡倉跡推定地柱穴⑯・⑰検出状況（南東より）	94
写真99	玉名郡倉跡推定地柱穴⑯・⑰検出状況（南東より）	94
写真100	玉名郡倉跡推定地柱穴①～④調査状況（南より）	94
写真101	玉名郡倉跡推定地柱穴①～④検出状況（南より）	94
写真102	玉名郡倉跡推定地調査状況（南より）	94
写真103	玉名郡倉跡推定地調査状況（南より）	94
写真104	糠峯遺跡調査状況（北より）	96
写真105	糠峯遺跡土層堆積状況	96
写真106	五郎丸遺跡遺構検出状況（北より）	99

写真107 立願寺廃寺A地点調査地近景（西より）.....	103
写真108 立願寺廃寺A-1T全景（西より）.....	103
写真109 立願寺廃寺A-2T全景（南より）.....	103
写真110 立願寺廃寺A-2T遺物出土状況（東より）.....	103
写真111 立願寺廃寺B地点調査地近景（南より）.....	106
写真112 立願寺廃寺B-1T全景（南より）.....	106
写真113 立願寺廃寺B-1T遺物出土状況（西より）.....	106
写真114 立願寺廃寺C地点調査地近景（北より）.....	108
写真115 立願寺廃寺C-1T全景（東より）.....	108
写真116 立願寺廃寺C-2T全景（東より）.....	108
写真117 立願寺廃寺C-3T全景（東より）.....	108
写真118 立願寺廃寺D地点調査調査状況.....	111
写真119 立願寺廃寺D-6T全景（東より）.....	111
写真120 立願寺廃寺D-9T全景（南西より）.....	111
写真121 立願寺廃寺D-14T全景（東より）.....	111
写真122 立願寺廃寺A地点出土軒平瓦.....	116
写真123 岩崎原遺跡1T全景（西より）.....	120
写真124 吉丸西遺跡調査地近景（北より）.....	122
写真125 吉丸西遺跡3・4T調査状況（北東より）.....	122

表 目 次

表1 平成11・12年度試掘確認調査等一覧.....	4
表2 中尾・春出地区調査地点一覧.....	29

I はじめに

I はじめに

1 調査の体制

調査及び報告書の作成は、下記の体制により実施している。職員の所属等は、当時のものである。

平成11年度

調査主体 玉名市教育委員会

調査責任 教育長 三次昭也

調査総括 社会教育課長 西川待義

(11月4日まで)

社会教育課長 牧野和明

(11月5日より)

社会教育課審議員兼文化係長

西田道彦

調査担当 技師 田中康雄

技師 末永 崇

庶務担当 参事 内田秀昭

主事 大石貴子

平成12年度

調査主体 玉名市教育委員会

調査責任 教育長 三次昭也

調査総括 社会教育課長 牧野和明

社会教育課審議員兼文化係長

西田道彦

調査担当 主任 竹田宏司

技師 田中康雄

技師 末永 崇

庶務担当 参事 内田秀昭

主事 大石貴子

平成13年度（報告書作成）

報告書主体 玉名市教育委員会

報告書責任 教育長 三次昭也

報告書総括 社会教育課長 牧野和明

社会教育課審議員兼文化係長

西田道彦

報告書担当 参事 竹田宏司

庶務担当 参事 徳永太一郎

主事 東田優子

2 調査の方法

試掘確認調査については、いずれも重機掘削により0.7~1m幅の溝状のトレーニチを設定しており、重機が使用不可能な場合や、包含層の一部、遺構については人力掘削を行っている。トレーニチの規模・形状については、開発の内容、予想される遺跡の内容、地形等を勘案して、適宜設定している。

実測図は、1/20を基本として、平面図を作成している。トレーニチの配置図等については、基本的に開発に伴う測量図及び字図等に記入する形をとっている。地形測量図等が必要な場合には、平板及び光波測距儀を使用して、1/100もしくは1/200で作成している。

写真は、重要な遺構などが確認された場合のみ、35mmモノクロ及びリバーサルによる撮影を行い、通常は35mmカラーネガを用いている。

3 調査の概要

玉名市では、平成11年度より、国・県の補助を受けて、各種開発に伴う試掘確認調査等を実施している。

平成11年度は、11件の試掘確認調査等の調査を実施している。地域的には、市街地西北に位置する、築地・山田地区に集中する傾向がある。特に山田所在の高岡原遺跡に集中しており、4件の確認調査及び発掘調査を実施している。調査原因は、道路が最も多く、共同住宅、店舗、診療所などとなっており、これは、高岡原遺跡

I はじめに

を東西に貫く都市計画道路築地立願寺線の工事と開通、九州看護福祉大学の開学に伴う影響が大きいものとみている。

高岡原遺跡の調査では、弥生時代後期の集落及び古代・中世の遺構・遺物が確認されている。

蓮華遺跡・古闇遺跡の試掘確認調査は、築地立願寺線建設に伴うものである。蓮華遺跡については、新たに発見された平町遺跡とともに、11・12年度に本調査を実施しており、弥生時代後期・古墳時代後期の集落と中世・近世の遺跡などが確認されている。

工場用地の造成に伴う下村城跡の確認調査では、堀状の遺構が確認されている。

このほか、土地区画整理事業に伴い、ホカンヤカタ及びその周辺の踏査等を実施している。ホカンヤカタについては、平成12年度にその周辺を含め、中尾・春出地区として試掘確認調査を実施している。

平成12年度は、27件の試掘確認調査等を実施している。地域的にはほぼ市内全域にわたっているが、11年度に続き、築地・山田地区がもっとも多く、統いて立願寺地区となっている。調査原因は、個人住宅が14件と過半数を占める。統いて、道路、共同住宅などとなっている。

築地・山田地区では、高岡原遺跡、菊尾遺跡、猿峯遺跡、五郎丸遺跡、西田遺跡などで調査を行っている。高岡原遺跡では、その後本調査を行っており、弥生時代後期の集落と、古代の道路などが確認されている。菊尾遺跡では、古墳時代後期及び古代の住居址、建物などが調査されている。五郎丸遺跡の2件では、弥生時代中期・後期の住居址が確認されている。

立願寺地区では、立願寺廃寺、玉名郡倉跡推定地で調査を行っており、玉名郡倉跡推定地の工事立会では、礎石や掘立柱建物群が確認されている。立願寺廃寺では、個人住宅・共同住宅

に伴う確認調査については、いずれも現状保存が図られているが、道路については13年度に本調査を実施している。大規模な掘建柱建物や土坑などが検出されており、廃棄された礎石群や多量の瓦が出土している。

市街地中心部に位置する岩崎城跡の調査では、二重に巡る堀状の遺構が確認されており、13年度に本調査を実施している。岩崎城跡では、弥生時代後期の集落も同時に調査されている。そのほか、中尾・春出地区の試掘確認調査では、縄文時代晚期・弥生時代中期・後期・古墳時代・古代・中世と各時代の遺構・遺物が確認されている。また、城の浦横穴群においては、遺構は既に破壊されているものの、遺物の採集を行っており、多量の須恵器・土師器を採集している。

Iはじめに



- | | | |
|-----------|-------------|-------------|
| 1 菊尾遺跡 | 8 岩崎原遺跡 | 15 刀研遺跡 |
| 2 西田遺跡 | 9 岩崎城跡 | 16 玉名平野条里跡 |
| 3 築地東遺跡 | 10 高岡原遺跡 | 17 吉丸西遺跡 |
| 4 蓮華遺跡 | 11 糖峯遺跡 | 18 一本松遺跡 |
| 5 中尾・春出地区 | 12 立願寺廃寺 | 19 城の浦穴 |
| 6 春出遺跡 | 13 玉名郡倉跡推定地 | 20 下村城跡 |
| 7 亀甲遺跡 | 14 大塚遺跡 | 21 上小田宮の前遺跡 |

第1図 玉名市内遺跡分布図 S=1/100,000 ※今回報告分のみ

番号	地名	通路名	所在地	面積(ヘクタール)	種別	認定年月日	認定期間	担当者	担当課	備考
11 1	高岡街道	古賀道路	藤井寺町内	14.088	確認済査定	11年6月20日～26日	桂陽 田中康徳	木原義	木原義	
11 2	高岡街道	高岡街道	山田字高岡原2051-2	967.30	確認済査定	11年5月11日～14日	長崎 田中康徳	木原義	木原義	
11 3	高岡街道	立原字松原1-1	立原字松原1-1	11年6月20日～26日	桂陽 田中康徳	木原義	木原義	木原義	木原義	
11 4	高岡街道	山田字高岡原2065-1	山田字高岡原2065-1	985.66	確認済査定	11年5月9日	桂陽 田中康徳	木原義	木原義	
11 5	高岡街道	山田字高岡原2006-1	山田字高岡原2006-1	2762.3	確認済査定	11年11月15日～18日	桂陽 田中康徳	木原義	木原義	
11 6	高岡街道	山田字高岡原1-1,2006-5	山田字高岡原1-1,2006-5	711.71	確認済査定	11年11月28日	桂陽 田中康徳	木原義	木原義	
11 7	高岡街道	路井平町35-3,35-5	路井平町35-3,35-5	260.52	確認済査定	11年11月26日	桂陽 田中康徳	木原義	木原義	
11 8	五名平野原道路	五名平野原道路	河野字油出44-1～45-2	935.7	確認済査定	12年1月21日	桂陽 田中康徳	木原義	木原義	
11 9	五名平野原道路	五名平野原道路	河野字油出44-1～45-2	935.7	確認済査定	12年1月9日	桂陽 田中康徳	木原義	木原義	
11 10	下村城跡内	下村城跡内	中里町内	6860	確認済査定	12年1月28日	桂陽 田中康徳	木原義	木原義	
11 11	ホカシヤカラほか	ホカシヤカラほか	中里町内	280.000	施設	12年1月21日	桂陽 田中康徳	木原義	木原義	
12 1	中尾・大出地区	山田・中尾・牛井所	山田字高岡原2	250.000	技術専門施設	12年1月1日～5月31日	桂陽 田中康徳	木原義	木原義	
12 2	精進寺道路	精進寺道路	高尾字精進寺350-2	205.52	確認済査定	12年2月24日	桂陽 田中康徳	木原義	木原義	
12 3	高岡街道	高岡街道	山田字高岡原2045-2	240	確認済査定	12年3月9日	桂陽 田中康徳	木原義	木原義	
12 4	龜甲道路	龜甲道路	龜甲134	479.07	確認済査定	12年3月1日～8日	桂陽 田中康徳	木原義	木原義	
12 5	城の池第六	城の池第六	下城の池第六	6800	確認済査定	12年3月22日～8月8日	桂陽 田中康徳	木原義	木原義	
12 6	岩船寺道路	岩船寺道路	岩船寺字西602-801,810-811	1,200	確認済査定	12年3月23日～26日	桂陽 田中康徳	木原義	木原義	
12 7	西田道路	西田道路	高尾字見前1586-1480の一部	430	確認済査定	12年3月25日	桂陽 田中康徳	木原義	木原義	
12 8	福尾道路	福尾道路	福尾字見前541-3	429.31	確認済査定	12年4月6日～8月10日	主任 竹田宏司	木原義	木原義	
12 9	精進寺道路	精進寺道路	精進寺字天神251-1,251-2,251-3	581.95	確認済査定	12年4月8日	主任 竹田宏司	木原義	木原義	
12 10	五郎丸道路	五郎丸道路	山田字台石355-1,534-5	533	確認済査定	12年5月14日	主任 竹田宏司	木原義	木原義	
12 11	刀耕火耕	刀耕火耕	石子字見前1574-1他3ヶ所の一部	500	確認済査定	12年4月20日	主任 竹田宏司	木原義	木原義	
12 12	五名寺道路	五名寺道路	五名寺字755番地	60	工事立会	12年5月21日	主任 竹田宏司	木原義	木原義	
12 13	精進寺道路	精進寺道路	山田字精進寺91-1	835.8	確認済査定	12年6月21日	主任 竹田宏司	木原義	木原義	
12 14	音出道路	音出道路	字音出1452-2,1452-4の一部	259	確認済査定	12年6月28日	桂陽 田中康徳	木原義	木原義	
12 15	精進寺道路	精進寺道路	精進寺字西8850-8	165	確認済査定	12年6月28日	桂陽 田中康徳	木原義	木原義	
12 16	高岡街道	高岡街道	山田字高岡原2014-1	463	工事立会	12年10月15日	主任 竹田宏司	木原義	木原義	
12 17	五郎丸道路	五郎丸道路	山田字台石535-1,534-5	533	工事立会	12年10月21日	主任 竹田宏司	木原義	木原義	
12 18	立原新寺	立原新寺	立原新寺91-1	282	確認済査定	12年1月6日～11日	主任 竹田宏司	木原義	木原義	
12 19	立原新寺	立原新寺	立原新寺1452-1,1452-4の一部	875.65	確認済査定	12年1月6日～16日	主任 竹田宏司	木原義	木原義	
12 20	立原新寺	立原新寺	立原新寺1452-1,1452-4の一部	282	確認済査定	12年1月24日～2月1日	主任 竹田宏司	木原義	木原義	
12 21	一本木道路	一本木道路	上小河原字外11番	46,485.57	確認済査定	12年1月28日～8月9日	主任 竹田宏司	木原義	木原義	
12 22	上小河原字外11番	上小河原字外11番	上小河原字外11番	3600	確認済査定	12年1月29日～9月30日	桂陽 田中康徳	木原義	木原義	
12 23	立原新寺	立原新寺	立原新寺字北山1150-1,字堤原1233-2	1,300	確認済査定	12年1月29日～2月2日	主任 竹田宏司	木原義	木原義	
12 24	五名寺金剛杵文化	五名寺金剛杵文化	五名寺字金剛杵708-2	236.68	確認済査定	12年2月25日～26日	主任 竹田宏司	木原義	木原義	
12 25	高岡街道	高岡街道	云坂字高岡原1134	567.92	確認済査定	12年3月26日	主任 竹田宏司	木原義	木原義	
12 26	五名寺金剛杵	五名寺金剛杵	五名寺字下田田252,字土井ノ内1207	1123	確認済査定	12年3月15日	桂陽 田中康徳	木原義	木原義	
12 27	吉久道路	吉久道路	寺田字吉久25-1,827,828,829の一部	4805.84	確認済査定	13年3月15日	主任 竹田宏司	木原義	木原義	

表1 平成11・12年度試験査定一覧

II 平成11年度の調査

II 平成11年度の調査

蓮華遺跡・古閑遺跡

高岡原遺跡（A地点）

大塚遺跡

高岡原遺跡（B地点）

高岡原遺跡（C地点）

高岡原遺跡（D地点）

玉名平野条里跡（A地点）・両迫間日渡遺跡

玉名平野条里跡（B地点）

下村城跡

II 平成11年度の調査

1 蓮華遺跡・古闕遺跡

所 在 地：築地地内

調査面積：14,068m²

調査期日：11年4月20日～4月26日

担 当 者：田中康雄

調査地は、小代山南麓に広がる台地の、標高15～16mの地点である。北側の築山小学校付近では、壺棺墓の存在が確認されている。南側の蓮華院誕生寺及びその周辺では、中世の寺院である淨光寺跡として、昭和61～63年度にかけて範囲確認調査が行われている。今回の地点は寺域推定範囲の北端付近に位置しており、都市計画街路築地立願寺線の建設に伴い、確認調査を実施した。今回の事業範囲内には、蓮華遺跡、古闕遺跡が含まれているほか、蓮華遺跡の西側で、周知の範囲外からも埋蔵文化財が確認された。このため、平町遺跡として発見通知を提出

している。

調査対象範囲に14カ所のトレンチを設定した。

このうち、トレンチNo6・No7・No10・No11の4カ所のトレンチで、弥生時代などの、遺物・遺構が確認された。このため、平成11年度より本調査を実施し、報告書を刊行している。

西側に位置する築地35-3.35-5については、11年12月15日に、発掘調査の範囲を確定するための確認調査を行った。

地表面下1m程の深さに存在する暗褐色土層から近世から近代の遺物が出土しているが、遺構は確認されていない。このため、この地点から西側に関しては、本調査を実施しないこととなった。

〈参考文献〉

末永 崇 2002『蓮華遺跡・今見堂遺跡・平町遺

跡』玉名市文化財調査報告第10集



第2図 蓮華遺跡・古闕遺跡調査地位置図 S=1/4,000 ●～トレンチの位置

II 平成11年度の調査

2 高岡原遺跡（A地点）

所 在 地：山田字高岡原2051-2

対象面積：967.80m²

調査期日：11年5月11日～5月14日

担 当 者：田中康雄

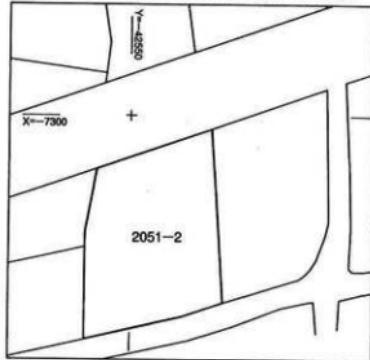
高岡原遺跡は、小代山南麓に広がる台地上の、標高18～27mの付近に位置する遺跡である。弥生時代・古墳時代の包蔵地とされている高岡原遺跡のほか、縄文時代の高岡原J遺跡、弥生時代のいっちょう煙箱式石棺、古墳時代の高岡古墳、中世の高岡城跡が遺跡地図に掲載されている。現在では、遺跡を東西に都市計画街路築地立願寺線が貫いており、道路建設の際に発掘調査が行われたほか、周辺は店舗や共同住宅が相次いで建設されており、これに伴う調査が行われている。平成11年度には4件の調査が実施されており、混乱を避けるため、調査順にそれぞれA～Dの地点名を付している。

今回の調査地は、高岡原遺跡のやや西よりの地点であり、標高は約22mである。南西への緩やかな傾斜が認められるが、調査の時点では、畠地として平坦になっていた。調査原因は、共同住宅の建設である。

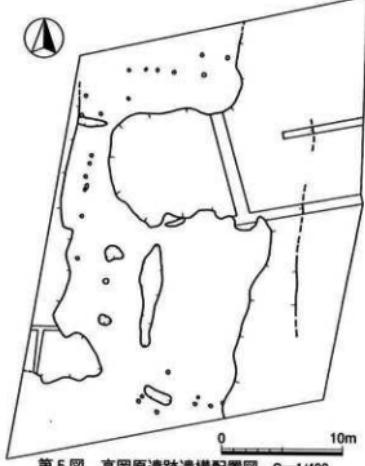
可能な範囲について、全面的に表土を除去し、確認調査を行った。その結果、大規模な溝状造構（堀）、柱穴群、土坑などが確認された。造構については、平面での確認と、一部トレンチによる確認を行っているほかは、完掘していない。溝状造構（堀）は、東西に2条が検出されており、いずれも南北方向に延びる。東側の造構は、調査範囲の南西部でとぎれており、この部分で立ち上がるか、西側へ延びる可能性がある。東側の溝状造構は、調査区の中央部で、西側へ湾状に広がる部分が認められる。いずれも、中世末から近世初頭にかけての所産であると判断している。



第3図 高岡原遺跡調査地位置図(A地点) S=1/5,000



第4図 高岡原遺跡調査地周辺字図 S=1/1,000



第5図 高岡原遺跡造構配置図 S=1/400

II 平成11年度の調査

3 大塚遺跡

所 在 地：立願寺字松尾1094-1

期 日：11年6月9日

担 当 者：田中康雄

立願寺大塚古墳は、東に玉名平野をのぞむ標高45m前後の丘陵上に位置する円墳である。西から南側の一帯には、立願寺廃寺・玉名郡倉跡推定地などの遺跡が広がっている。北側に国道208号玉名バイパスが建設されており、事前に熊本県文化課による調査が行われているが、大塚古墳に伴う周溝などは確認されていない。主体部等詳細は不明である。

今回の確認調査は、古墳南側の敷地で開発が予定されているため、確認調査依頼に基づき実施したものである。調査地の現況は畑であり、現状での大塚古墳の墳裾からは、大きく段落ちしている。

大塚古墳の墳裾から、南北方向のトレンチを3ヵ所設定し、周溝の有無などを確認した。その結果、いずれのトレンチにおいても表土直下は無遺物層であり、古墳に伴う周溝及びその他の遺構・遺物ともに確認されなかった。周溝が存在していたとしても、既に削平されている可能性が高い。

なお、その後開発は行われておらず、畑地のままである。



第6図 大塚遺跡調査地位置図 S=1/5,000



第7図 大塚遺跡調査地周辺字図 S=1/1,000



写真6 立願寺大塚古墳近景（北より）



写真7 大塚遺跡調査地近景（大塚古墳墳丘より）

II 平成11年度の調査

4 高岡原遺跡（B地点）

所 在 地：山田字高岡原2045-4

対象面積：985.66m²

調査期日：11年11月4日～18日

担 当 者：田中康雄・末永 崇

調査地は、高岡原遺跡の南西部に位置する標高約24mの地点である。旧地形は南西への緩傾斜地であるが、現況では畑・宅地として平坦面が造成されている。

今回の工事は届出がなされておらず、駐車場部分の工事の際に発見したものである。この際に、すでに掘削されていた部分の断面に竪穴住居址が確認されたため、この部分に関して調査を行ったほか、建物予定部分にトレンチを設定し、確認調査を行った。建物部分については、協議の上、現状保存が図られている。

検出された住居址は、南側がすでに削平されしており、東側は調査範囲外へ続いているため、確認されたのは、北西のコーナー部分のみである（第10図）。北側と西側にはベッド状遺構を持ち、壁際には壁周溝が巡る。柱穴1基が確認されており、2本柱であった可能性が高い。遺物から弥生時代後期の所産であるとみている。

出土遺物を、第11図に図示している。1から9が住居址の出土である。1は底部を欠損しているが、浅い鉢形の土器である。2はジョッキ形土器である。1・2とも器面が荒れており、調整痕が不明瞭であるが、丁寧な調整がなされている。非常に薄手であり、胎土も精製されている。3は器台である。4は底部から脚部のみ残存しており、小形の甕とみている。胎土はやや粗い。5から7は甕の脚部である。8は円盤状石製品、9は石包丁である。このほか、内外面に粗いハケメを持つ甕の胴部片が出土している。10は包含層出土の白磁碗である。



第8図 高岡原道路地点調査地位置図(B地点) S=1/5,000

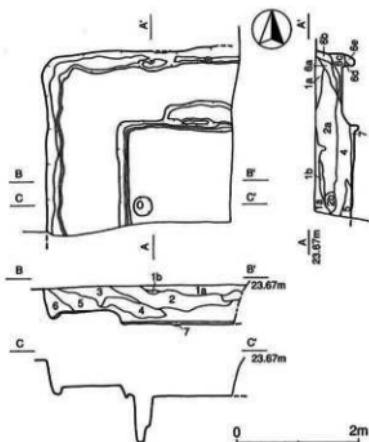


第9図 高岡原遺跡調査地周辺図・トレンチ配置図 S=1/1,000



写真8 高岡原遺跡B地点住居址完掘状況

II 平成11年度の調査



第10図 高岡原遺跡遺構実測図 S=1/80

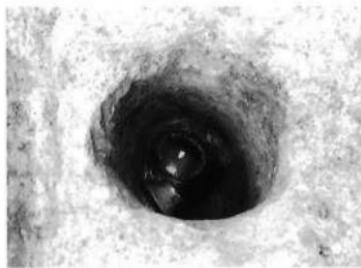
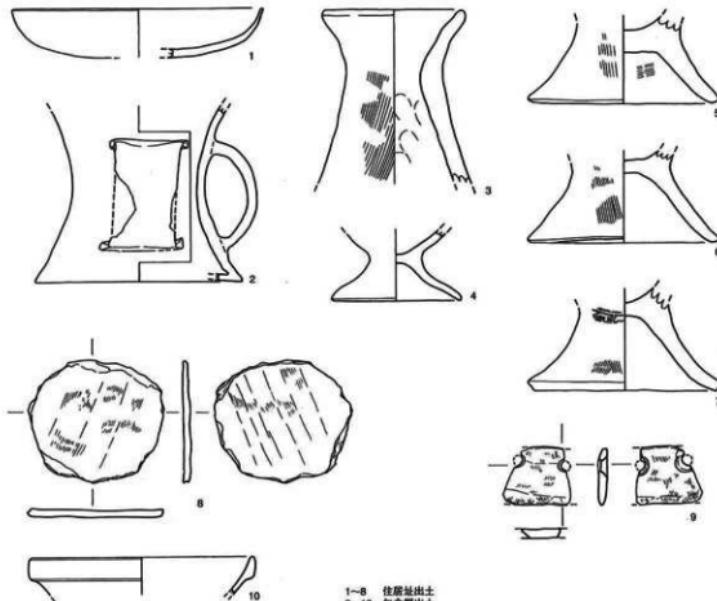


写真9 高岡原遺跡B地点住居址遺物出土状況

- | | | |
|------|-------------------|--|
| 1a | 暗褐色土 | しまりがあり、あまり粘性を有しない。明茶褐色土を斑点状にわざかに含む。 |
| 1b | 暗褐色土 | しまりがあり、あまり粘性を有しない。明茶褐色土を斑点状にわざかに含む。 |
| 2a | 茶褐色土 | しまりがあり、粘性を有しない。微細な褐色をわずかに含む。砂土を含む。住居的明茶褐色土を含む。(底がくっただらぬ) |
| 2b | 茶褐色土 | しまりがあり、粘性を有しない。微細な褐色をわずかに含む。 |
| 3 | 明茶褐色土 | しまりがあり、粘性を有しない。明茶褐色土を絶対的に少含む。 |
| 4 | 暗褐色土 | しまりがあり、粘性を有しない。明茶褐色土を斑点状に含む。 |
| 5 | 茶褐色土 | しまりがあり、粘性を有しない。微細な褐色を含む。はりやや弱い。 |
| 6a | 暗褐色土 | 全体的に明茶褐色土を斑点状に、混じたように含む。 |
| 6b | 暗茶褐色土 | しまりがあり、粘性を有しない。微細な褐色を含む。 |
| 6c | 茶褐色土 | しまりがあり、粘性を有しない。明茶褐色土を斑点状に含む。 |
| 6d,e | 茶褐色土・明茶褐色土(塊状)混合土 | 混入の混合土。 |
| 7 | 埋土・泥化物集中層 | |



第11図 高岡原遺跡出土遺物実測図 S=1/3

0 10m

II 平成11年度の調査

5 高岡原遺跡（C地点）

所在地：山田字高岡原2006-1

対象面積：2762.3m²

調査期日：11年11月28日

担当者：末永 崇

調査地は、高岡原遺跡の北東部に位置し、北東側の棟峰遺跡の範囲とほぼ接する。棟峰遺跡との間には、境川に向かい北西へ広がる小規模な谷があり、調査地の北側は大きく段落ちしている。標高は約27mである。

調査原因は、店舗の建設である。建物及び看板の基礎部分について、調査を行っている。その結果、溝状遺構1条、土坑2基、ピット30数基が検出され、古代～中世の遺物が確認された。（第14図）

溝状遺構（SD-1）は、調査範囲のほぼ中央を、地形に合わせて湾曲しながら東西方向に延びている。断面形は逆台形状を呈し、幅1～1.5m、検出時の深さは約50cmである。埋土は黒褐色土を基本とし、掘り返しなどもみられず、全体的に覆土の変化はみられない。

出土した遺物は、ほとんどが古代の須恵器、土師器であり、弥生時代と中世の遺物が若干含まれている（第15図）。4・9を除き、いずれもSD-1の出土である。また、3が土師器の椀、14～16が瓦である以外は、いずれも須恵器である。1は蓋である。つまみの有無は不明である。調整は回転によるナデであり、天井部分については、不定方向のナデが認められる。2・3は椀の底部である。4は盤、5は高壺の脚部である。6は風字硯であるとみているが、調整はやや粗く、墨の痕跡も明瞭ではない。7～12は壺である。7・8が口縁部、9～12は胴部片である。13は瓶である。外面は平行のタタキ、内面は粗いナデの痕跡を残す。底部はわずかに残存しておらず、調整は不明である。



第12図 高岡原遺跡調査地位置図(C地点) S=1/5,000

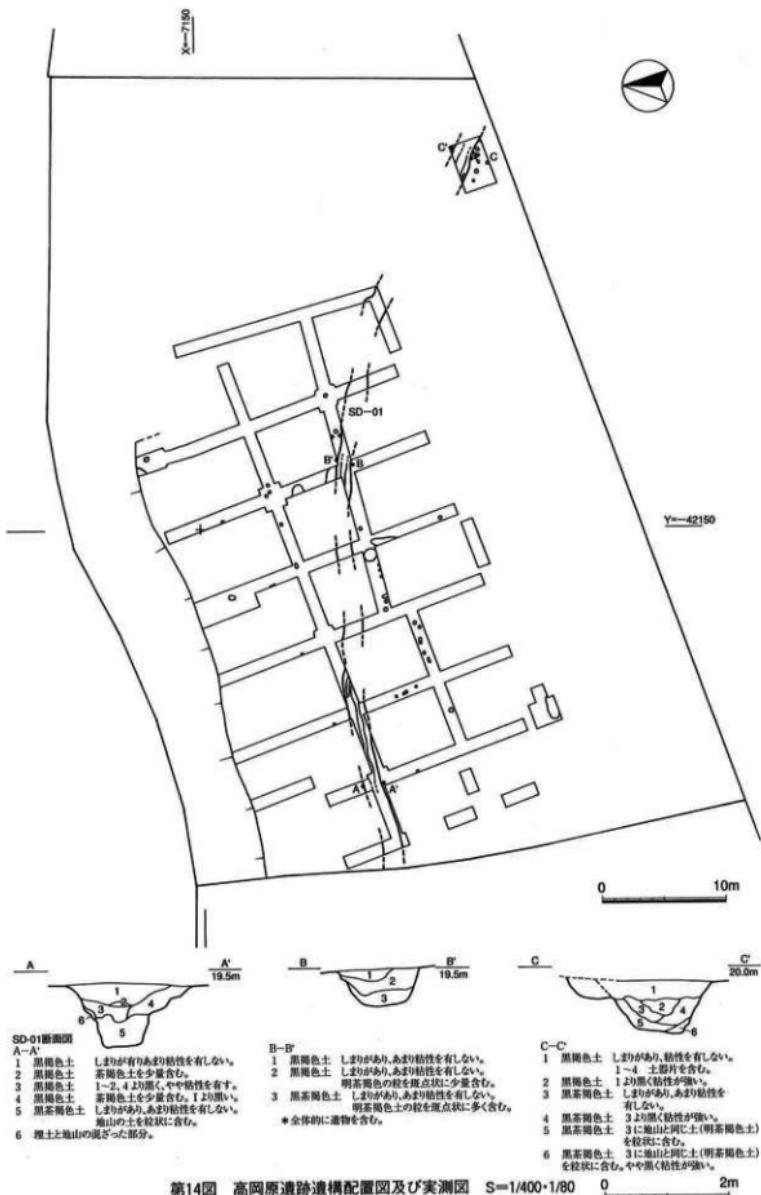


第13図 高岡原遺跡調査地周辺字図 S=1/1,000



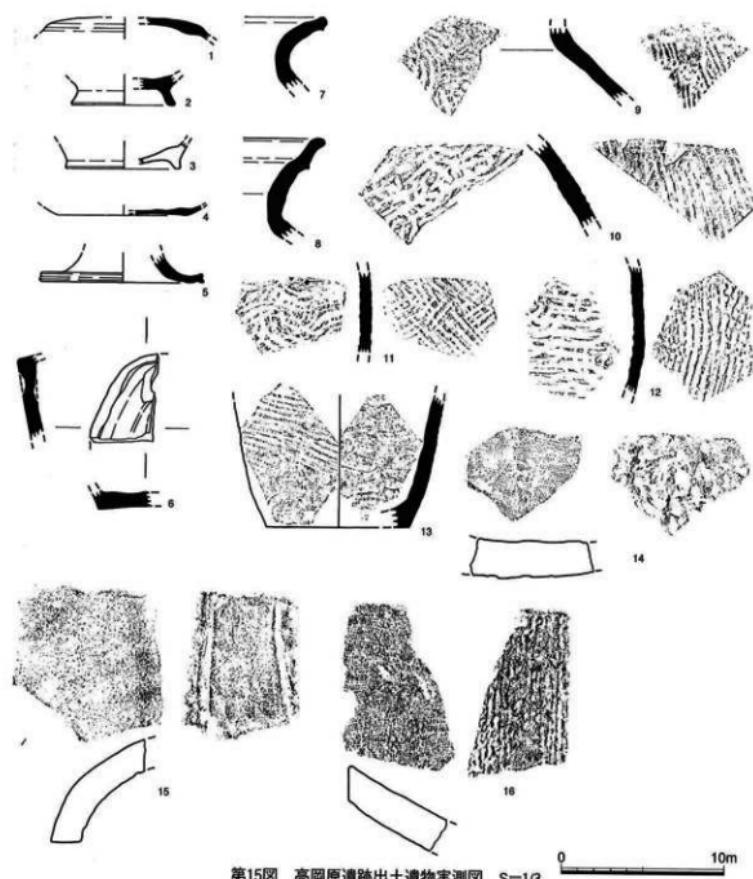
写真10 高岡原遺跡遺景（西より）

II 平成11年度の調査



第14回 高岡原遺跡遺構配置図及び実測図 S=1/400・1/80 0 2m

II 平成11年度の調査



第15図 高岡原遺跡出土遺物実測図 S=1/3



写真11 高岡原遺跡C地点遺構検出状況



写真12 高岡原遺跡C地点SD-01土層堆積状況

II 平成11年度の調査

6 高岡原遺跡（D地点）

所在 地：山田字高岡原2010-1、2006-5

対象面積：711.71m²

調査期日：11年11月29日

担当 者：田中康雄

調査地は、高岡原遺跡の東部に位置し、標高は約27mである。C地点から、都市計画街路築地立願寺線を挟んだ南側である。

調査原因は歯科診療所の建設である。建物の予定範囲に4カ所のトレンチを設定した。その結果、竪穴住居址及びピットの集中する地点が確認されたため、2カ所についてトレンチを拡張し、発掘調査を行っている。

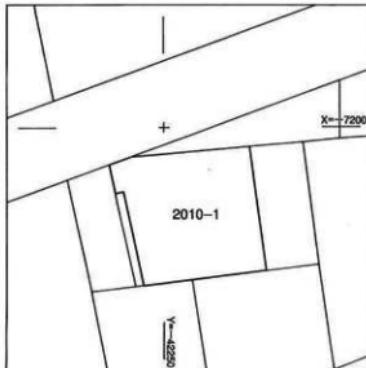
検出した遺構は、竪穴住居址1基、土坑3基、ピット13基である。（第18・19図）

住居跡は、南東のコーナー部分のみ確認しており、平面形及び規模は不明である。東側にベッド状遺構を持つ。ピットについては、主柱穴の可能性がある。覆土下層に焼土・炭化物の集中あり、炭化材が出土している。遺物は量が少なく、ほとんどが小片である。第19図1に図示したものが、唯一、完形に近い。図示していない他の小片の遺物も含め、弥生時代後期の所産と考えている。ピットの集中する部分については、南側が低くなってしまい、それ自体が何らかの遺構である可能性があるが、性格等明らかになつていない。

その他、包含層などから古代の須恵器・土師器が若干出土している。第19図2・4は須恵器、3は土師器である。2・3はそれぞれ楕の底部、4は壺の胴部片である。



第16図 高岡原遺跡調査地位置図（D地点）S=1/5,000

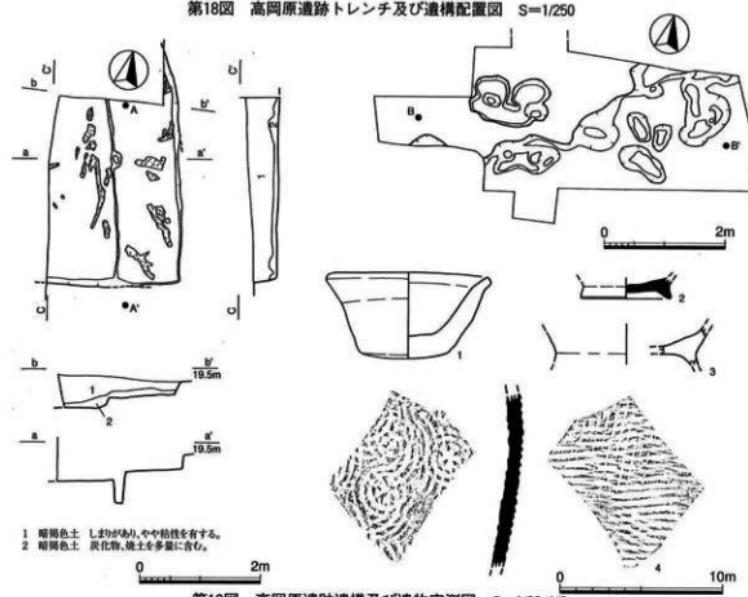
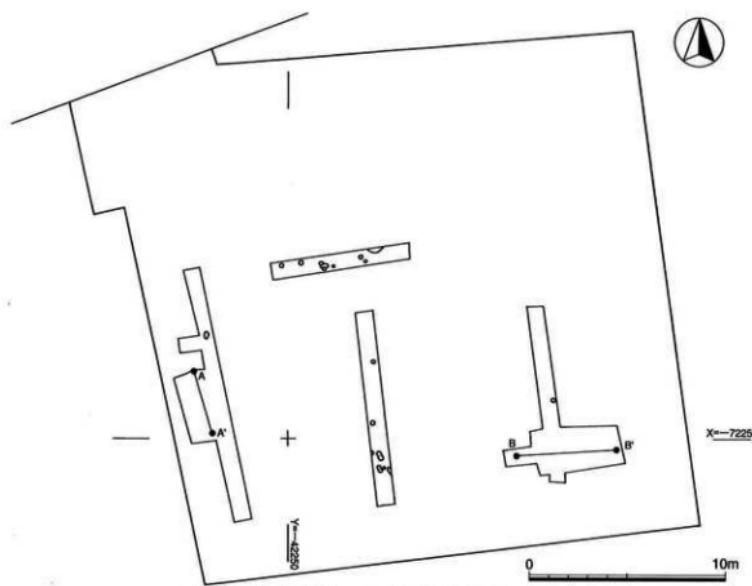


第17図 高岡原遺跡調査地周辺字図 S=1/1,000



写真13 高岡原遺跡D地点住居址完掘状況(南より)

II 平成11年度の調査



II 平成11年度の調査

7 玉名平野条里跡(A地点)・両追間日渡遺跡

所 在 地：玉名1218-2 ほか5筆

調査期日：12年1月21日

担 当 者：末永 崇

玉名平野条里跡は、玉名市域では複数カ所に認められており、平成11年度の調査地点は、いずれも菊池川右岸に広がる玉名平野条里跡に位置している。A地点は、弥生・古墳時代の包蔵地とされている両追間日渡遺跡にも含まれている。

調査地は標高5m前後の地点で、現況は水田である。市道の改良工事に伴い、確認調査を行った。

予定地内の5カ所にトレンチを設定し、重機掘削により確認を行った。いずれのトレンチも1m程度掘り下げて確認を行っている。砂質土・粘性土が堆積しており、第1トレンチにおいて、近世から近代にかけての溝が検出された以外、遺構・遺物とも確認されていない。その後の措置は、慎重工事である。

8 玉名平野条里跡(B地点)

所 在 地：河崎字油出244-1～両扶間字油出419

対象面積：935.7m²

調査期日：12年3月9日

担 当 者：西田道彦

調査地は、標高5m前後の地点であり、現況は水田である。農道の改良工事に伴い、確認調査を行った。調査地の北側は国道208号玉名バイパスに接しており、やや東よりの地点について、柳町遺跡として、県文化課・玉名市教育委員会が発掘調査を実施している。

調査地内の4カ所にトレンチを設定し、重機掘削により1m程度掘り下げて確認を行った。20cm前後の厚さでシルト混じりの粘性土が数層堆積しており、遺構・遺物とも確認されていない。その後の措置は、慎重工事である。



第20図 玉名平野条理跡調査地位置図 S=1/20,000



第21図 玉名平野条理跡トレンチ配置図(A地点) S=1/4,000



第22図 玉名平野条理跡トレンチ配置図(B地点) S=1/4,000

9 下村城跡

所在 地：下字高城地内

調査時期：12年3月9日～28日

担当 者：西田道彦・末永 崇

下村城跡は、玉名平野東側の標高約47mの独立丘陵上に位置する、中世城の推定地である。

土地所有者及び関係者から、近い将来に調査地を開発する予定があり、遺跡・遺構の状況を把握するため確認調査の要望があったため、下村城の縄張り、遺構の性格及びその後の処置について必要な情報を得ることを目的に、確認調査を行った。

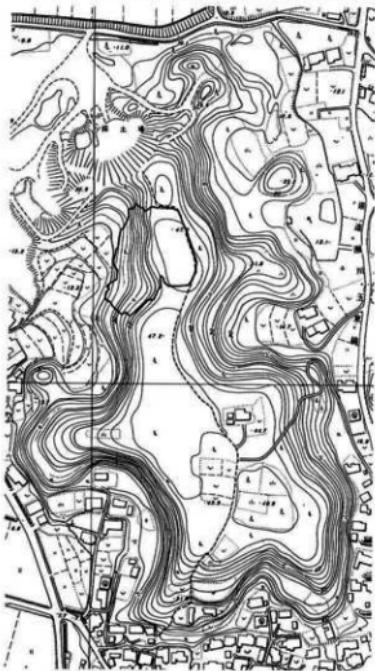
開発が予定されている面積は1.5～1.8haであるが、1.2ha程度については、昭和59年2月に調査が行われた後、山砂採取により消滅している。重機によるトレンチ掘削を行い、堀状遺構が確認されたため拡張しており、調査面積は280m²程度になっている。調査の結果、一部で弥生時代の遺物包含層が確認されて、ピット2基、土坑1基が検出された。中世の堀状遺構は2本が確認されており、中世土器の細片が、ごく希に出土している。

遺物の包含も少なく、堀状遺構も所謂中世城的断面形態をなしておらず、中世城跡であることを証明する積極的証拠に乏しい。ただ、すでに消滅している部分が中世城の本丸的役割を果たしていたものならば、調査地は捨曲輪の可能性も否定できない。しかし畑作等によりすでに削平されており、曲輪内の遺構の残存は低率だと思われる。

調査後、開発予定自体が中止され、丘陵の頂部については、ほぼ現状保存がなされているが、周辺では、山砂の採取が続けられており、注意が必要な状況である。なお後日、西側斜面に横穴墓が存在したことが確認されている（城の浦横穴）。

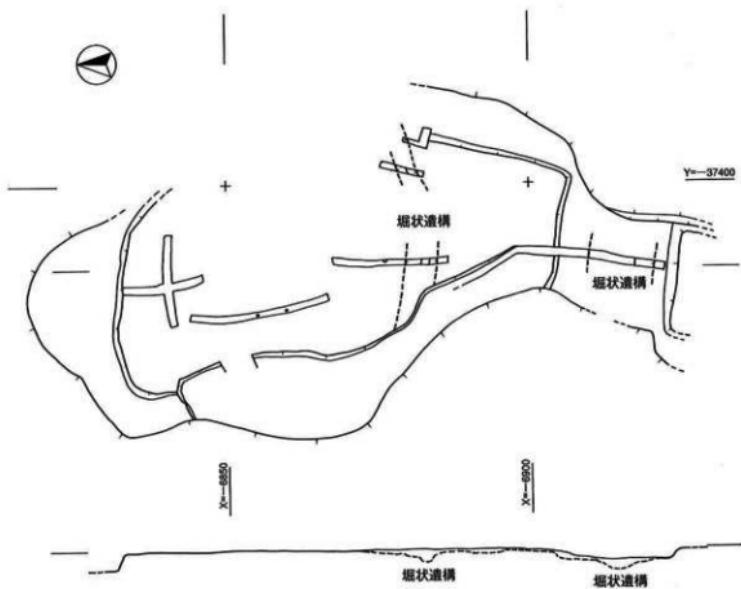
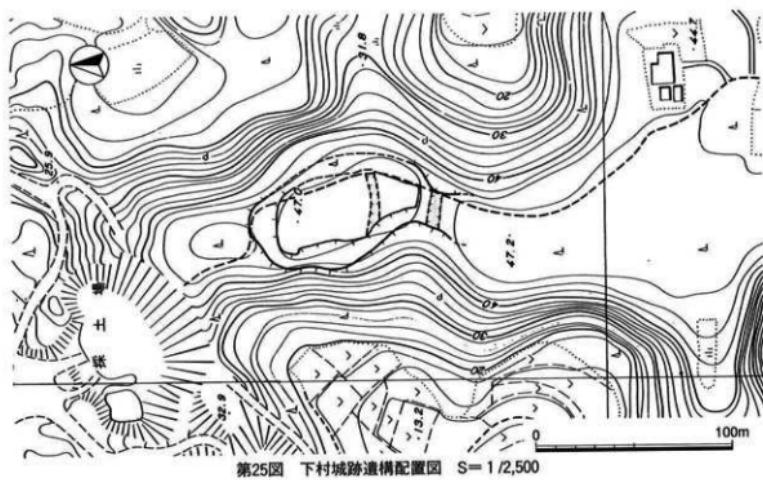


第23図 下村城跡調査地位置図（1969年） S=1/10,000



第24図 下村城跡調査地位置図（1994年） S=1/5,000

II 平成11年度の調査



II 平成11年度の調査



写真14 玉名平野及び下村城跡遠景（西より）



写真15 下村城跡遠景（西より）

III 平成12年度の調査

III 平成12年度の調査

中尾・春出地区
築地東遺跡（A地点）
高岡原遺跡
亀甲遺跡
城の浦横穴
岩崎城跡
西田遺跡
菊尾遺跡
築地東遺跡（B地点）
五郎丸遺跡（A地点）
刀研遺跡
玉名郡倉跡推定地（A地点）
糠峯遺跡（A地点）
春出遺跡
糠峯遺跡（B地点）
高岡原遺跡（B地点）
五郎丸遺跡（B地点）
立願寺廃寺（A～D地点）
一本松遺跡
上小田宮の前遺跡
玉名郡倉跡推定地（B地点）
岩崎原遺跡
玉名平野条里跡
吉丸西遺跡

III 平成12年度の調査

1 中尾・春出地区

所 在 地：中尾・山田・中地内

対象面積：28ha

調査時期：12年4月1日～5月31日

担当者：竹田宏司・末永 崇

玉名市街地北西部に位置する、大字中尾・山田・中にまたがる28ヘクタールの地域において土地区画整理事業が予定されており、調査依頼により試掘確認調査を実施した。予定地内には、周知の遺跡として、春出遺跡、玉名平野条里跡、ホカンヤカタ、平島遺跡、馬場遺跡が含まれているほか、北側は高岡原遺跡、南東側は田島遺跡が接している。平成11年度にホカンヤカタとして一部踏査等を実施しており、平成12年度に試掘確認調査を実施した。踏査及び試掘確認調査の一部を国・県の補助事業として実施している。

中尾地区的調査

中尾地区的地形は、境川左岸の氾濫原と、玉名台地低位段丘上の標高10～17mの地域、台地に入り込んだ開析谷の部分に分けることができる。現時点では、対象地内の33筆について調査を実施している。このうち5筆がホカンヤカタ、2筆が玉名平野条里跡に含まれているほかは、周知の範囲外である。ホカンヤカタは、中世の居館址と考えられている遺跡である。

中尾10・11番地（第28・29図）

境川の氾濫原に位置する、標高9m前後の地点である。いずれも玉名平野条里跡の範囲内である。現況は水田と宅地になっており、10-1Tについては、1m以上客土が行われている。砂層が厚く堆積しており、湧水が著しいことから、掘削が困難であった。11-1Tにおいて、標高7m付近で木片や杭列が確認されているが、遺物が出土していないため、時期は不明である。



写真16 中尾地区遠景（西より）



写真17 春出地区遠景（西より）



写真18 中尾11番地全景（西より）



写真19 中尾39番地 2T土層堆積状況

III 平成12年度の調査

中尾39・40番地（第30～32・67図）

平島遺跡東側の谷に位置する標高11～12mの地点であり、現況は水田である。谷頭部分は今日でも湧水があり、溜池となっている。遺構は確認していないが、Ⅲ層を中心に、多量の遺物が出土している。弥生時代後期を中心、古代・中世の遺物が混在しており、東西の台地からの流入もしくは客土等に伴い移動した可能性が高いが、遺物はいずれも原型を留めているものが多い。第66図10は、ジョッキ形土器の底部である。23は、高壙の脚部の可能性があるが、形状から、器台として実測している。

中尾44・45番地（第33～36図）

調査地北端の台地上に位置する標高15～17mの地点であり、現況は果樹畠である。北側は、高岡原遺跡の範囲に接している。44-1Tと45-1T北側で、溝状遺構が検出された。西側は谷へ続き、東側は45番地の東側にある南北に細長い低地の部分へ続く、堤状の遺構の可能性がある。45-2T・5Tでも溝状遺構が検出されている。また、44-3Tでは竪穴住居址が検出されている。遺物は、両地点とも小片のみであるが、弥生時代後期のものが多く、古代・中世の遺物が混在する。

中尾61番地（第37・38図）

ホカンヤカタ北側の台地上に位置し、谷に面した東斜面の標高約15mの地点である。遺構・遺物ともに密度は薄い。摩滅した小片がほとんどであり、弥生時代のほか、古墳時代の可能性がある土師器・須恵器、中世の瓦器碗などが出土地している。

中尾63・69～71番地（第37～40・67図）

ホカンヤカタと馬場遺跡の間の谷に位置し、現況は水田である。谷頭付近は湧水があり、溜池となっている。標高は、谷頭に近い63番地が約12m、69～71番地が10m前後である。砂質土・



写真20 中尾40番地近景（東より）



写真21 中尾44・45番地近景（東より）



写真22 中尾44番地遺構検出状況（東より）



写真23 中尾61番地調査状況（東より）

III 平成12年度の調査

粘性土が厚く堆積しており、谷の中心に近い部分では、地表面下約1~1.5m付近で、植物遺体を多量に含む黒褐色土の堆積がある。この層及びその上下の層から、弥生時代及び古代の遺物が比較的まとまって出土しているほか、69番地では、少数ながら古墳時代の土器が出土している(第67図15~17)。やや上位の層では中世の遺物も散見される。第67図2は擂鉢、4は瓦器碗、5は土師器の壺、22・23は青磁の碗である。

中尾106・113・114番地 (第41・42・67・68図)

ホカンヤカタ西側の谷に位置する標高11~12mの地点であり、現況は水田である。谷頭付近は湧水がみられる。いずれも砂粒を含む粘性土が厚く堆積している。西側の谷同様、黒色~黒褐色の植物遺体を含む層が認められ、弥生時代及び古代・中世の遺物が出土している。やや古代の比率が高く、弥生時代後期のほか、中期の遺物も出土している(第68図1~3)。第68図1は、小形の甕形土器であり、外面を赤彩している。

中尾117番地 (第43・44・68図)

ホカンヤカタ北側の台地上に位置する、標高14~16mの地点である。現況は果樹畠である。117-2Tにおいて、竪穴住居址が検出された。覆土中より甕の胴部片が出土しているが、時期は不明である。弥生時代後期の可能性がある。そのほか、弥生時代後期、古代、中世の遺物が出土している。

中尾118・119番地 (第45~47図)

ホカンヤカタ北側の台地上に位置する、標高13.5~15.5mの地点であり、東側の谷に面した緩傾斜地である。現況は畠と竹林である。両地点とも表土層の下はほとんど無遺物層と判断しており、東側にわずかに包含層が認められる。弥生時代、古代、中世の遺物が出土しているが、小片がほとんどである。比較的中世の遺物が



写真24 中尾63・69~71番地全景 (北より)



写真25 中尾63番地 1T土層堆積状況



写真26 中尾106・113・114番地全景 (南より)



写真27 中尾117番地 2T遺構検出状況

III 平成12年度の調査

目につく。第68図13・14は、青磁の椀である。遺構は、ピット群と溝状遺構が検出されている。中尾123番地（第48・49・68図）

ホカンヤカタ北側の台地上に位置する標高約16mの地点であり、現況は畠である。表土層の下は無遺物層と判断しており、上位の土層は失われている。123-2Tにおいて弥生時代後期の可能性がある竪穴住居址を検出したほか、123-1Tでは、古代とみられる柱穴・土坑が検出されている。弥生時代・古墳時代・古代・中世の遺物が出土している。

中尾132番地（第50・51図）

ホカンヤカタ北側の台地上に位置し、西側の谷に面する標高約15.5mの地点である。現況は畠である。表土層の下は無遺物層と判断しており、上位の土層は失われている。東西方向に延びる、逆台形状の断面形を持つ小規模な溝状遺構などが検出されている。遺物は、弥生時代のものは見られず、古代・中世の小片が出土している。なお、東側には44・45番地東側から、細長い低地が続いている。

中尾142・145・146・147・148番地

（第52～55・68図）

東西を谷に挟まれた、幅70～80mの尾根状に延びる台地上に位置する。現況は、畠、竹林などとなっている。いずれの地点も、上位の土層がほぼ削平されている。142番地は、遺構・遺物ともに未確認である。145番地は西側で包含層が確認されており、145-1Tでは、竪穴住居址が検出された。弥生時代中期の遺物を出土している（第68図18）。145番地南側では東西方向の溝状遺構が検出されており、146-1T～5Tの溝状遺構と接続する可能性がある。また、147-1T～3Tでも検出されており、145・146番地の溝状遺構と同一のものである可能性がある。146-5Tでは立ち上がりが確認されており、土橋

の可能性がある。溝状遺構からは、中世の土師器・擂鉢などが出土している（第68図19～21）。148番地では、小規模な溝状遺構が、東西・南北各方向に数条検出されており、中世の擂鉢・瓦質・土師質の土器片が出土している。

中尾151・153・154・156～159番地

（第57～60・68図）

台地の南端部に位置し、境川の低地に向かって緩やかに傾斜している地点である。台地の高所に位置する151～154番地は竹林、緩傾斜地に位置する156～159番地は畠地となっている。標高は10～15mである。崖線が不明瞭ではあるが、156・157番地の間に湧水があり、池となっている。151～158番地では、ピットや小規模な溝状遺構などが検出されているのみで、遺構密度は低い。遺物は、156-1Tで中世の土師器壺・瓦器椀（第68図23・24）、158番地で弥生時代中・後期の土器（第68図25～27）、中世の擂鉢（第68図28）等が出土している。159番地では、159-3Tで竪穴住居址が検出されており、古墳時代の土師器が出土している（第68図32～36）。そのほか、弥生時代後期の土器（第68図29～31）、縄文時代晩期の深鉢口縁部（第68図37）が出土している。

春出地区の調査

春出地区は、周知の春出遺跡・田島遺跡の範囲内で、6筆に対し確認調査を実施している。春出遺跡は、熊本県遺跡地図では古墳時代の包蔵地とされているが、菊池川下流域詳細分布図では、弥生時代・古代・中世の包蔵地となっている。田島遺跡も古墳時代とされているが、近年の玉名市教育委員会の試掘確認調査では、弥生時代・古代の遺構・遺物が確認されている。調査地点は、いずれも台地上の標高15～17mの地点である。

III 平成12年度の調査

中1430番地（第61・62図）

台地上の標高16m前後の地点で、南への緩傾斜地である。現況は畠である。遺物包含層が確認され、ピット群及び溝状遺構もしくは土坑とみられる遺構が検出されている。

中1439番地（第61・62図）

台地の西側縁辺に位置する標高15m前後の地点で、西側は境川沿いの低地への急激な傾斜をもって崖線を形成している。現況は畠である。両トレンチとも上位の土層を欠いており、畠地として平坦に造成した際の切り盛りの可能性がある。1Tでは1m以上の深さまで攪拌されている状態である。2Tにおいて小穴数基が検出されている。

中1441番地（第61・62・68図）

台地の西側縁辺に位置する標高約16mの地点で、現況は平坦な畠地となっているが、西側への傾斜地であったと考えられる。両トレンチとも遺物包含層が確認されており、古代・中世の土器片が出土している。いずれも小片であるが、瓦器などが含まれている。第68図38は、須恵器であり、高杯の脚部である。1Tでは小規模な溝状遺構、2Tでは、竪穴住居址もしくは土坑の可能性がある遺構が確認されている。

中1446番地（第63・64図）

台地上の標高約16mの地点で、現況は平坦な畠地となっている。両トレンチとも遺物包含層が確認されているが、密度は薄く、ほとんど遺物を含まない。1Tでピット1基が確認されている。

中1449番地（第63・64図）

台地の西側縁辺に位置する標高14.5~15mの地点で、現況は畠地となっている。両トレンチとも遺物包含層が確認されているが、密度は薄く、ほとんど遺物を含まない。遺構は、南北方向に延びる小規模な溝状遺構が検出されている。

中1449番地（第63・65図）

台地の西側縁辺に位置する標高14.5~15mの地点で、現況は畠地となっている。両トレンチとも遺物包含層が確認されているが、密度は薄く、ほとんど遺物を含まない。遺構は、南北方向に延びる小規模な溝状遺構が検出されている。

中1454番地（第63・64・68図）

台地の西側縁辺に位置する標高約16.5mの地点で、現況は畠地となっている。両トレンチとも比較的密度の高い遺物包含層が確認されており、古代の土師器・須恵器、中世の瓦器などが出土している。第68図39は須恵器の蓋である。焼成は橙色である。40は土師質の土錐である。遺構は、南北方向に延びる小規模な溝状遺構、土坑、ピット等が検出されている。

以上が中尾・春出地区の試掘確認調査概要である。中尾地区では、各調査地点において、密度は高くないものの、縄文時代晩期から、弥生時代中期後期、古墳時代、古代、中世の遺物・遺構が確認されており、春出地区では、古代、中世の遺物・遺構が確認された。調査の時点で承諾書の得られた地点についてのみ実施しており、今後も、事業の進展に伴い、継続する予定である。

III 平成12年度の調査



番号は表2に対応

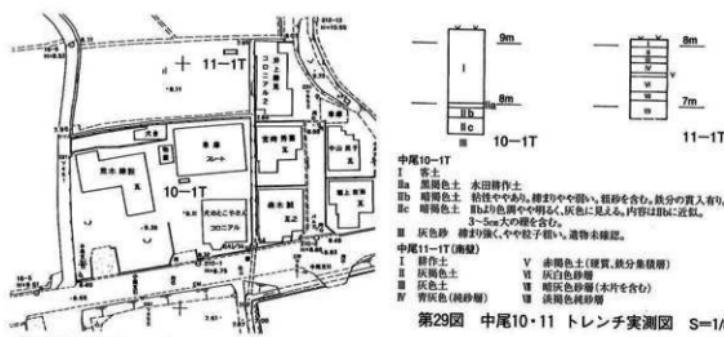
第27図 中尾・春出地区調査地位置図 S=1/5,000

III 平成12年度の調査

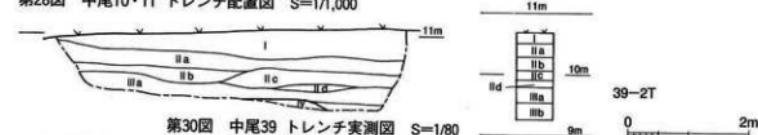
	所 在 地	地番	面積(m ²)	立地	遺 構	遺 物
1	大字中尾字川原	10-1	1109	平野	—	—
2	大字中尾字川原	11	570	平野	—	—
3	大字中尾字川原	39	1108	谷	—	弥生・古代・中世
4	大字中尾字川原	40	1151	谷	—	弥生・古代・中世
5	大字中尾字西原	44	919	段丘	住居址・溝・土坑 ピット	弥生・古代・中世
6	大字中尾字西原	45	904	段丘	溝・ピット	弥生・古代・中世
7	大字中尾字西原	61	495	段丘	ピット	弥生・古代・中世
8	大字中尾字西原	63	391	谷	—	弥生・古墳・古代・中世
9	大字中尾字西原	69	957	谷	—	弥生・古墳・古代・中世
10	大字中尾字西原	70	1084	谷	—	弥生・古代・中世
11	大字中尾字西原	71	710	谷	—	弥生・古代・中世
12	大字中尾字西原	106	1157	谷	—	弥生・古代
13	大字中尾字西原	113	903	谷	—	弥生
14	大字中尾字西原	114	646	谷	—	弥生・古代・中世
15	大字中尾字西原	117	1282	段丘	住居址・溝・土坑・ピット	弥生・古代・中世
16	大字中尾字西原	118	819	段丘	土坑・ピット	弥生・古代・中世
17	大字中尾字西原	119	1829	段丘	溝・ピット	弥生・古墳・古代・中世
18	大字中尾字西原	123-1	334	段丘	住居址・土坑・ピット	弥生・古代・中世
19	大字中尾字西原	132	391	段丘	溝	古代・中世
20	大字中尾字西原	142	500	段丘	—	—
21	大字中尾字西原	145	1020	段丘	溝	弥生
22	大字中尾字西原	146	618	段丘	溝	中世
23	大字中尾字西原	147	81	段丘	溝	古代・中世
24	大字中尾字西原	148	658	段丘	溝・ピット	古代・中世
25	大字中尾字西原	151	951	段丘	溝	—
26	大字中尾字西原	153	481	段丘	—	弥生・古代
27	大字中尾字西原	154	736	段丘	—	弥生・中世
28	大字中尾字西原	156	575	段丘	—	弥生・古代・中世
29	大字中尾字西原	157	800	段丘	—	中世
30	大字中尾字西原	158	807	段丘	ピット	弥生・古代・中世
31	大字中尾字西原	159	939	段丘	住居址・土坑・ピット	弥生・古墳・古代・中世
32	大字中字陣内	1441	615	段丘	溝・土坑・ピット	古代・中世
33	大字中字陣内	1446-1	768	段丘	ピット	古代・中世
34	大字中字陣内	1430	1306	段丘	溝・土坑・ピット	古代・中世
35	大字中字陣内	1449-1	293	段丘	溝	古代・中世
36	大字中字陣内	1439	367	段丘	ピット	古代・中世
37	大字中字陣内	1454-1	550	段丘	土坑・ピット	古代・中世

表2 中尾・春出地区調査地点一覧

III 平成12年度の調査



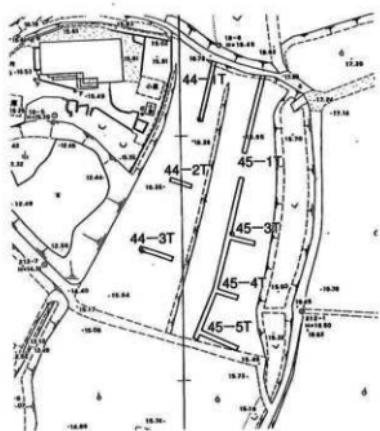
第29図 中尾10・11 トレンチ実測図 S=1/80



第32図 中尾40 トレンチ実測図 S=1/80



III 平成12年度の調査



第33図 中尾44・45 トレチ配置図 S=1/1,000

中尾44-1T-2T-3T

Ia 暗赤土

Ib 嫩褐色土 ややしまりあり、やや粘性を有しない。僵土。

IIa 嫩褐色土 ややしまりあり、あり粘性を有しない。細かな土器片含む。砂粒を全体的に含む。

IIb 嫩褐色土 ややまろやかで、粒子が細かく密である。他の地点と比べて色調が明るいが、黒褐色に相違する。

IIIa 嫩褐色土 ややしまり、粘性を有する。粒子間に粒子が細かい。

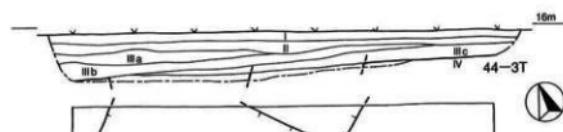
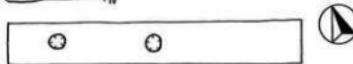
IIIc 嫩褐色土 しまりのない土質で、暗褐色～暗灰色のブロック状の粒子が多く含む。

IV にこい青褐色土 しまり粘性も低い。無機物質と判断。

V 嫩褐色砂質土 無機物質と判断。

VI にこい青褐色土 しまり粘性も低い。無機物質と判断。

7T 連続層土 白色土 しまり粘性とも強い。橙色、灰白色の小ブロック、粒子を多く含む。

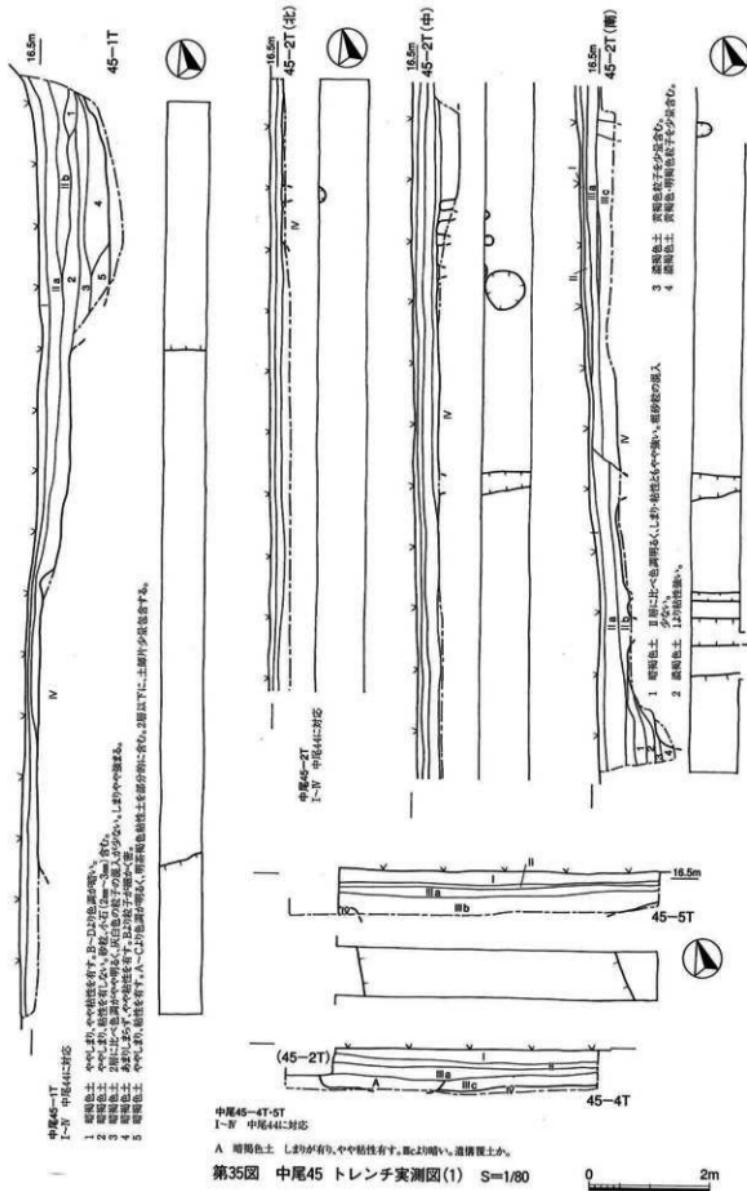


第34図 中尾44 トレチ実測図 S=1/80

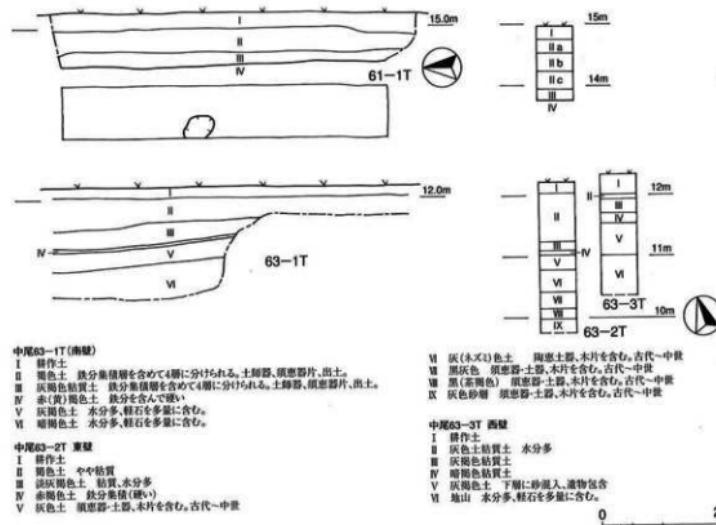
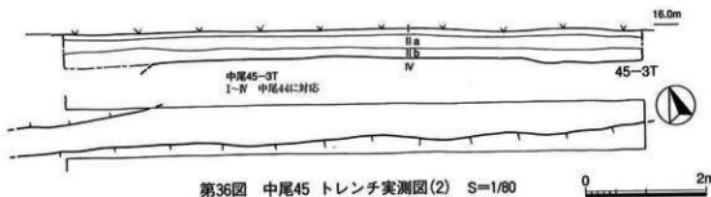


0 2m

III 平成12年度の調査



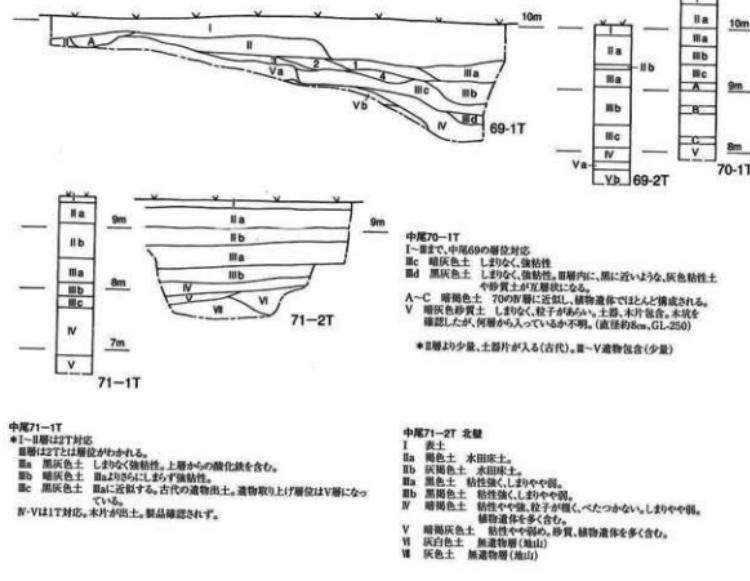
III 平成12年度の調査



III 平成12年度の調査



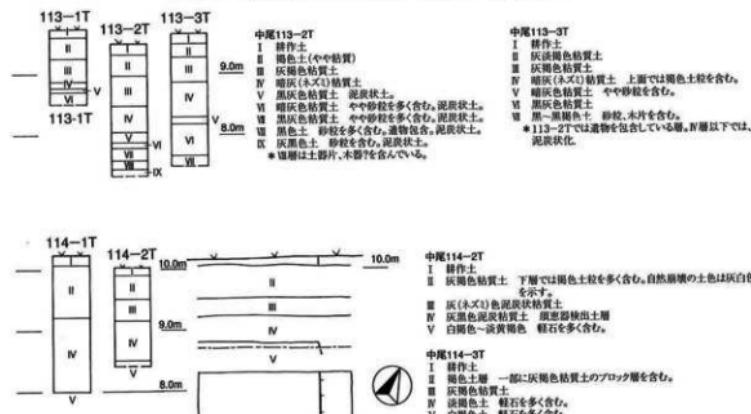
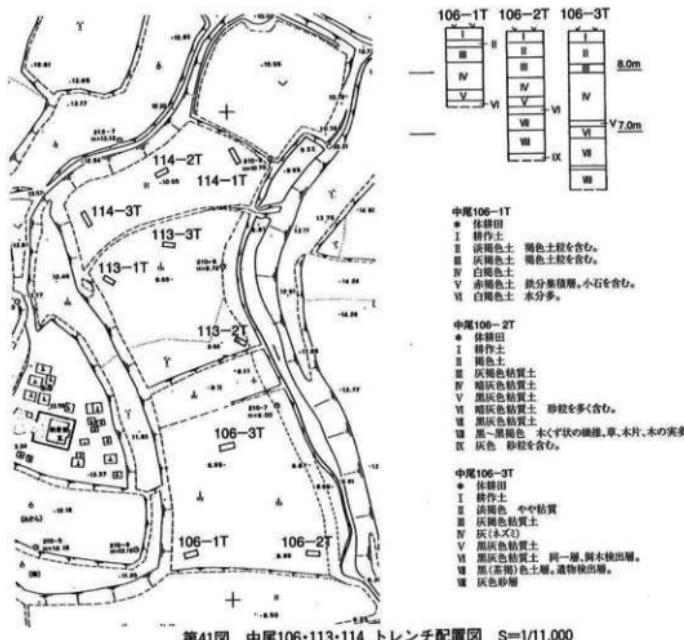
第59図 中尾69-70/71 トレンチ配置図 S=1/1,000



第三回 1980年1月1日 初版発行

www.ijerpi.org

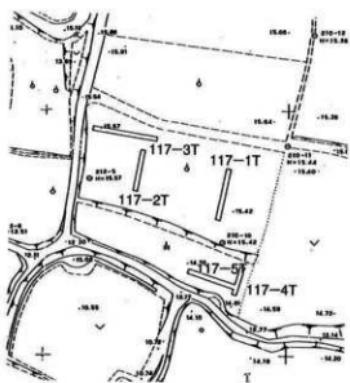
III 平成12年度の調査



第42図 中尾106・113・114 トレンチ実測図 S=1/80

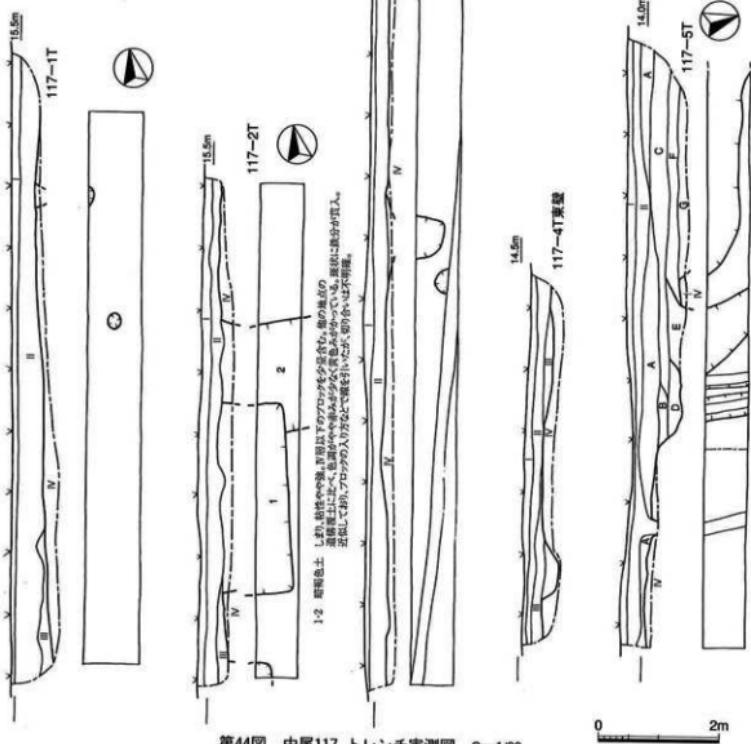
Scale: 0 2m

III 平成12年度の調査



第43図 中尾117 トレーンチ配置図 S=1/1,000

中尾117-1T-0T
 I 植生土
 II 密度土 やや粘り、粘性やや弱い。土質細粒分含む。砂粒を含む。田耕作土。
 III 黒褐色土 やや粘り、粘性やや弱い。粒が粗く密である。透水性良好。
 IV 海色土
 V 黑褐色土 やや粘り、粘性やや弱い。透水性良好。



第44図 中尾117 トレーンチ実測図 S=1/80

III 平成12年度の調査

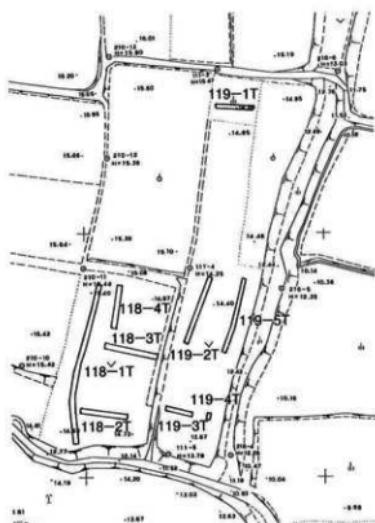
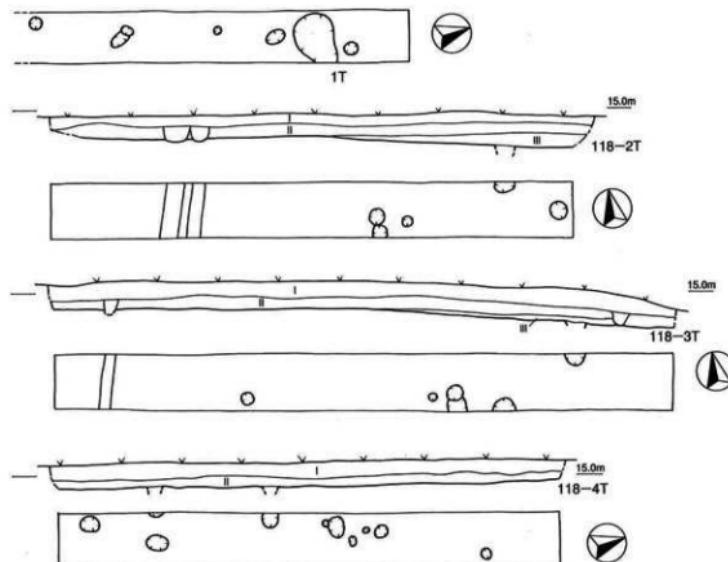


写真28 中尾118番地調査状況

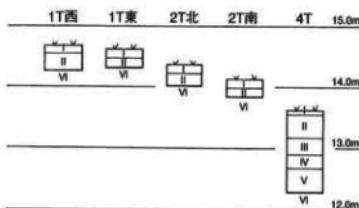
第45図 中尾118・119 トレンチ配置図 S=1/1,000



第46図 中尾118・119 トレンチ実測図 S=1/80

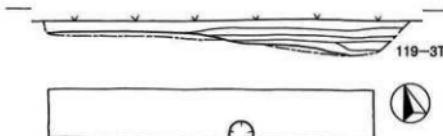
0 2m

III 平成12年度の調査



中尾119-1T～4T

- I 耕作土
- II 暗褐色土 粘性、しわともやや強。砂粒を多く含む。焼土、炭化物混泥、近世以降、古代の陶器を含む。
- III 暗褐色土 しわ、粘性がより強まる。色調は12T同様、内容的にはⅡ層と変わりないが、焼土、炭化物やや多く混じる。ローリング等を引いた土壌の小片を含む。下限は不明。
- IV 黒色土 しわ、粘性がやや弱い。焼土、炭化物粒子、暗褐色土ブロック(Ⅳ層?)を含む。小石、瓦礫等を含む(古層)。
- V 暗褐色土 しわが大きくなる。粘性が強まる。色調はⅢ層に比べてやや明るい。上位でやや大粒の土粒子(粗粒土)を含む。下限不明。
- VI にじみ褐色土 しわの粘性が強め。無機物質と粗粒(地山)

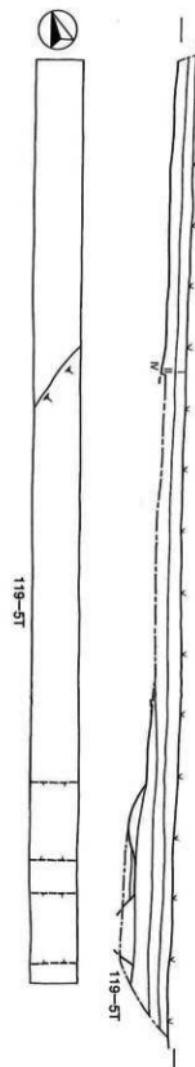


中尾119-5T

- I 耕作土
- II 暗褐色土 12Tの間に近似
- III 暗褐色土 且前に近似。焼土、炭化物层。褐色、灰白色の小プロック粒子を含む。
- IV にじみ褐色土 粘性土、砂質土、瓦礫状を含する。無機物質。
- V にじみ褐色土 ややまとめの弱い粘質土。
- A-B 底覆土、Ⅲ層に近似。やや色調が明るくみえる。



写真29 中尾119番地近景（南より）



第47図 中尾119 トレンチ実測図 S=1/80

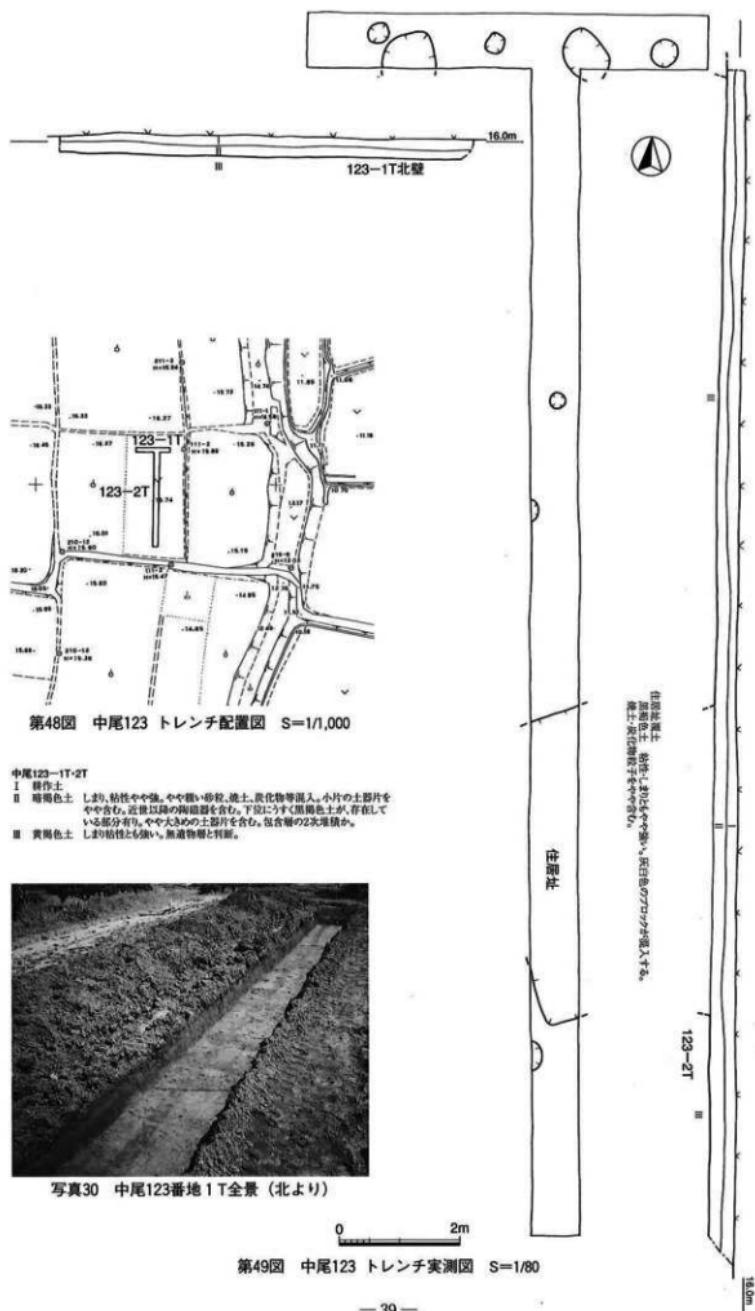


写真30 中尾123番地 1丁全景（北より）

中尾123-1T-2T

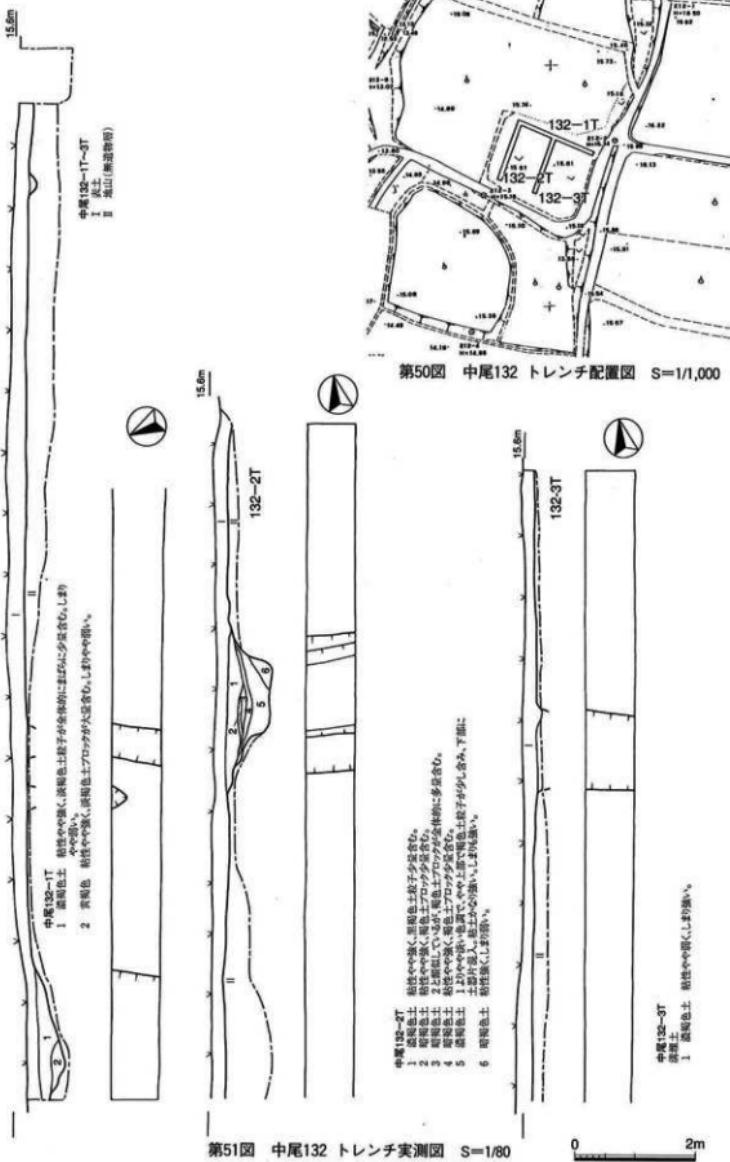
- | | |
|------|--|
| 耕作土 | しまじ、粘性や強。やや粗い砂粒、壤土、炭化物等混入。小片の土器片を含む。 |
| 暗褐色土 | 近世以降の陶器片を含む。下位にうすく黒褐色土が、存在している部分多い。やや粗い土器片を含む。包含層の2次堆積か。 |
| 黄褐色土 | しまじ部分多い。然れども土器片を判断。 |



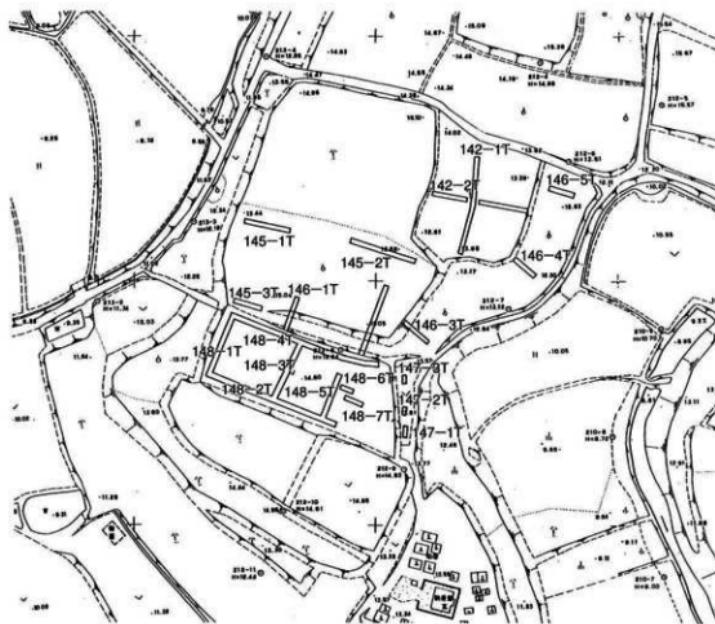
0 2m

第49図 中尾123 トレンチ実測図 S=1/80

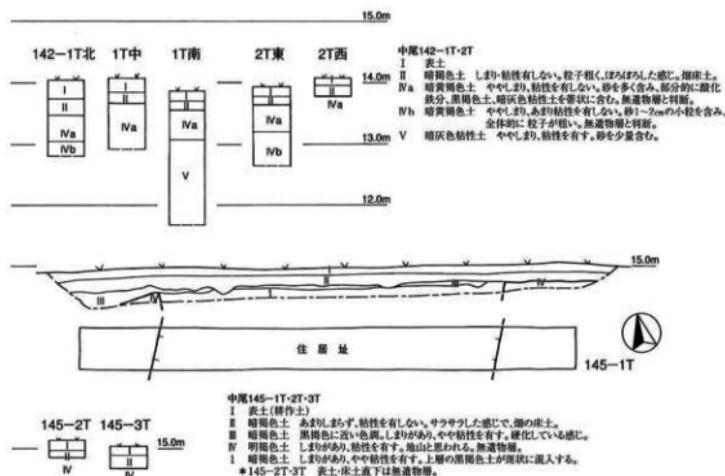
III 平成12年度の調査



III 平成12年度の調査



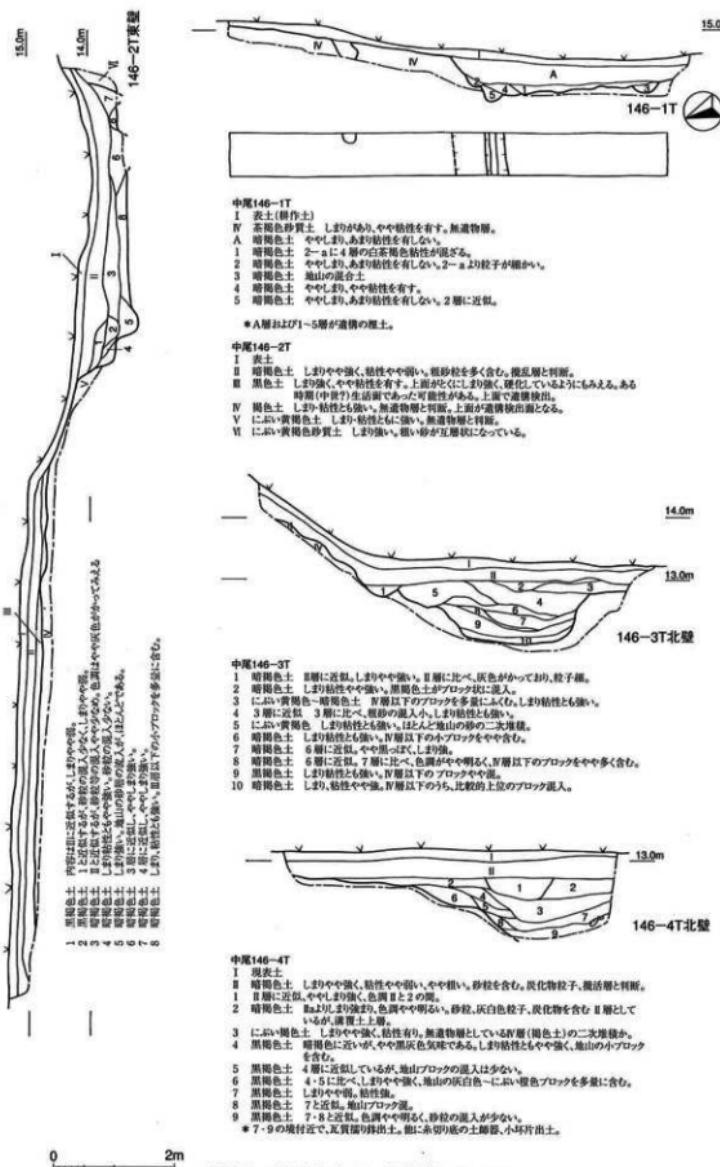
第52図 中尾142・145・146・147・148 トレンチ配置図 S=1/1,000



第53図 中尾142・145 トレンチ実測図 S=1/80

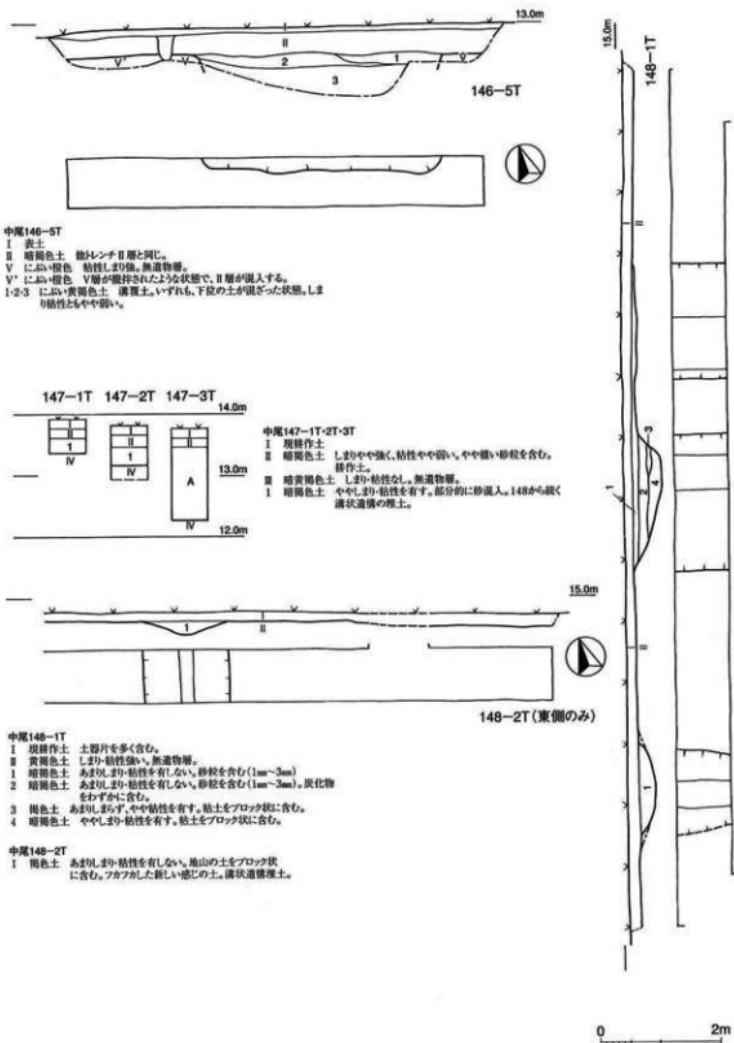
0 2m

III 平成12年度の調査



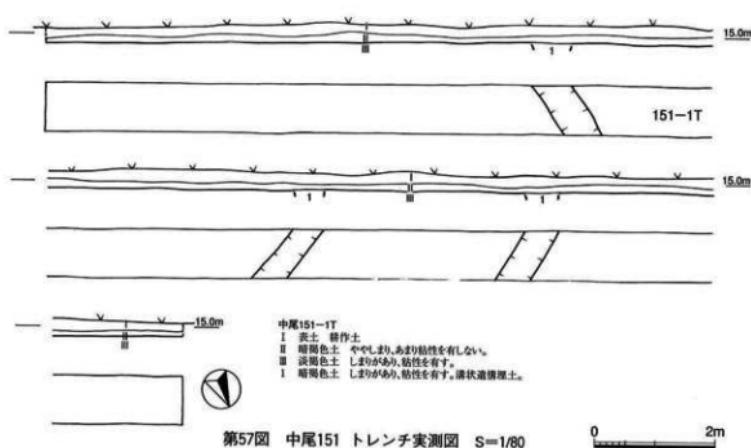
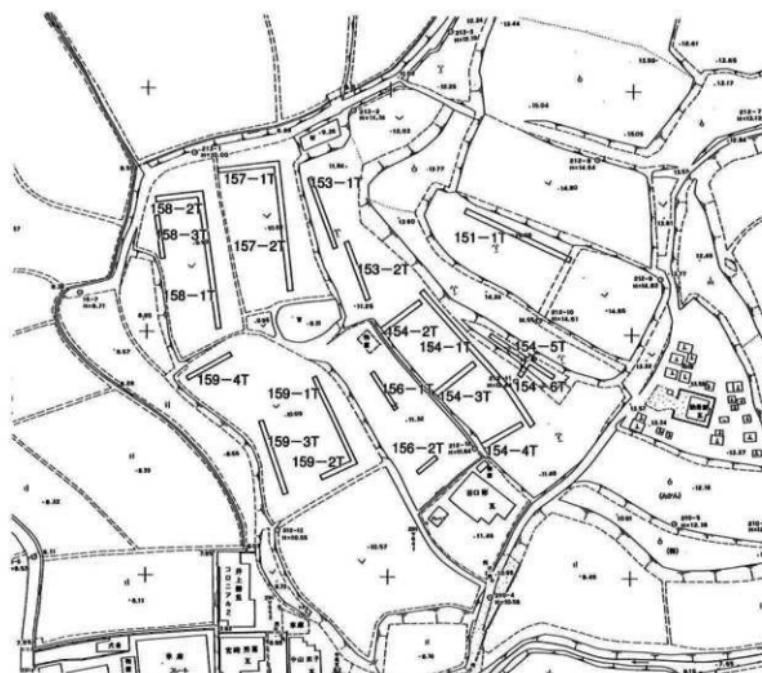
第54図 中尾146 トレンチ実測図 S=1/80

III 平成12年度の調査

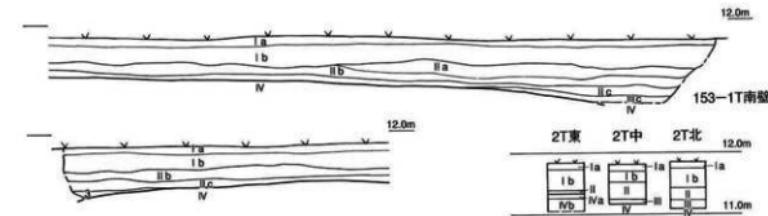


第55図 中尾146-147-148 トレンチ実測図 S=1/80

III 平成12年度の調査

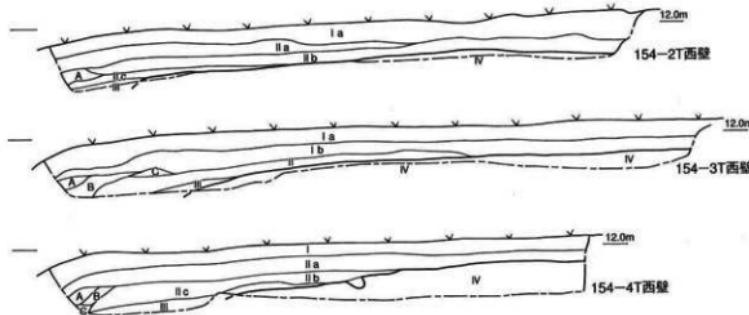


III 平成12年度の調査



中尾153-2T

Ia 表土(耕作土) しまのなく、粘性を有しない。カカフした感じ。
Ib 田畠の現在の耕作層。
II 喀蘭色土 ややしまり、あまり粘性を有しない。わずかにローリングを受けた過渡物質。
III 喀蘭色土 1・2層より細く、ややしまり粘性を有す。部分的に堆山の土をブロック状に含む。
IV-a-b 灰褐色土 ややしまり、やや粘性を有す。a層がやや粘性が高い。
無機物質。

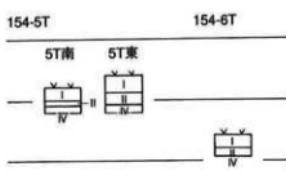


中尾154-2T

表土
Ia 喀蘭色土 あまりしまらず、あまり粘性を有しない。カカフした土質。
Ib 黒褐色土 ややしまり、あまり粘性を有しない。
IIa 喀蘭色土 ややしまり、あまり粘性を有す。
IIc 喀蘭色土 ややしまり、やや粘性を有す。土器破片をわずかに含む。
III 黒褐色土 しまがめり、やや粘性を有す。遺物含む。
A 喀蘭色砂質土 ややしまり、粘性を有しない。砂質土を多く含む。
B 喀蘭色土 ややしまり、粘性を有しない。砂質土を多く含む。

中尾154-3T

I 表土(耕作土)
Ia 喀蘭色土 あまりしまらず、あまり粘性を有しない。旧耕作土。
Ib 喀蘭色土 ややしまり、あまり粘性を有しない。
II 喀蘭色土 しまがめり、粘性を有す。土器破片をわずかに含む。
III 黒褐色土 しまがめり、やや粘性を有す。遺物含む(土器片)。
IV 喀蘭色砂質土
A 喀蘭色土 あまりしまらず、あまり粘性を有しない。サラサラした土質。
B 喀蘭色砂質土 しまがめり、粘性を有しない。



中尾154-4T

I 表土(耕作土)
Ia 喀蘭色 あまりしまらず、あまり粘性を有しない。旧耕作土。
Ib 喀蘭色土 ややしまり、あまり粘性を有しない。
IIc 喀蘭色土 ややしまり、やや粘性を有しない。
A 喀蘭色砂質土 ややしまり、粘性を有しない。
B 喀蘭色土 ややしまり、あまり粘性を有しない。上層よりしまる。
C 喀蘭色土 ややしまり、あまり粘性を有しない。
* A-C: I層からの洗出込み層
* IIc: 土器質土層を、わずかに含む。

中尾154-5T

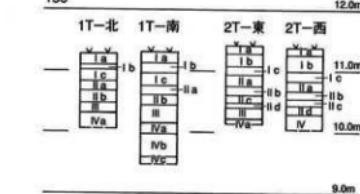
I 表土
I 喀蘭色土 ややしまり、粘性を有しない。砂粒含み、粒子が粗い。
II 喀蘭色土 ややしまり、粘性を有しない。無機物質。

第58図 中尾153・154 トレンチ実測図 S=1/80

0 2m

III 平成12年度の調査

158

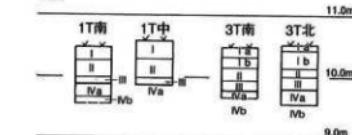


中属156—1T·2T

- | | |
|--------|---------------------------|
| Ia | 暗褐色(茶色) |
| Ia | 暗褐色土　しまなく、粘性を有しない。播の土。 |
| Ia | 暗褐色土　ややしり、粘性を有しない。 |
| *I-a-1 | 全体に移行多々含む。 |
| Ia | 暗褐色土　ややしり、やや粘性を有す。 |
| Ia | 暗褐色土　ややしりややく、ややしり、粘性を有す。 |
| Ia | 黒褐色土　ややしり、粘性を有す。 |
| Ia | 暗褐色土　ややしり、粘性を有す。 |
| Ia | 暗褐色土　ややしり、粘性を有す。 |
| Iab | 暗褐色土　ややしり、粘性を有す。砂質土少混入する。 |
| Iab | 暗褐色土　ややしり、粘性を有す。 |
| Iab | 暗褐色土　ややしり、粘性を有す。 |

- * Ⅳ層で中世の遺構、遺物の可能性あり。ローリングを受けた土器片をわずかに含む。
- * Ⅲ層は古墳・弥生時代の土器片含む。
- * Ⅱa上部に、3層からの遺物を含むが、基本的に無施物層。
- * Ⅱb上面が、追積換出面に至ると思われる。
- * Ⅰ層より上同じような層(Ⅱc)が認められる場所もあるが、Ⅰ層が古代～中世の時期の層とされる。遺物は少額。

158

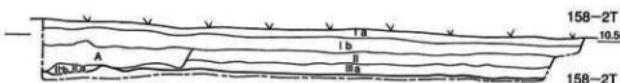


中尾158-1T~3T

- Ia 土生(土作生)
Ib 土生(土作生) しのがく、粘性を有しない。細の麻土。
Ic 地面地土 ややしのり、粘性を有しない。
* I-a—I-c 全て地作: 地理で多くむる。
IIa 暗褐色土 ややしのり、やや粘性を有す。
IIb 暗褐色土 上層よりややく、ややしまり、粘性を有す。
IIc 黑褐色土 ややしのり、粘性を有す。
IID 暗褐色土 ややしのり、粘性を有す。
IId 地面地土 小さく、細粒を有す。
IIe 地面地土 粘性を有する。耕作土質量を混入する。
IIIc 本色粘土質土 ややしまり、粘性を有しない。
IVa 黑褐色土 ややしのり、粘性を有す。
IVb 黑褐色土 ややしのり、粘性を有す。上層で外1基検出。
V 黑褐色土 ややしのり、粘性を有す。
A 暗褐色土—暗褐色粘土土 $\text{H}_2\text{O} + \text{CaCO}_3$ 粘性を有す。酸化鉄分を頂点状に含む。
混ざるごとくなる。重質粘土を有するが、塑性をひどくする傾向。部分的に入れ替わる。

〔解説〕水田と山林における土と、それをVtで示す。Vtは表面物質

中尾157-1T・2T
I 茅生(耕作土)



第59図 由尾156・157・158 トレンチ窓実測図 S-1/20

III 平成12年度の調査

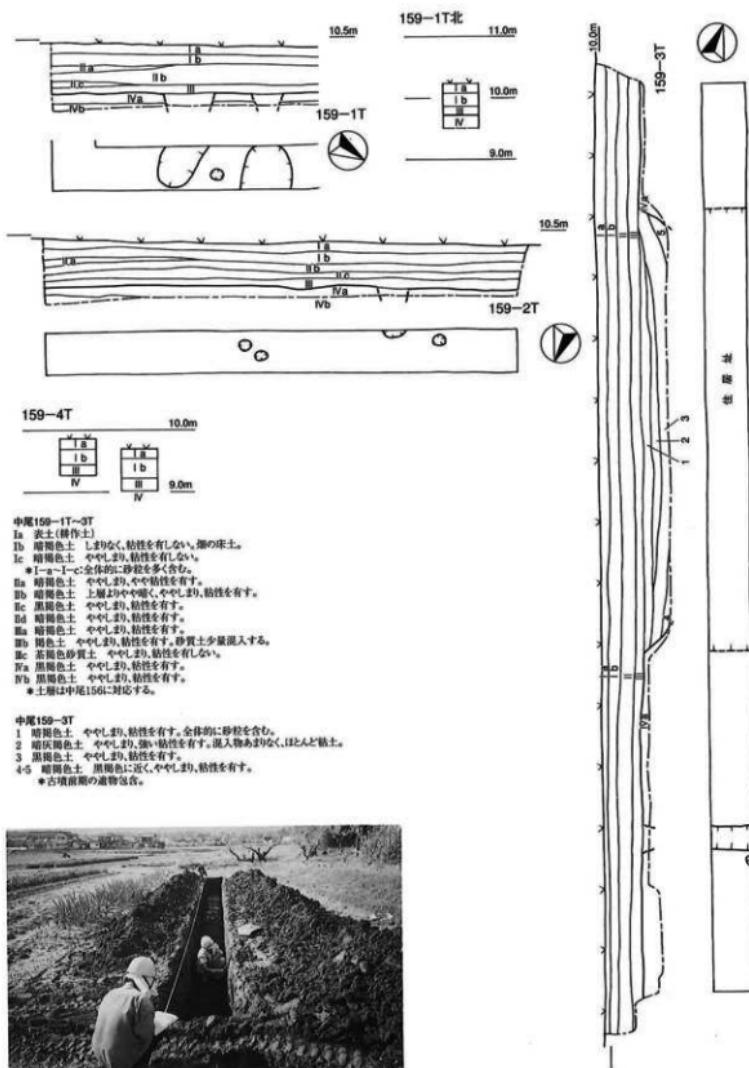
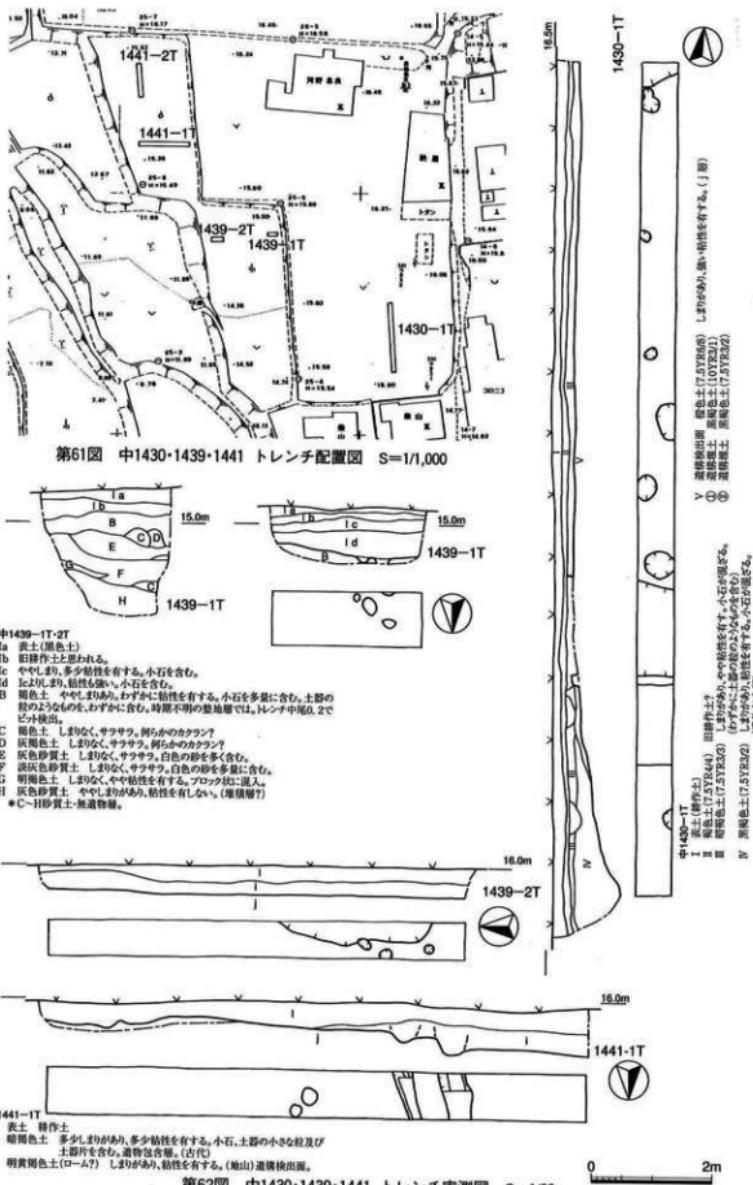


写真31 中尾159番地調査状況（東より）

第60図 中尾159トレンチ 実測図 S=1/80

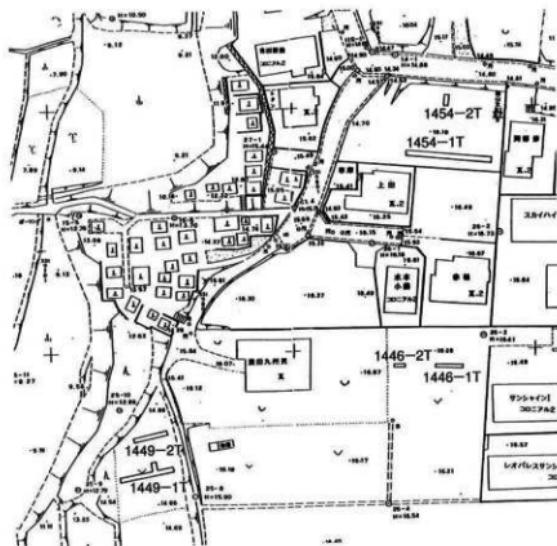
0 2m

III 平成12年度の調査

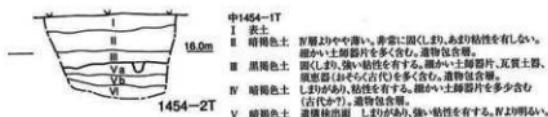


第62図 中1430・1439・1441 トレンチ実測図 S=1/80

III 平成12年度の調査



第63図 中1446・1449・1454 トレーニング配置図 S=1/1,000



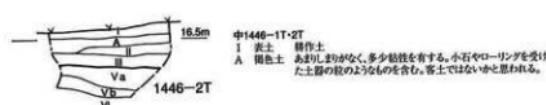
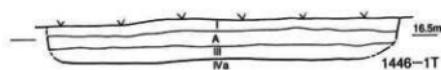
中1454-2T
V1 黄褐色土 粘性、しまりとも強く、砂粒をやや含む。無遺物層と判断。

Va 暗褐色土 ややや透明感あり、にじみ色～褐色の小ブロックを含む。しまり、粘性ともやや強く。

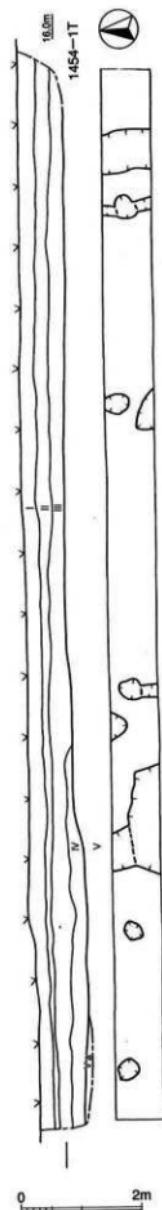
Vb 暗褐色土 ややや透明感ある。しまり、粘性ともにさらに強まる。

* Va-Vb層に「無遺物層」と判断。

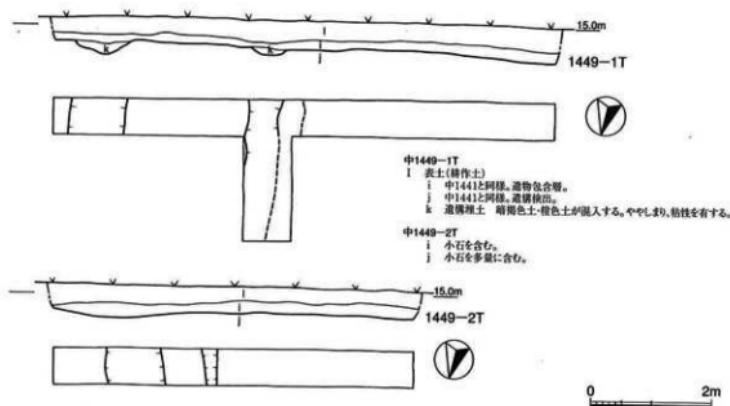
1 黒褐色土 V層ブロックを含む。機械、炭化物混入。しまり、粘性とも強く。遺物屢々。



第64図 中1446・1454 トレーニング実測図 S=1/80



III 平成12年度の調査



第65図 中1449 トレンチ実測図 S=1/80



写真32 中尾132番地調査状況（東より）



写真34 中尾146番地 4T全景（東より）

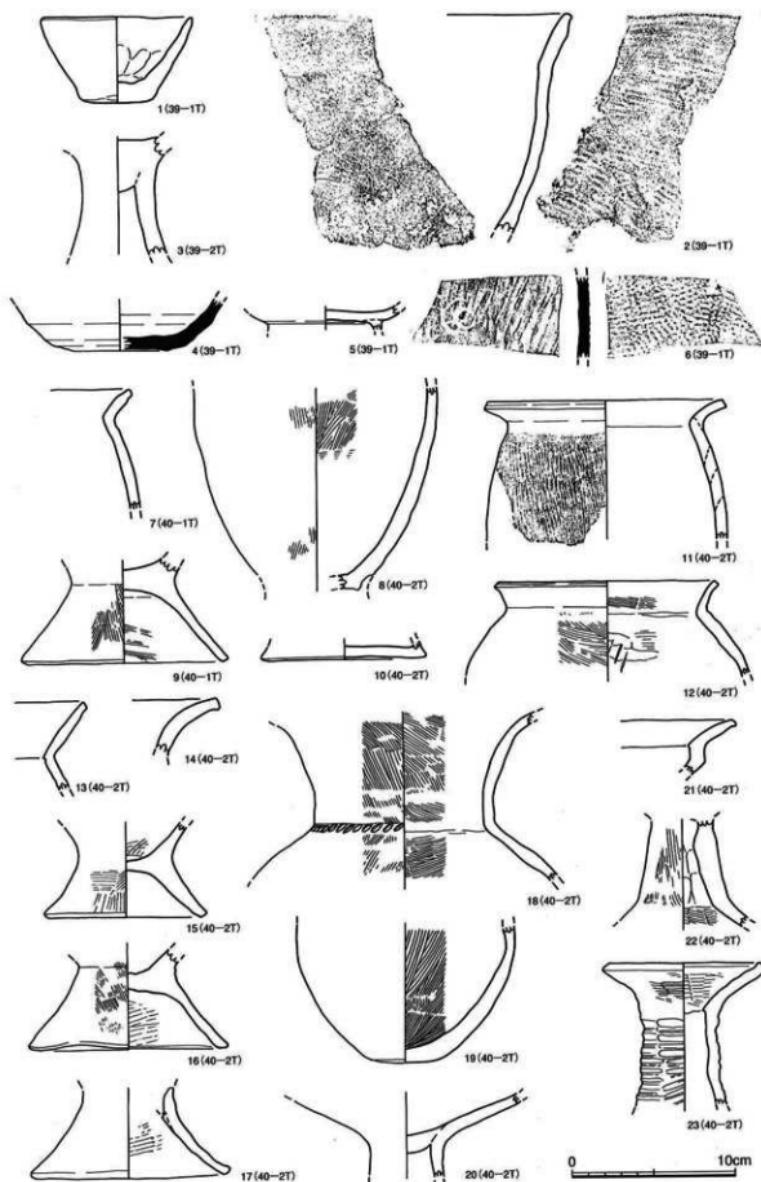


写真33 中尾145番地 1T全景（東より）



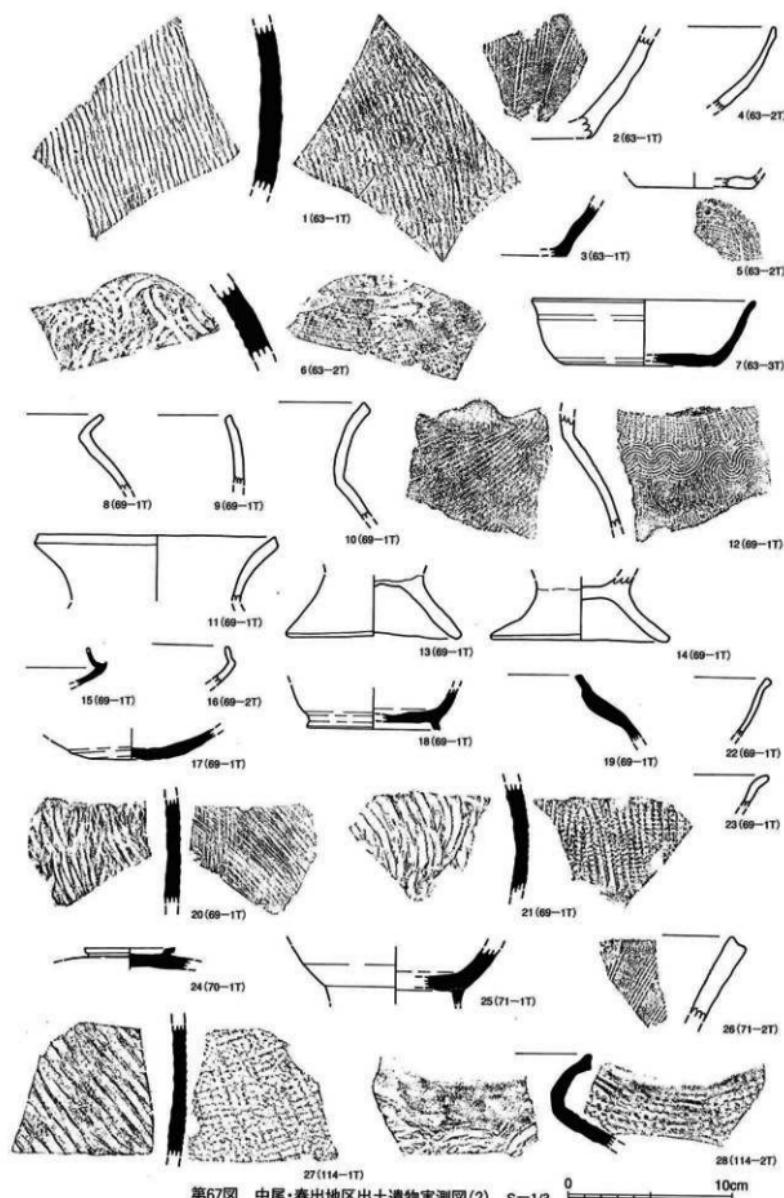
写真35 中尾148番地調査状況（西より）

III 平成12年度の調査



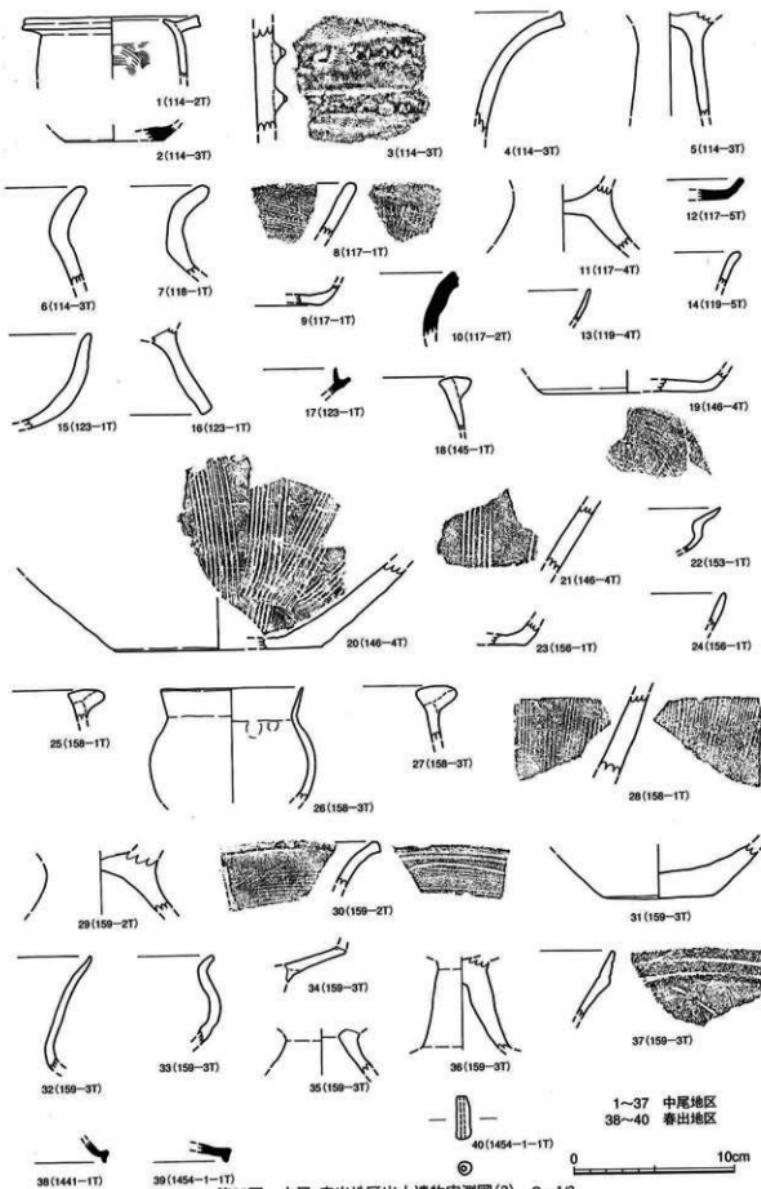
第66図 中尾・春出地区出土遺物実測図(1) S=1/3

III 平成12年度の調査



第67図 中尾・春出地区出土遺物実測図(2) S=1/3

III 平成12年度の調査



第68図 中尾・春出地区出土遺物実測図(3) S=1/3

III 平成12年度の調査

2 築地東遺跡（A地点）

所在 地：築地字陳内2385-2

対象面積：209.52m²

調査時期：12年4月24日

担 当 者：竹田宏司

築地東遺跡は、小代山南麓に広がる台地の、標高14~17m付近に立地する遺跡である。弥生時代の包蔵地とされている。周辺一帯が中世の居館址とも考えられており、調査地東側の切通し状の道路については、空堀の可能性がある。

調査地は、調査の時点ではすでに宅地として造成が行われていた。敷地内の2カ所にトレンチを設定し、土層の確認をおこなった。その結果、10~20cmの整地層の下は砂礫混じりの黄褐色土層であり、無遺物層と判断した。上位の土層は既に失われており、遺物・遺構とともに全く確認していない。宅地造成の際、もしくはそれ以前の段階で削平された可能性が高い。後日、道路を挟んだ東側隣接地についても確認調査を実施しているが、同様に、上位の土層は失われていた。

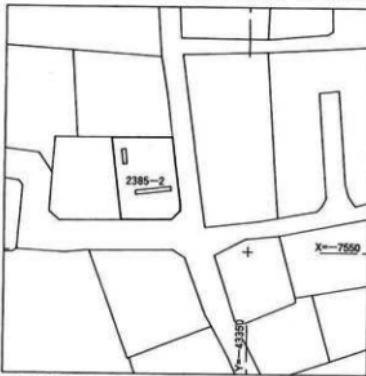
調査後の措置は、慎重工事である。



写真36 築地東遺跡調査地近景（南より）



第69図 築地東遺跡調査地位置図（A地点） S=1/5,000



第70図 築地東遺跡調査地周辺字図・トレンチ配置図 S=1/1,000



写真37 築地東遺跡 1T全景（北より）

III 平成12年度の調査

3 高岡原遺跡（A地点）

所在地：山田字高岡原2042-2

対象面積：240m²

調査時期：12年5月9日

担当者：末永 崇

調査地は、高岡原遺跡のほぼ中央部に位置し、南への緩やかな傾斜地の標高約25mの地点である。南側の道路とは150~200cm程度の段差が認められる。旧状は畠地であったが、都市計画道路の建設とともに周辺は宅地化が進み、同じ敷地内の北側にも共同住宅が建設されている。この部分については、平成10年に工事立会を行つており、ピット数基が確認されている。



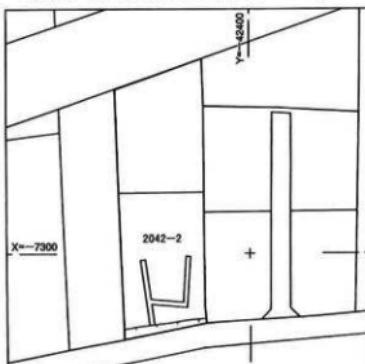
写真38 高岡原遺跡調査地近景（南西より）



写真39 高岡原遺跡調査地近景（北より）



第71図 高岡原遺跡調査地位置図 S=1/5,000

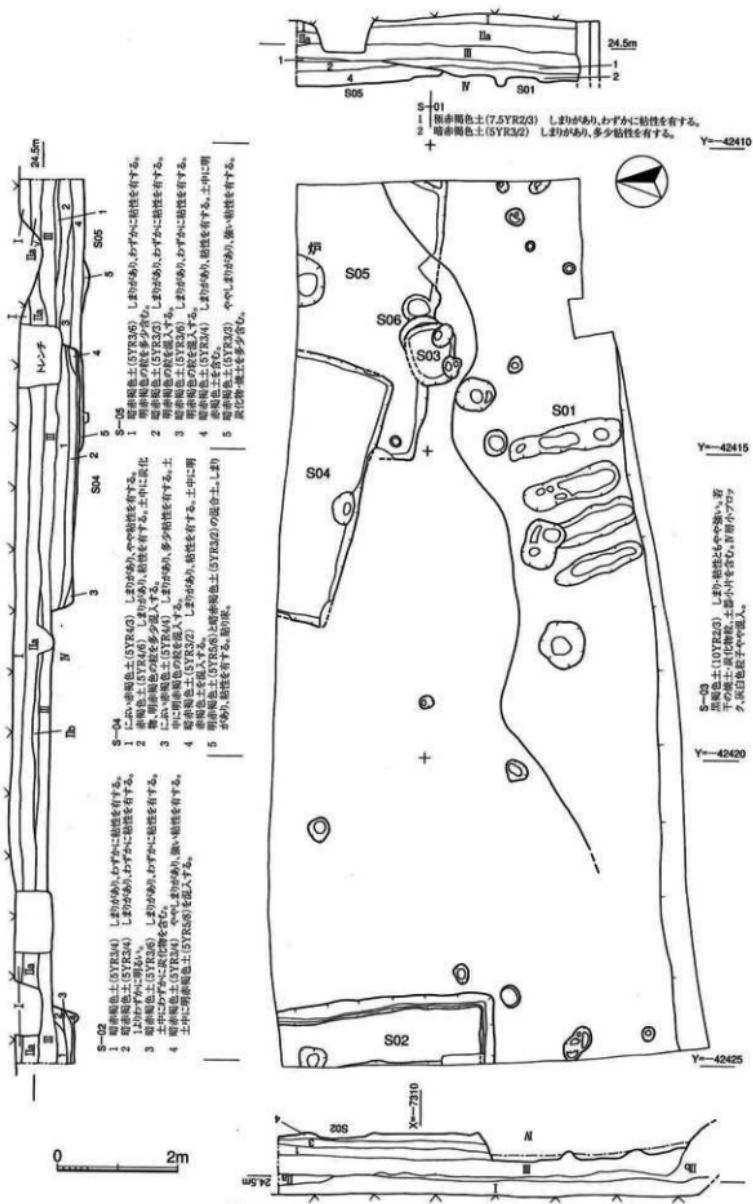


第72図 高岡原遺跡調査地周辺宇図・トレンチ配置図 S=1/1,000



第73図 高岡原遺跡調査区位置図 S=1/1,000

III 平成12年度の調査



第74図 高岡原遺跡遺構実測図 S=1/80

III 平成12年度の調査

調査原因は、共同住宅の建設である。調査地内にトレントを3ヵ所設定し、調査を行った。

I層は表土である。II層は暗褐色を呈し、砂粒・炭化物粒などを含む旧耕作土層である。小片の遺物を含む。III層は黒褐色を呈し、粒子がやや細かい。焼土・炭化物粒をやや含む。古代の遺物包含層である。IV層は褐色から暗褐色を呈し、やや粘性・しまりが強くなる。縄文時代の遺物包含層に相当するとみられるが、遺物は確認していない。IV層上面において弥生時代後期の住居址が1軒確認され、ピット・小穴10数基が確認された。

確認調査の後、主体者と協議を行い、建物については、設計変更により現状保存が図されることになったが、南側駐車場部分については、南側の市道のレベルまで下げる必要があるため、記録保存を目的とした発掘調査を行うこととなった。

発掘調査の概要

発掘調査は、駐車場部分の約120m²を対象に、玉名市教育委員会が主体となり、原因者負担により、平成13年8月28日から9月29日にかけて実施した。当初竹田が調査を担当したが、都合により、終盤以降は、西田・田中・末永が交代で担当している。

8月28日に、I・II層を対象に、重機による掘削を行った。III層については、翌29日より9月1日にかけて、人力による掘削を行った。9月4日よりIV層上面において遺構検出を行った。9月6日より遺構の掘方に着手し、図面の作成を行い、9月29日に調査を完了した。

遺構について

検出した遺構は、道路状遺構1条、住居址3基、土坑2基のほか、ピット群である（第74図）。

調査範囲が狭小であるため、道路状遺構・竪穴住居址については、いずれも調査区外に広がっており、その一部を確認したのみである。

S01

調査区南側において検出した、道路状遺構である。方位は検出した部分が短いため不正確であるが、概ねN-70°-Eである。一部に波板状の下部構造を持つことから、道路状遺構と判断しているが、あまり硬化しておらず、前述のとおり、包含層と誤認していた。基本的にはIV層上面において確認が可能であり、ほとんどのピットの下位にある。覆土中より古代の須恵器などが出土している。（第75図）

S02

調査区北西端において検出した、竪穴住居址である。住居址南東側のベッド状遺構の部分のみ検出している。このため、全体の構造・規模等は不明である。遺物は、覆土中より出土している土器2点を図示している。（第76図）

S03

長径100cm、短径約80cmの、梢円形に近い平面形を持つ土坑である。検出時の深さは約10cmである。確認調査のトレントに北側の一部を削られている。S05の上位にある。遺物は小片のみであり図示していないが、覆土の特徴から古代の所産と判断している。

S04

調査区北側で検出した竪穴住居址である。南北・東西のコーナーが確認されており、この部分で東西約4.2mである。南壁の中央付近にピット1基が確認されている。S05の上位にある。

III 平成12年度の調査

S05

調査区北東隅で検出した竪穴住居址である。南西のコーナーのみ確認しており、調査区から北西へ広がっている。規模は不明であるが、東端でベッド状遺構とみられる段を確認している。また、調査区の北壁際で、浅い掘り込みをもつ炉址を検出している、炉址は、あまり赤化しておらず、炭化物・焼土の集中がみられる程度である。S03・S04・S06の下位にある。多量の土器が出士しており、第76図4-15に図示している。

S06

長径72cm、短径72cmの梢円形に近い平面形を持つ土坑である。検出時の深さは35cmである。S03の下位にあり、S05の上位にある。遺物は小片のみであり図示していない。時期は不明である。

小結

S01・S03については古代の遺構である。明確に伴う遺物を確認していないが、概ね8世紀後半から9世紀にかけての所産とみている。1999年C地点でも、古代の遺跡が確認されており、高岡原遺跡北東に位置する玉名郡衙関連の遺跡群を含めた検討が必要である。

弥生時代についても断片的な資料がほとんどであり、高岡原遺跡のみならず菊池川下流域での調査・報告例の増加を待って検討を行いたい。



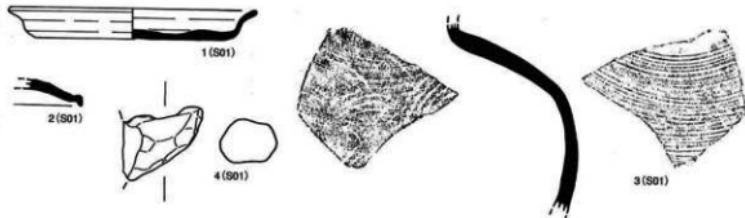
写真40 高岡原遺跡S01完掘状況（西より）



写真41 高岡原遺跡S02完掘状況（西より）



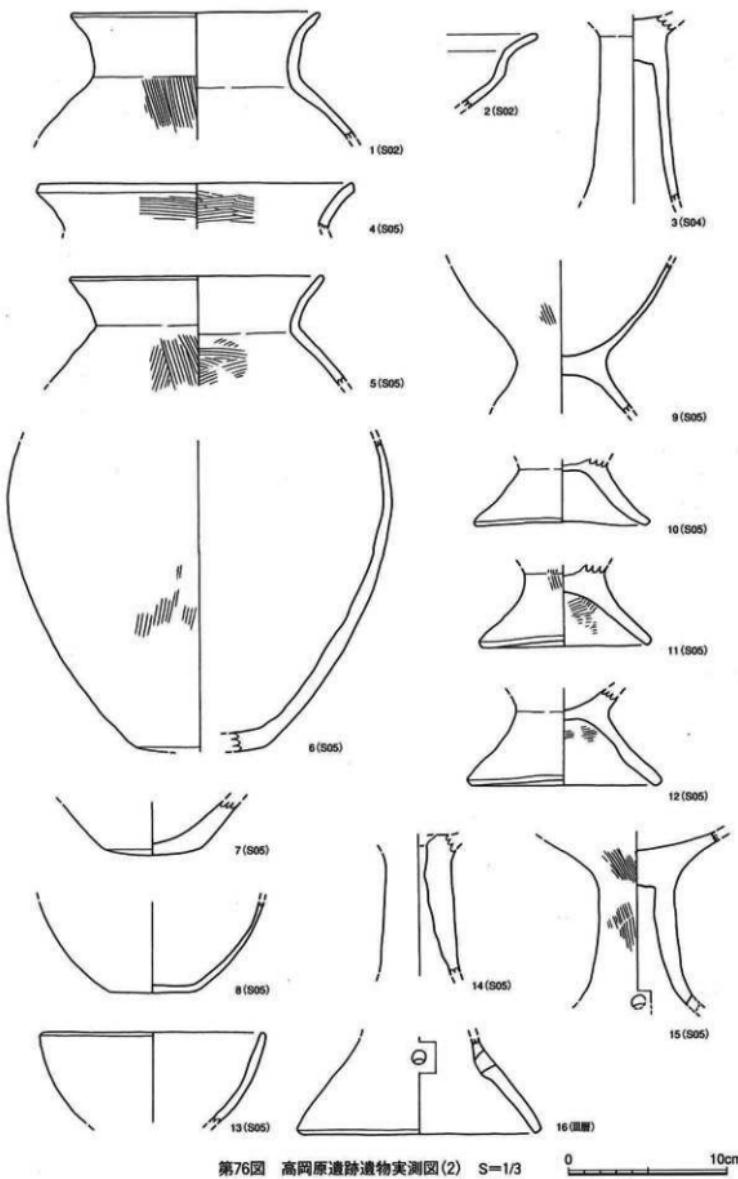
写真42 高岡原遺跡S03完掘状況（北より）



第75図 高岡原遺跡遺物実測図(1) S=1/3



III 平成12年度の調査



第76図 高岡原遺跡遺物実測図(2) S=1/3

0 10cm

III 平成12年度の調査



写真43 高岡原遺跡S04完掘状況（南より）



写真44 高岡原遺跡S05遺物出土状況（西より）

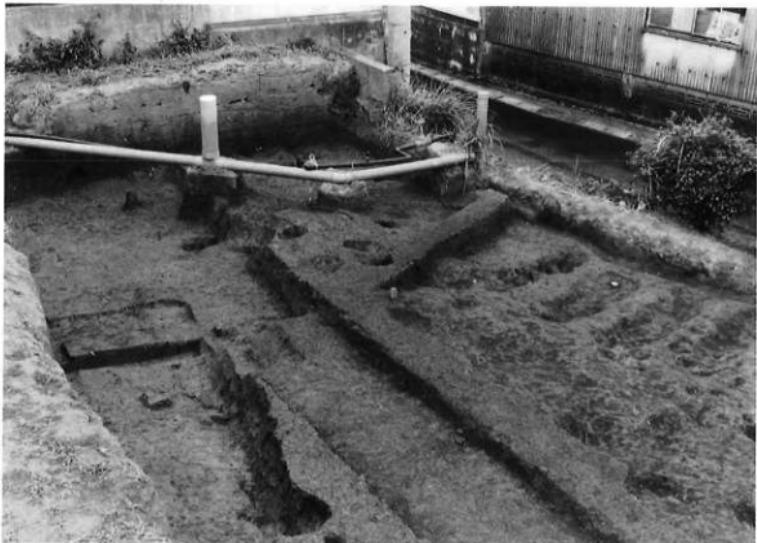


写真45 高岡原遺跡S06完掘状況（北より）

III 平成12年度の調査

4 亀甲遺跡

所 在 地：亀甲134

調査時期：12年5月1日～8日

担 当 者：竹田宏司・末永 崇

亀甲遺跡は、玉名台地の南側縁辺部、標高10～15m付近に位置し、縄文時代から中世にかけての包蔵地とされている遺跡である。

調査地は、現在、印刷工場の敷地内であり、工場の建物増設に伴い、調査を実施した。北東部分に関しては、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲外であり、確認調査ではなく、工事立会を行っている。包蔵地の南西隅の部分についても、東半部については工場の通路として使用していたため、トレンチを設定することが困難であり、西半部の確認調査の結果、埋蔵文化財が存在している可能性が希薄であるため、工事立会とした。

西側の第1・第2トレンチでは、やや粗い砂質土が互層状に厚く堆積している状態が認められた。これは、水性堆積とみられ、旧流路の可能性があるが、遺物は未確認である。その後の基礎部分の工事立会の際にも、同様の層が確認されている。北東側では、アスファルト及び碎石層の下に、40～100cm程度の厚さで、近代の建築材等を含む擾乱層が認められ、その下は、無遺物層とみられる褐色粘質土・山砂状のにぶい黄褐色の砂質土が認められた。

遺物・遺構ともに確認しておらず、その後の措置は、慎重工事である。

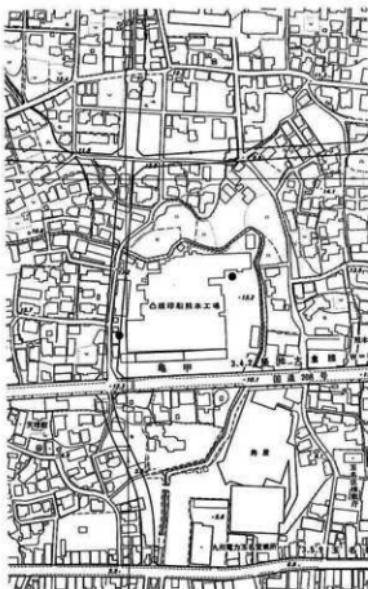


写真47 亀甲遺跡調査地位置図 S=1/5,000

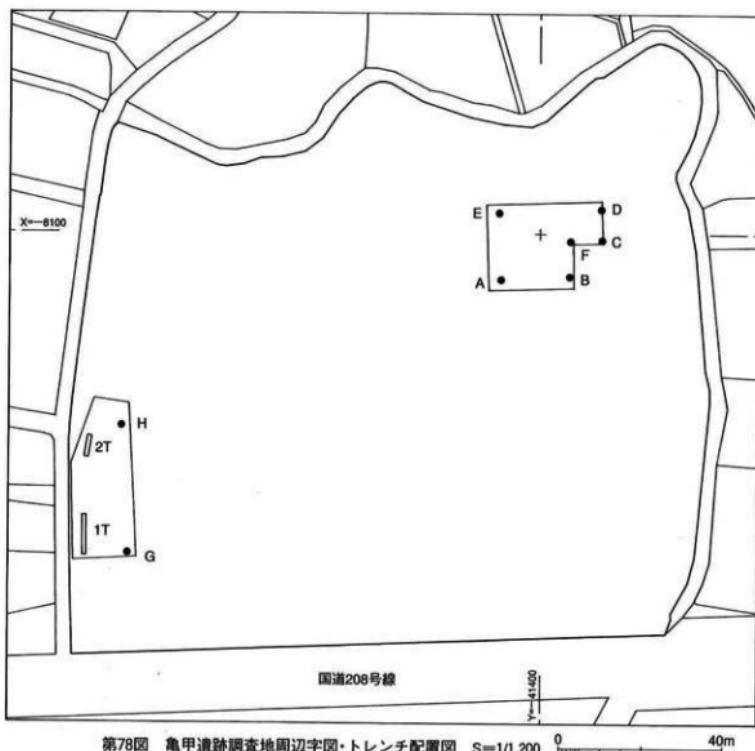


写真47 亀甲遺跡調査地近景（北より）

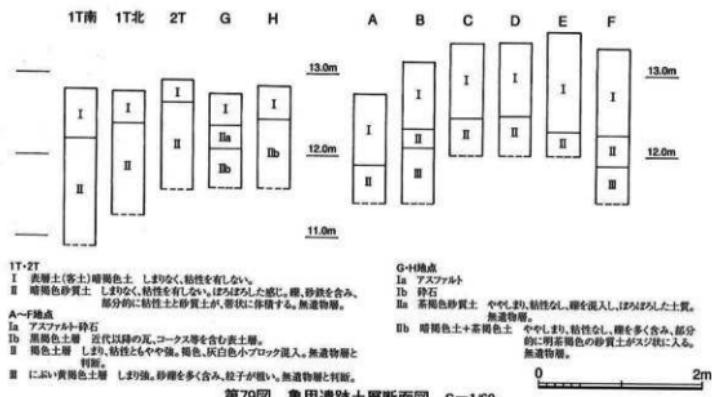


写真48 亀甲遺跡 2T（南より）

III 平成12年度の調査



第78図 龜甲遺跡調査地周辺字図・トレンチ配置図 S=1/1,200 0 40m



第79図 龜甲遺跡土層断面図 S=1/60

III 平成12年度の調査

5 城の浦横穴

所 在 地：下字城の浦

調査期日：12年5月22日～8月9日

担 当 者：末永 崇

城の浦横穴は、菊池川左岸の標高約47mの独立した丘陵の、玉名平野をのぞむ西側斜面に位置していたものである。同じ丘陵の頂部一帯は、下村城跡として周知されている。丘陵の東側の山麓には、前方後円墳である山下古墳が位置していたが、山砂採取により消滅している。この丘陵についても、山砂採取などで丘陵北西部部分が削平されている状態である。

下村城跡に関しては、工場用地造成に先立ち、調査依頼を受けて、2000年3月に玉名市教育委員会で確認調査を行ったが、この時点では、横穴墓の存在は確認されていない。1998年には、県文化課及び玉名市社会教育課の職員が現地を確認していたが、未調査のまま破壊された可能性が高く、地元住民から、表面採集された完形の須恵器数点が社会教育課へ持ち込まれたことから、横穴墓の存在が確認されることとなった。このため、数度にわたり土砂の中から遺物の採集を行ったものである。

横穴は、残された写真及び地元住民の話から、ほぼその位置を特定することができた。標高35～40m付近に存在したものとみられ、西側の平野部に位置する水田との比高差は30m以上である。確認されていたものは1基のみであり、単独もしくは2～3基以内で存在していた可能性が高い。写真を見る限りでは、天井部はほとんど崩壊しており、玄室の奥の部分が残存している状態である。遺物が多量に出土していることから、山砂採取により破壊される前には、前庭部まで残存していたものとみられる。



第80図 城の浦横穴位置図 S=1/5,000



写真49 城の浦横穴遠景（西より）



写真50 城の浦横穴近景（西より）

III 平成12年度の調査



写真51 城の浦横穴玄室



写真53 城の浦横穴玄室奥壁・南側壁



写真52 城の浦横穴玄室奥壁

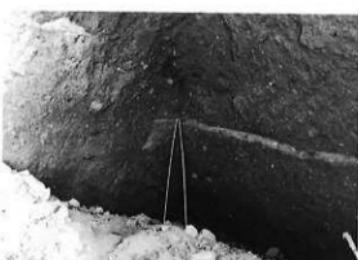


写真54 城の浦横穴玄室奥壁・北側壁

遺物について

表面採集された遺物の一部を、第81～83図に図示している。第81図1～13は須恵器である。1・2は坏蓋、3～8は坏身である。1・4は、それぞれ天井部・底部の調整が、静止ヘラ削りによるものであり、2・3・8はいずれも回転ヘラ削りである。1・4は胎土・焼成とも近似しており、セットである可能性が高い。1の内面には、「×」のヘラ記号がある。9～11は無蓋の高坏である。9は接合できなかったが、同一個体の坏部および脚部と判断した。坏部は底部にカキ目が施されている。脚部に2段の三方透かしを持つ。10は坏部であり、9同様、底部にカキ目が施されている。11は脚部である。透かしを持たない。内部には絞り目がみられる。12は甕である。肩部に刺突文を施した後、体部上半から頸部にかけてカキ目を施されている。13

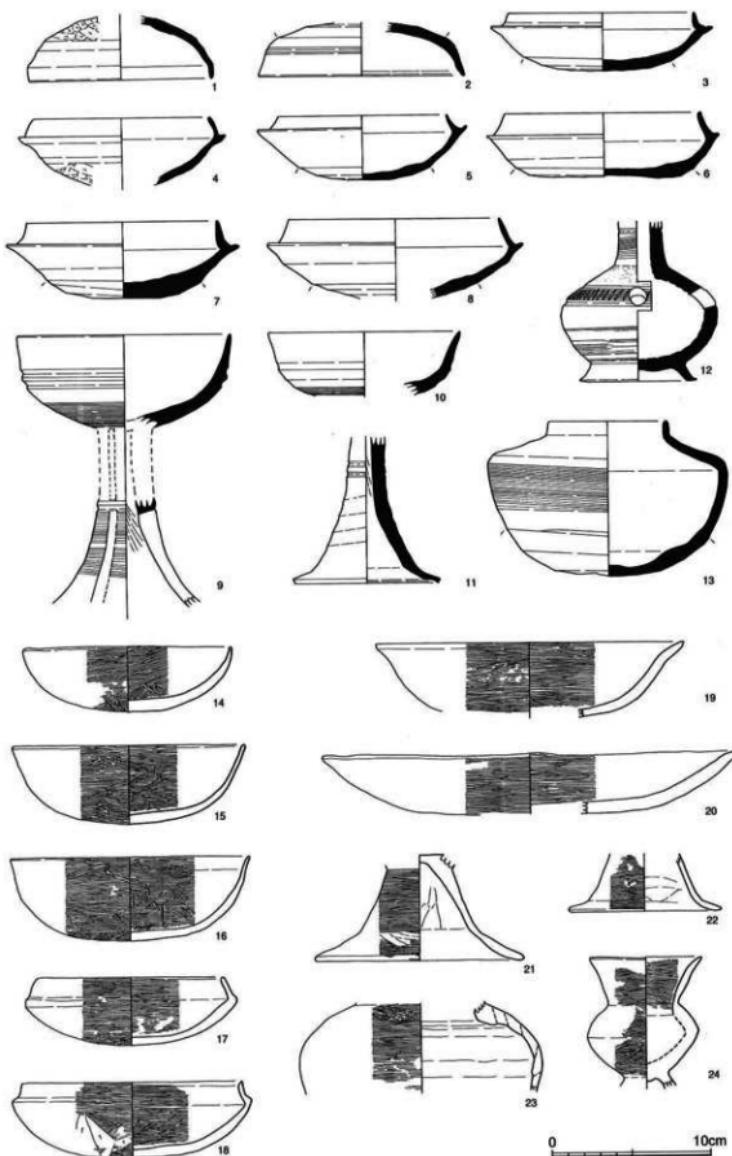
は有蓋の短颈壺である。蓋は確認していないが、薄く自然釉が掛かっており、頸部の周囲に焼成の際の蓋の痕跡が残る。

14～24は土師器である。いずれも胎土は精緻であり、全面に細かいミガキが施されている。また、17・18・24は黒彩、その他は赤彩が施されている。14～16は坏、17・18は模倣坏である。18は、底部のミガキが粗であり、静止ヘラ削りの痕跡が明瞭である。19・20は高坏の坏部、21・22は同じく脚部である。23は壺の胴部上半部分である。24は脚付きの小形壺であるが、脚部を欠損している。

第82図1～3は須恵器提瓶である。いずれも胴部の調整は回転ヘラ削りであり、片面にカキ目を施している。

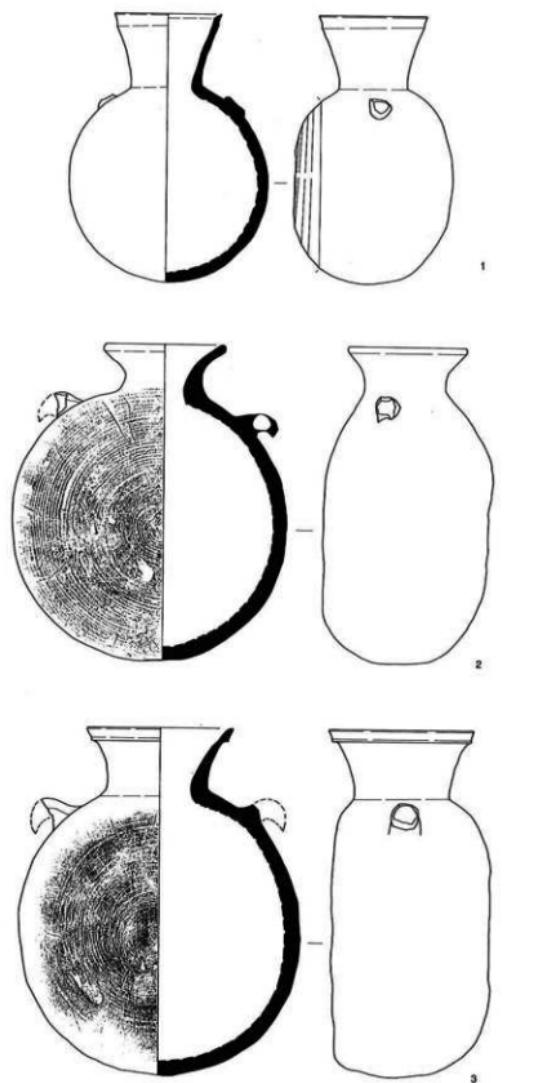
第83図1は須恵器の横瓶、2・3は甕である。

III 平成12年度の調査



第81図 城の浦横穴出土遺物実測図(1) S=1/3

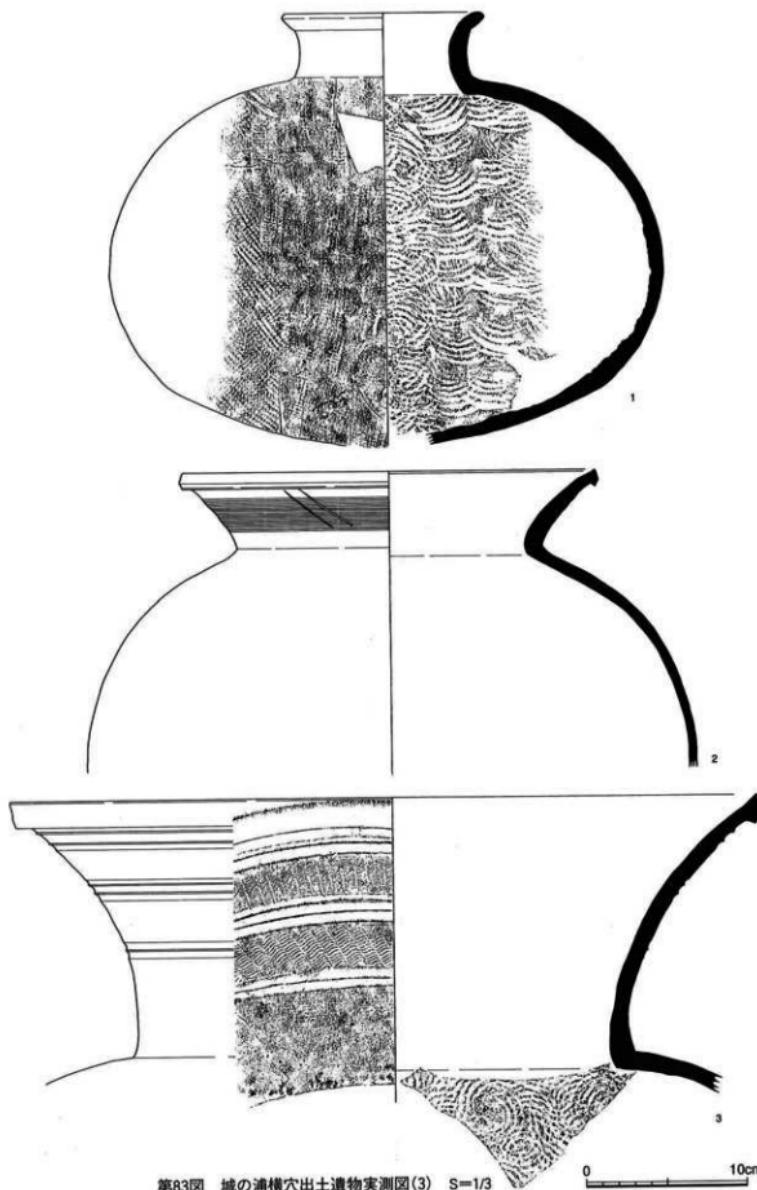
III 平成12年度の調査



第82図 城の浦横穴出土遺物実測図(2) S=1/3

0 10cm

III 平成12年度の調査



第83図 城の浦横穴出土遺物実測図(3) S=1/3

0 10cm

III 平成12年度の調査



写真55 城の浦横穴表探遺物 1・4



写真59 城の浦横穴表探遺物 7



写真56 城の浦横穴表探遺物 3



写真60 城の浦横穴表探遺物 8



写真57 城の浦横穴表探遺物 5



写真61 城の浦横穴表探遺物 12



写真58 城の浦横穴表探遺物 6



写真62 城の浦横穴表探遺物 13

III 平成12年度の調査



写真63 城の浦横穴表探遺物14



写真65 城の浦横穴表探遺物17



写真64 城の浦横穴表探遺物16



写真66 城の浦横穴表探遺物19



写真67 城の浦横穴表探遺物25



写真68 城の浦横穴表探遺物26

III 平成12年度の調査



写真70 城の浦横穴表探遺物28

写真69 城の浦横穴表探遺物27



写真71 城の浦横穴表探遺物30

III 平成12年度の調査

6 岩崎城跡

所 在 地：岩崎字西808、809、810-1、

810-8、810-11

対象面積：1,200m²

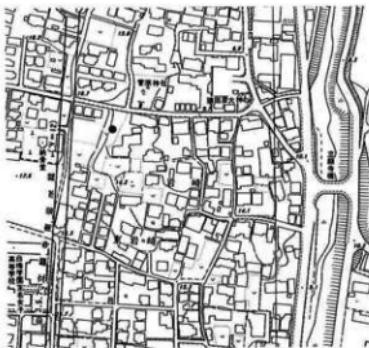
調査時期：12年5月23日～24日

担 当 者：竹田宏司・田中康雄

調査地は、繁根木川右岸に広がる丘陵地で、繁根木川へ向かって、東への傾斜が認められる。標高は、敷地内において13～16.5mと起伏が激しい。現況は竹林である。市道をはさんだ北東側に、岩崎城の中心とされている菅原神社が位置している。

現況でも二重の堀が確認できるため、堀部分及びその周辺にトレントを3カ所設定して確認を行った。調査の結果、中世の所産と考えられる幅約4m、深さ約3mの堀が確認された。敷地の北側でコーナーが確認されている。第3トレントでは、弥生時代～古代のものと考えられる遺物包含層及び、住居址とみられる遺構が確認された。出土遺物はいずれも小片であり、時期の特定が難しいが、表探遺物も含め、弥生時代後期、古代、中世のものが認められる。

確認調査後、主体者と協議を行い、記録保存のための発掘調査を行うこととなった。主体者の協力により1年間工事を延期し、平成13年度に国・県の補助により、発掘調査を実施した。



第84図 岩崎城跡調査地位置図 S=1/5,000



第85図 岩崎城跡調査地周辺字図 S=1/1,000

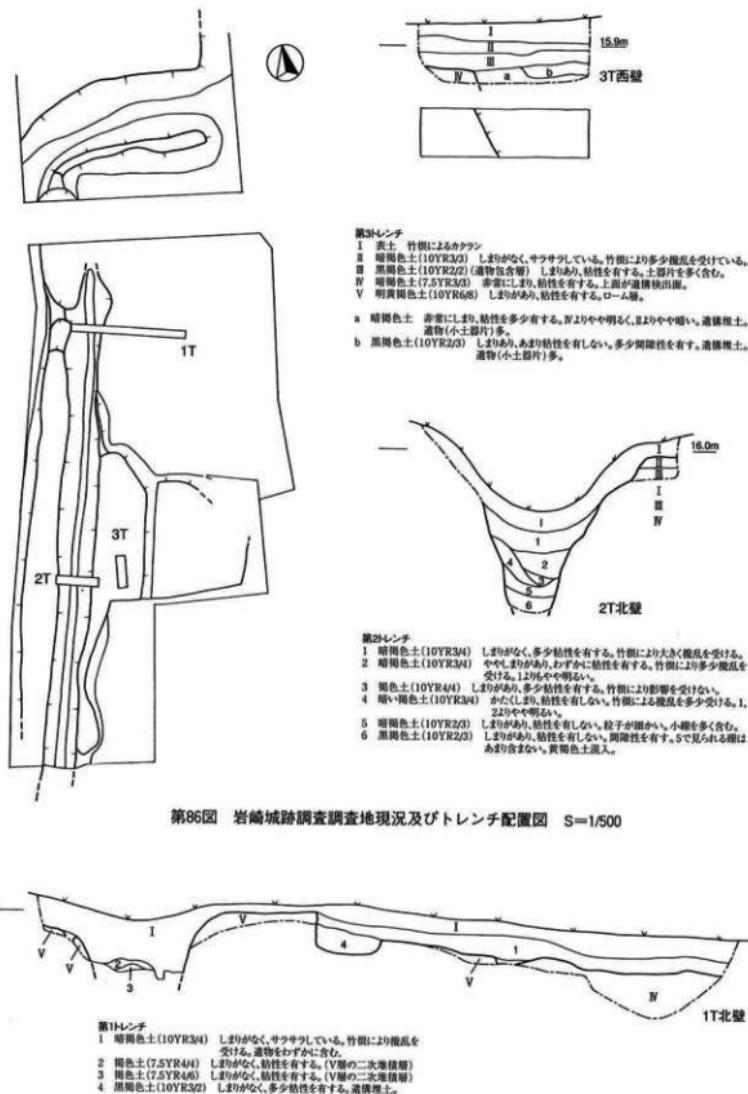


写真72 岩崎城跡調査地近景（北より）



写真73 岩崎城跡堀状遺構現況（北より）

III 平成12年度の調査



第87図 岩崎城跡トレンチ実測図 S=1/80

0 2m

III 平成12年度の調査

7 西田遺跡

所在地：築地字兔町1596-149の一部

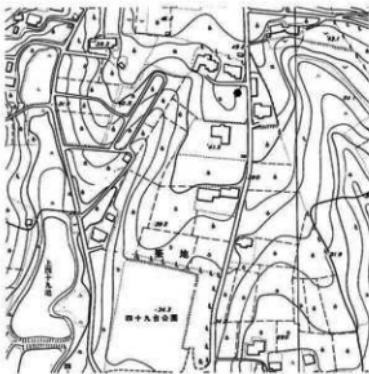
対象面積：430m²

調査期日：12年5月25日

担当者：田中康雄

西田遺跡は、小代山麓より南に広がる丘陵地上の、南に広がる谷に挟まれた尾根上に位置する。現況は葡萄などの果樹畠となっており、道路沿いに宅地が点在する。縄文時代から中世の包蔵地であり、葡萄畠の開墾の際に発見されたとされている。

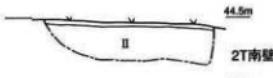
調査地は標高42m付近に位置し、現況は梨畠である。個人住宅の建築に伴い、確認調査を実施した。敷地内の四隅にトレンチを4箇所設定して、重機による掘削を行い、土層の確認を行った。調査の結果、現地表面より地山面までは約60cm~100cmの客土であり、客土直下で地山面を確認したが遺構・遺物は確認されなかった。現況地山面は東から西に向かって緩やかに傾斜している。土層の状況から、現況地山面まで削平を行った後、客土により盛土を行ったものである。遺構・遺物は確認されておらず、残存している可能性も低い。調査後の措置は、慎重工事である。



第88図 西田遺跡調査地位置図 S=1/5,000



第89図 西田遺跡調査地周辺字図・トレンチ配置図 S=1/1,000



第90図 西田遺跡トレンチ実測図 S=1/80

I 表土
II 明瞭な褐色砂質土（5YR 5/8） しまりなく、粘性を有する。客土と思われる。

III 部分的に白っぽい伊賀土が混入する。土中に大小の雜石を多量に混入する。東から西に向かってゆるやかに、傾斜している。地山。

a bに比べてややしまりがあり。ブロック状の土の混入が少ない。

b しまりがなく、粘性を有する。擾乱部のうめどしの土と思われる。（Ⅲ層の二次堆積）

III 平成12年度の調査

8 菊尾遺跡・天満宮古墳参考地

所在地：築地字天神木641-3

対象面積：429.31m²

調査期日：12年6月6日～8月10日

担当者：竹田宏司

菊尾遺跡は、玉名市南西端部、岱明町との境界付近に位置する。舌状にのびる段丘の先端が、岱明町に半島状に入り込んだ状態であり、周囲は岱明町となっている。南側には、東西方向に谷が開けており、現在JR鹿児島線が通っている。菊尾遺跡では、壺棺の出土が伝えられており、弥生時代の遺跡とされている。天満宮境内については、円形に周溝が巡っており、古墳参考地となっている。

調査地は、標高16～17mの地点である。西側の天満宮境内及び南側道路面より、50cm以上高くなっているが、北側の畠地に比べ、一段低くなっている。旧地形は、南西への傾斜斜地であったとみられる。調査原因は、個人住宅の建築である。現地の確認を行った時点では、すでに着工済みであった。

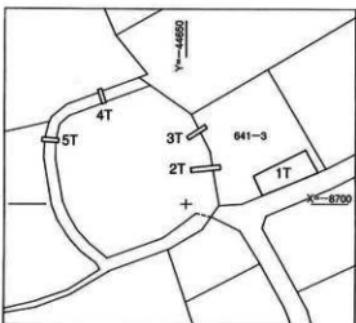
浄化槽の設置工事に際して工事立会を行ったところ、遺物包含層に該当するとみられる黒褐色土層（Ⅲ層）が確認され、一片のみながら土器片の出土があった。建物については、旧水田の床土（Ⅱ層）上面までしか掘削は行われておらず、支障は無いものと判断した。しかし、南側駐車場部分に関しては、南側道路面の高さに削平するため、影響が生ずる可能性があり、また、西側は擁壁工事が予定されており、円形周溝の一部に影響が生ずるため、駐車場部分および西側擁壁部分について確認調査を行った。

菊尾遺跡の調査

駐車場予定部分（第1トレンチ）は、面積が狭小であるため、ほぼ全面について表土の剥ぎ取りを行った。Ⅲ層についても、遺物の密度が



第91図 菊尾遺跡・天満宮古墳参考地調査位置図 S=1/5,000

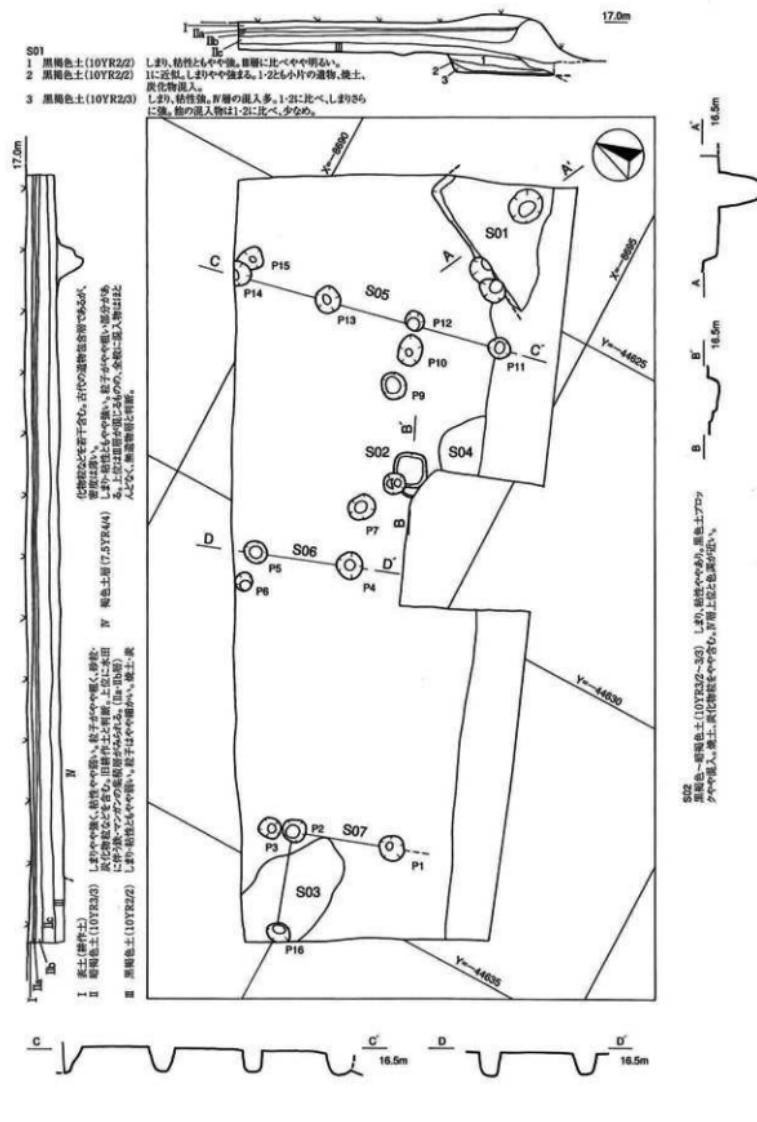


第92図 菊尾遺跡・天満宮古墳参考地調査地周辺字図・トレンチ配置図 S=1/1,000

薄く、小片のみであったことから、重機による掘削を行っている。

Ⅳ層上面において、柱穴群および住居址が検出された。柱穴群は、ほとんどが根穴もしくはしみ状のものであったが、西側で掘立柱建物の北東コーナーとみられる部分が確認され、中央部で排列らしき柱穴群を確認している。（第93図）

III 平成12年度の調査



第93図 菊尾遺跡遺構実測図 S=1/80

III 平成12年度の調査

S01

調査区東側の隅で検出した、竪穴住居址である。東側・南側は調査範囲外に広がっており、北側のコーナー部分を検出したのみである。

主柱穴1基が確認されていることから、4本柱とみられる。カマドは確認していない。遺物は、須恵器の壺及び土師器の甕3点が出土している。(第94図1~4)

S02

調査区の中心付近で検出した土坑である。長軸60cm、短軸56cmで、平面形は、やや東西に長い隅丸長方形を呈する。西側に浅い落ち込みが認められ、2基が切り合っている可能性がある。弥生時代中期前半の変形土器を出土している。

(第94図)

S03・S04

いずれも倒木痕と判断した。

S05

径40cm前後の柱穴4基がN-13°-Wの方位

で並んでおり、対応する柱穴が確認できないことから、構列と判断した。柱痕跡を確認していないが、柱穴の心々間の距離は約150cmである。

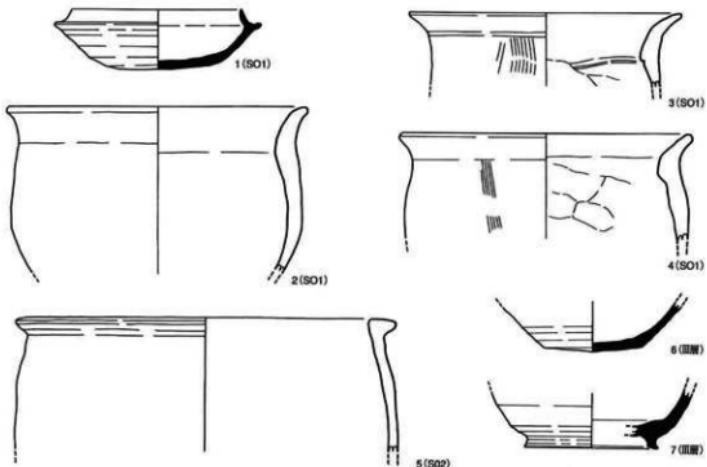
S06

径40cm前後の柱穴2基がN-20°-Wの方位で並んでおり、S05同様、構列と判断した。柱痕跡を確認していないが、柱穴の心々間の距離は約155cmである。S05との間に位置するP7・P9の存在もあり、ややいびつではあるが、S05に対応する柱穴列の可能性も否定できない。

S07

径40cm前後の柱穴3基が直角に近い角度で並んでおり、掘建柱建物の北東コーナーであると判断した。柱痕跡を確認していないが、柱穴の心々間の距離は、東西約160cm、南北165cmである。方位は、N-19°-Wである。

S05~S07については、調査区が狭く、全貌を把握しておらず、性格・方位は不明確である。いずれも直接伴う遺物を確認していないが、包



第94図 菊尾遺跡遺物実測図 S=1/3

0 10cm

III 平成12年度の調査

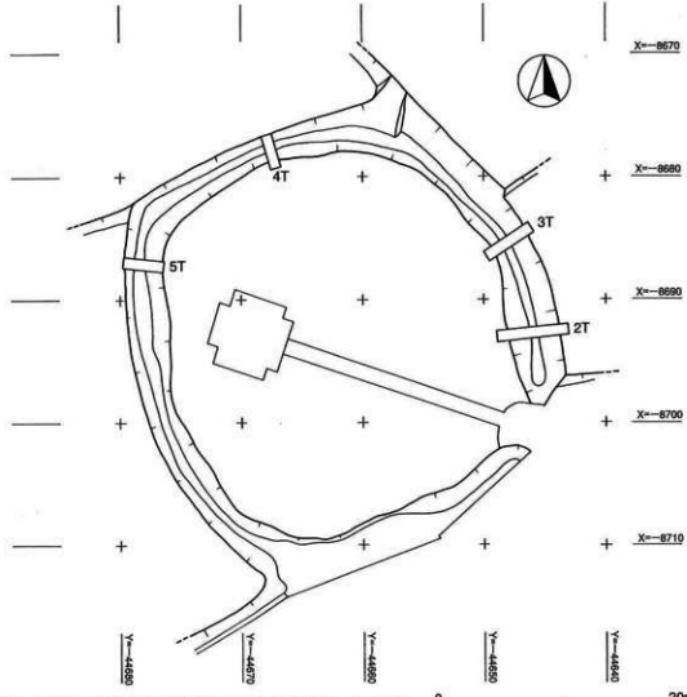
含層中から古代の土器が出土しており（第94図6・7）、9世紀の所産と考えている。

天満宮古墳参考地の調査

円形周溝遺構については、擁壁部分に2ヵ所のトレンチを設定したほか、神社関係者の同意を得て、北側と西側にもトレンチを設定して確認を行った。その結果、擁壁部分のトレンチでは、いずれも逆台形状の断面を有する溝状の遺構が確認された。幅3.5～4m、深さは2mを超えており、北側・西側では、現況よりも外側に本来の遺構があるものとみられ、外側の立ち上がりは確認できなかった。深さは、南側に深くなっている、北側では1mをやや超える程度である。南側については、現状でも水がたまっている。

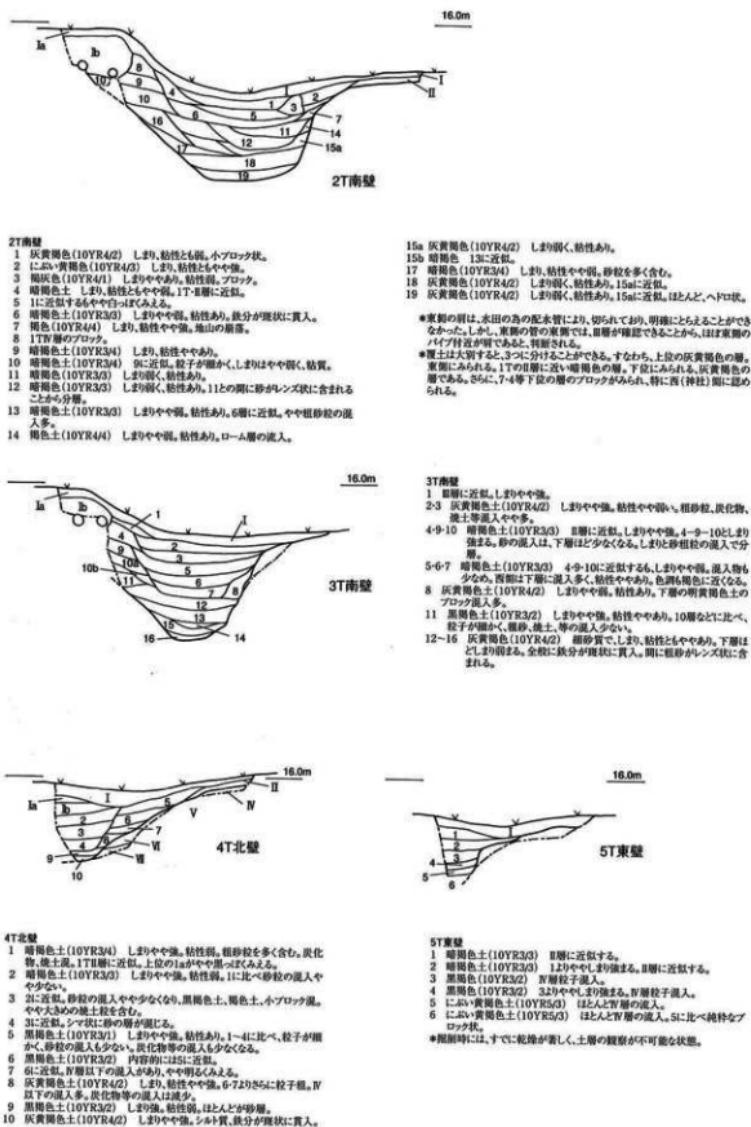
いる状態である。土層の堆積状況から、ある程度堆積した状態で浚えなおしたことが窺え、これを繰り返している可能性がある。

従来、古墳参考地として扱われてきたが、玉名市内で、同様に神社の周辺に円形周溝を持つ例が点在しており、神社に伴う可能性が強いと考えている。遺物をほとんど伴わないので、時代を判断するのは困難である。地元の古老の話では、敷地内に天正期の石造物があったが、大正と間違えて処分したことである。しかし、境内に現存する石像物はいずれも江戸後期以降のものであり、現時点では、時期の決め手に欠ける。



第95図 天満宮古墳参考地現況及びトレンチ配置図 S=1/400 0 20m

III 平成12年度の調査



第96図 天満宮古墳参考地トレーンチ実測図 S=1/80

0 2m

III 平成12年度の調査



写真74 菊尾遺跡・天満宮古墳参考地調査地遠景（南より）



写真78 菊尾遺跡 1T 全景（南東より）



写真75 菊尾遺跡・天満宮古墳参考地調査地遠景（西より）



写真76 菊尾遺跡調査地近景（南西より）



写真77 菊尾遺跡 1T 全景（西より）



写真79 菊尾遺跡S01完掘状況（南より）



写真80 菊尾遺跡S02完掘状況（北より）



写真81 菊尾遺跡S01出土遺物1

III 平成12年度の調査



写真82 天満宮古墳参考地調査地近景（西より）



写真86 天満宮古墳参考地 4T全景



写真83 天満宮古墳参考地 2T全景



写真87 天満宮古墳参考地 4T土層堆積状況



写真84 天満宮古墳参考地 2T土層堆積状況



写真88 天満宮古墳参考地 5T全景



写真85 天満宮古墳参考地 3T全景



写真89 天満宮古墳参考地 5T土層堆積状況

III 平成12年度の調査

9 築地東遺跡（B地点）

所在 地：築地字東2341-1、2341-2、2341-3

対象面積：581.95m²

調査期日：12年6月8日

担当 者：竹田宏司

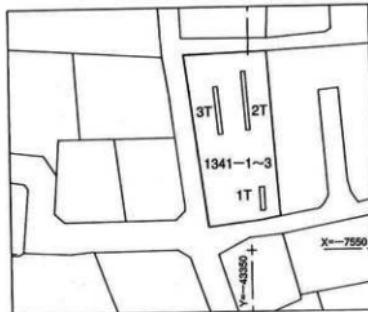
調査地は、文化財保護法に基づく届出以前に、取り扱いについての協議を行っており、調査依頼により確認調査を行った。

低丘陵地の南側緩斜面に位置しており、標高は13~16mである。現況は北側が標高16m前後で畠地となっており、南側が標高13m前後で宅地となっている。敷地の中央部で大きく段差があり、上下段ともほぼ平坦な状態であった。トレンチは、旧地形の傾斜に沿って、上段に2ヵ所、下段に1ヵ所設定した。

いずれのトレンチも、無遺物層まで削平され



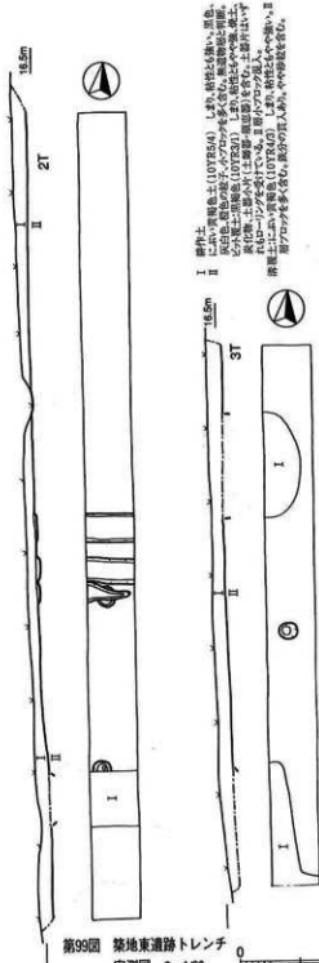
第97図 築地東遺跡調査地位置図(B地点) S=1/5,000



第98図 築地東遺跡調査地周辺字図・トレンチ配置図 S=1/1,000

ており、遺物包含層は確認されなかった。上段の2箇所のトレンチにおいて、小穴3基、溝2条などを検出しており、土師器片を出土しているが、土師器については混入であるととらえ、遺物及び覆土の状況などから近世以降の所産であると判断した。

調査後の措置は、慎重工事である。



第99図 築地東遺跡トレンチ 実測図 S=1/80

III 平成12年度の調査

10 五郎丸遺跡（A地点）

所在地：山田字白石535-1、534-5

対象面積：533m²

調査期日：12年6月14日

担当者：竹田宏司

五郎丸遺跡は、小代山南麓に広がる丘陵地帯を南流する、境川と山田川に挟まれた舌状台地の南西斜面に位置する弥生時代の遺跡である。また、中世の山田神社門前遺跡とも範囲が重なっている。

調査地を含む一帯は、調査原因となった個人住宅の建築主体者が宅地として購入する以前の段階で造成工事が行われており、文化財保護法に基づく届出が提出されていなかった。調査の時点では、数区画の宅地が造成されており、大規模に地形の改変がなされていた。

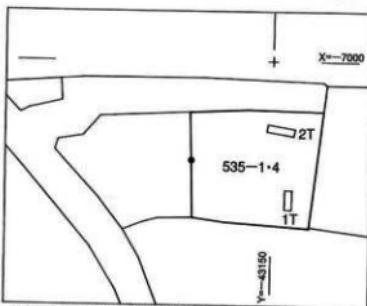
調査の時点では、西側の擁壁工事が続いている、大量の残土が積み上げられていたため、空いている部分に、2カ所のトレンチを設定した。両トレンチとも、良好な状態で遺跡が遺存しており、遺物包含層が確認され（Ⅲ層）、Ⅳ層上面において、竪穴住居址とみられる遺構を検出している。Ⅲ層まで深いことから、建物については影響がないものと判断したが、後日、南側の擁壁工事の際に工事立会を行った。この際に大量の弥生中後期及び古代の遺物が出土している。

第103図に遺物の一部を図示している。番号の後にトレンチ名の表記がないものは、全て擁壁工事の際の表探である。

1～3は、弥生時代中期の壺である。4は壺棺の口縁部、5は鉢である。6・7は弥生時代後期の壺、壺の底部、8・9は壺の脚台である。10は、壺の突縁部分であり、刻み目が施されている。11は砥石である。12・13は古代の遺物であり、12は須恵器の壺、13は土師器の壺である。このほか、中世の遺物も散見される。



第100図 五郎丸遺跡調査地位置図（A地点） S=1/5,000



第101図 五郎丸遺跡調査地周辺字図・トレンチ配置図 S=1/1,000

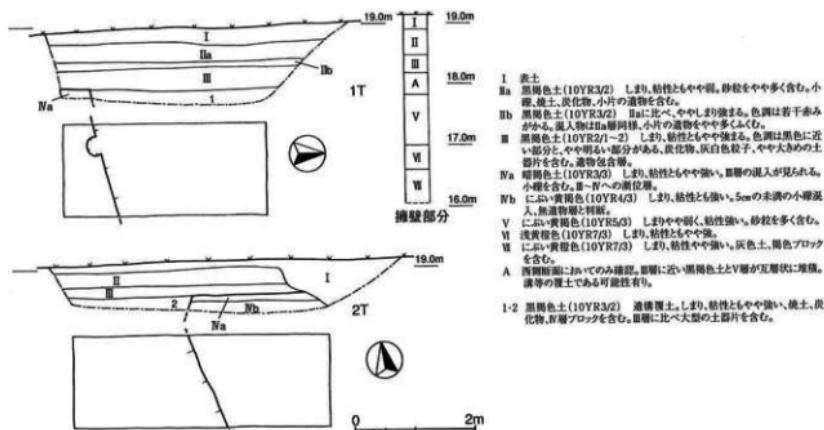


写真90 五郎丸遺跡調査地近景（西より）

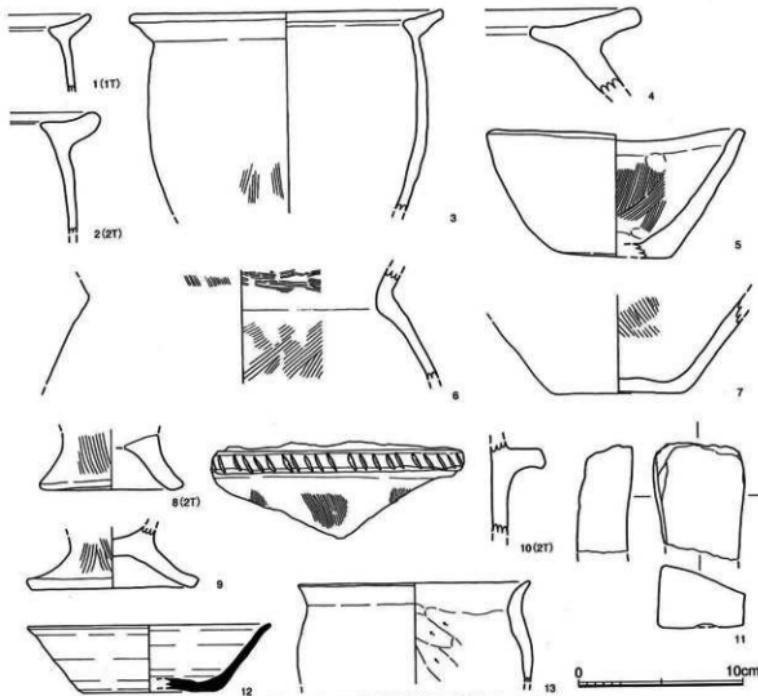


写真91 五郎丸遺跡 1T遺構検出状況

III 平成12年度の調査



第102図 五郎丸遺跡トレンチ実測図 S=1/80



第103図 五郎丸遺跡遺物実測図 S=1/80

III 平成12年度の調査

11 刀研遺跡

所在 地：石貫字見初山1674-1他6筆の一部
対象面積：500m²

調査期日：12年6月20日

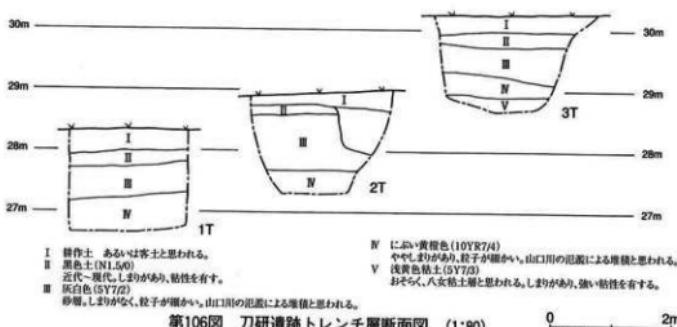
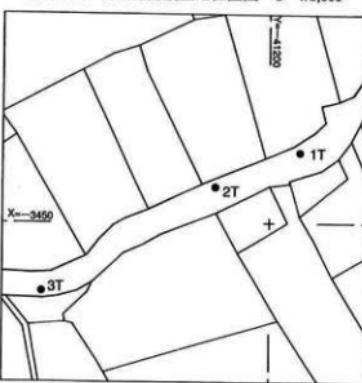
担 当 者：田中康雄

小代山周辺には、中世の製鉄関連の遺跡が数多く分布している。刀研遺跡もその一つであり、繁根木川支流の山口川中・上流に位置し、標高は70~30mである。

調査地は、南東に緩やかに傾斜する標高約28~30mの地点であり、周辺は小規模な集落が広がっており、宅地となっていた。調査原因は、市道の拡幅工事である。

工事区域の東端部、中央部、西端部に計3カ所のトレンチを設定し、重機掘削により確認を行った。表土及びI層はその際の客土及び耕作土等である。II層は、近代から現代にかけての旧地表面を形成していたものとみている。III・IV層は砂層で、各トレンチともかなり厚く堆積している。山口川の氾濫による堆積と考えている。V層は白色系の粘土層で、八女粘土層である。

この調査では、遺構・遺物、製鉄跡に伴う鉄滓等も確認されなかった。調査後の措置は、慎重工事である。



III 平成12年度の調査

12 玉名郡倉跡推定地（A地点）

所 在 地：立願寺755地先

対象面積：60m²

調査期日：12年6月26日～7月5日

担 当 者：竹田宏司・末永 崇

玉名郡倉跡推定地・玉名郡倉跡推定地・立願寺廃寺の3遺跡は、小代山南麓に広がる標高30m前後の丘陵上に位置しており、谷をはさんで独立しているため別の遺跡として扱われているが、立願寺廃寺をはさみ、北西に位置する玉名郡倉跡推定地から南東に位置する玉名郡倉跡推定地が、およそ600mの範囲に収まる。1950年代以降、田辺哲夫氏らが中心となって調査を行い、その成果をもとにそれぞれの遺跡の性格が想定されている。

玉名郡倉跡推定地は、1956年に田辺氏らによるトレンチ調査が行われ、礎石群が検出されており、遺跡の存在が明らかになった。瓦の出土量が少なく、炭化米が認められることなどから、郡倉跡と推定されている。

1992年には、玉名市史編纂事業の一環として、坂田邦洋氏による発掘調査が行われ、礎石建物・方形の掘形をもつ総柱の掘立柱建物などの遺構が確認されている。遺物は、炭化米の他、7世紀末から9世紀後半とみられる須恵器・土師器、少量の瓦などが報告されている。

調査地は、玉名郡倉跡推定地の中心部分を、南北に貫く市道となっている。調査原因は既設の水道管の敷設替えであり、市道の中央には、既に下水管も敷設されている。

市道の両側に建物群が確認されており、重要な遺構が存在することは確実であるが、掘削幅が60cmと狭いことから、本調査を行うことは困難であるため、工事の方法について協議を行い、礎石等重要な遺構が確認された場合には極力保存に努めること、可能な限り記録を作成すること

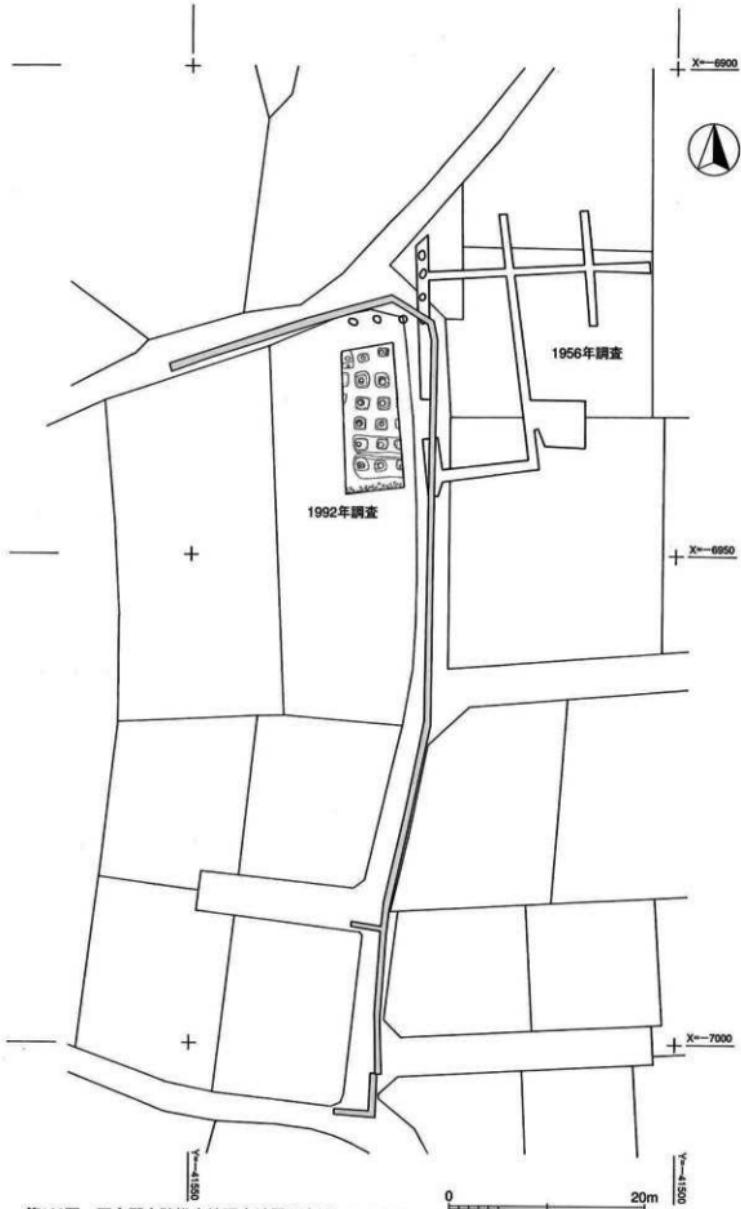


第10図 玉名郡倉跡推定地調査地位図(A地点) S=1/5,000



写真92 玉名郡倉跡推定地調査状況（南より）

III 平成12年度の調査



第108図 玉名郡倉跡推定地調査地周辺地図 S=1/500

III 平成12年度の調査

となどを条件に、工事立会を行うこととなった。工事立会に際しては、掘削の際に常時立会を行い、遺構の確認及び記録の作成を行っている。なお、検出された遺構については、平面及び断面のみの調査に留め、掘下げは行っていない。

60cm幅の調査範囲ではあるが、柱穴列・礎石などが確認されている。礎石は調査区北端部の $X = -6979$ ・ $Y = -41526$ 付近で検出されている（第110図）。1956年の調査の際に確認されていたもので、径約1m、石材は安山岩である。北側の断面で、径約1.2m、深さ約25cmの土坑状の落ち込みが認められ、礎石に伴う堀方と判断しているが、根石は確認されておらず、また、南側の断面では明確に検出していない。礎石の堀方とみられる遺構の下位にも、掘建柱建物の柱穴としてはやや浅すぎる土坑状の落ち込みが認められるが、性格は不明である。この部分は、礎石の下位に柱穴が存在している可能性がある。田辺は南北4間、東西5間の総柱建物を想定している。北側に続く3石は現状で露出しており、南側に1石が想定されている。西側の1石も道路際に一部が露出している状態である。検出された礎石については、極力影響を与えない形で水道管を埋設することになり、現状保存されている。

古代の掘建柱建物に伴うと判断した柱穴は、18基あまりが確認されている。前述の礎石周辺で最低3基とみているが、狭い範囲に遺構が集中しており、不明確である。いずれもV層上面において検出することができる。 $X = -6930$ から $X = -6940$ 付近にかけては、やや規模の小さい柱穴が点在している状態である（第111図）。小規模な柱穴については、調査範囲全域にわたり散在しているが、覆土の特徴から、中世以降の所産である可能性が高い。この範囲では、1956年・1992年の調査で中世の漆としている遺構が

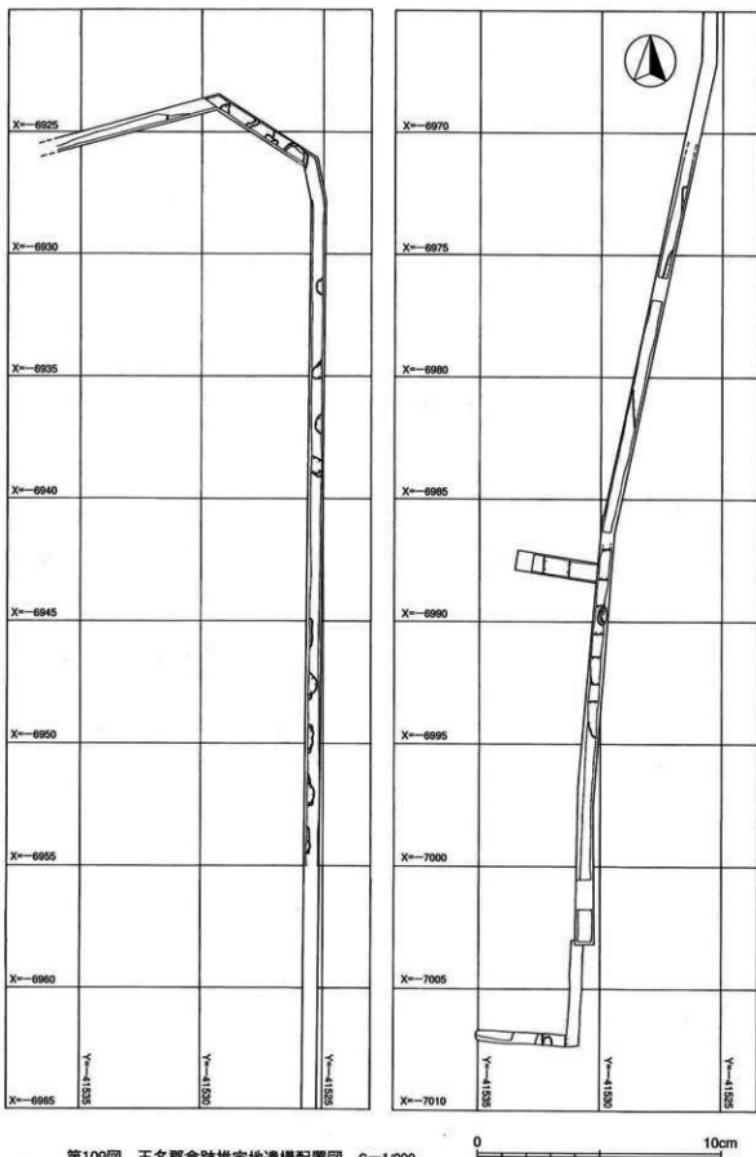
確認されている部分であり、1956年の調査で確認されている礎石3個が確認されたが、溝状遺構については、II層が落ち込んでいる状態であり、立ち上がりを明確に検出していない。なお、3個の礎石の内、南側の1個は、工事の際に動いてしまったことから、移動し、玉名市博物館に保管してある。

$X = -6945$ から $X = -6955$ 付近にかけては、調査範囲の西側にわずかにかかっている状態ではあるが、9基の柱穴が検出された（第112図）。2棟が切り合っている状態であり、柱穴⑨・⑪・⑬・⑮が上位の建物に伴い、⑩・⑫・⑭・⑯・⑰が下位の建物である。下位の柱穴が、径1～1.3mの規模で、いずれもコーナーのはっきりした方形に近い平面形を持つに対し、上位の柱穴は、径1m以下であり、円形に近い不正形である。覆土はいずれも、比較的粘性の強い土が5～10cm程度の単位で版築状になっている。柱痕跡は確認していないが、柱間隔は2.1m程度とみられる。建物の規模は、上位の建物が南北に3間、下位の建物が同4間である。

$X = -6955$ から $X = -6970$ 付近にかけては、明確な遺構が検出されなかったことから実測を行っていないが、 $X = -6956.5$ 付近で、II層中に径40cm程度の花崗岩の礎石が確認されているが、動いているものと判断している。

$X = -6970$ から本管埋設の南端である $X = -7002$ 付近にかけては、柱穴5基を確認している（第113図）。⑤は1基のみ単独で検出しており、調査範囲東側に柱穴の北西隅の部分が認められる。北側で検出されていないことから、南側に続くものと想定している。①から④は、径1.2～1.5mとやや規模が大きく、方形に近い平面形である。柱痕跡を確認していないが、柱間隔は2.1m程度と想定している。③の上位で礎石状の石材を確認しているが、上位の柱穴に伴う根石の

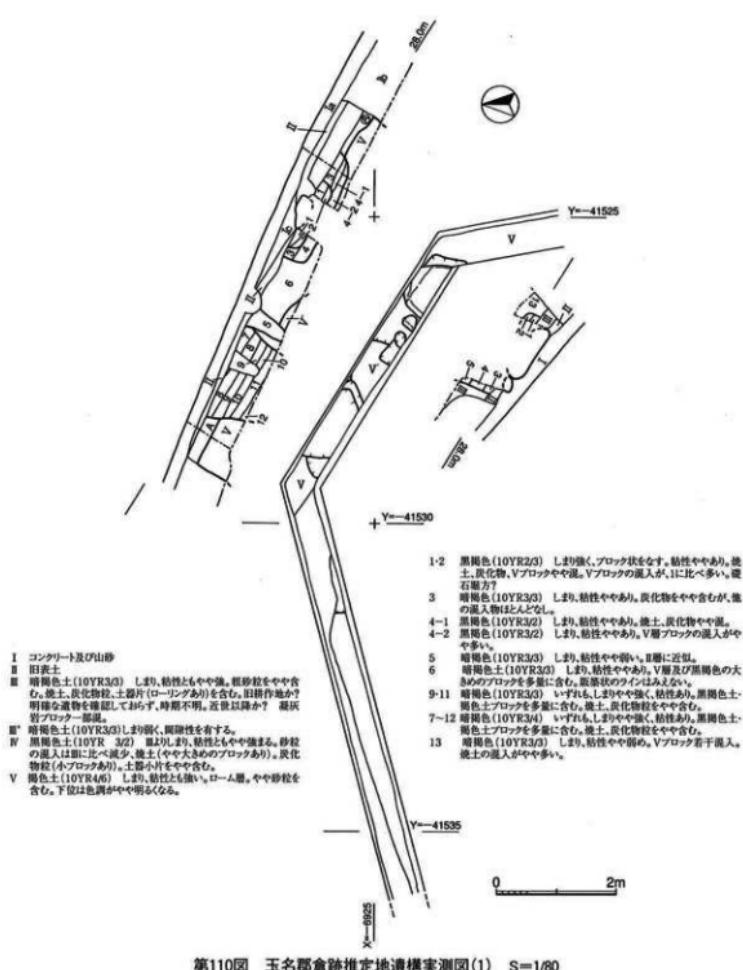
III 平成12年度の調査



第109図 玉名郡倉跡推定地遺構配置図 S=1/200

0 10cm

III 平成12年度の調査



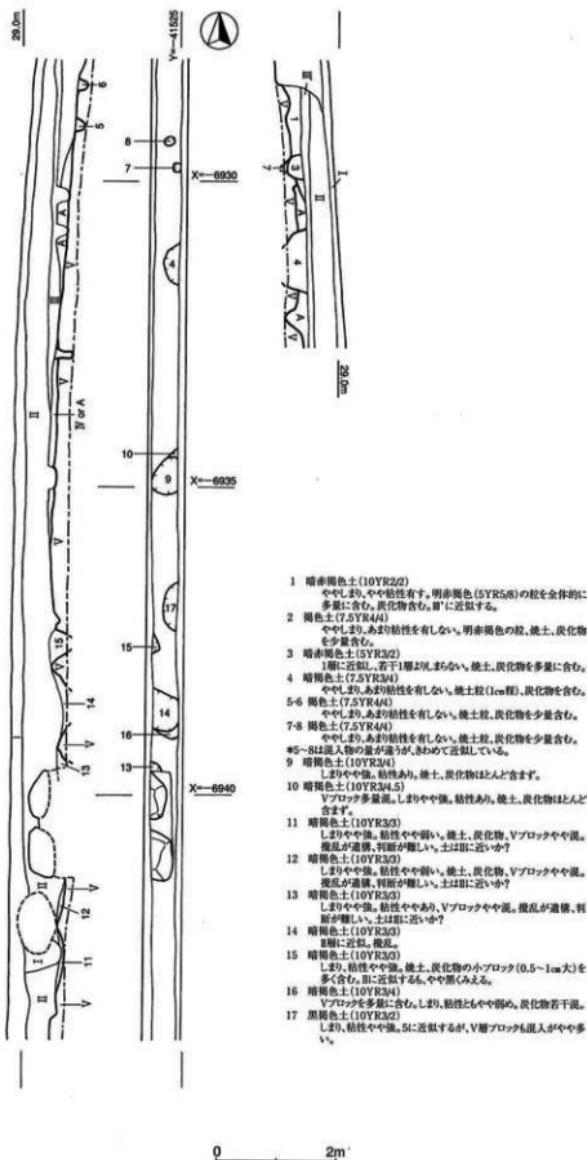
第110図 玉名郡倉跡推定地遺構実測図(1) S=1/80

可能性が大きいと判断している。断面の観察では、さらに上位のIV層上面からの柱穴も確認している。なお、南端部分で礫石とみられる石材が確認されているが、III層が落ち込んでいる部分(1956年確認の塗)であり、移動している可

能性がある。この中世の溝状遺構については、西側の立ち上がりのみ、平面で検出している。

X=-7002以降については、枝管の工事に伴う確認である。本管部分南端から続いてIII層に覆われており、礫石の可能性のある石材2個を

III 平成12年度の調査



第111図 玉名郡倉跡推定地遺構実測図(2) S=1/60

III 平成12年度の調査



第112図 玉名郡倉跡推定地遺構実測図(3) S=1/80

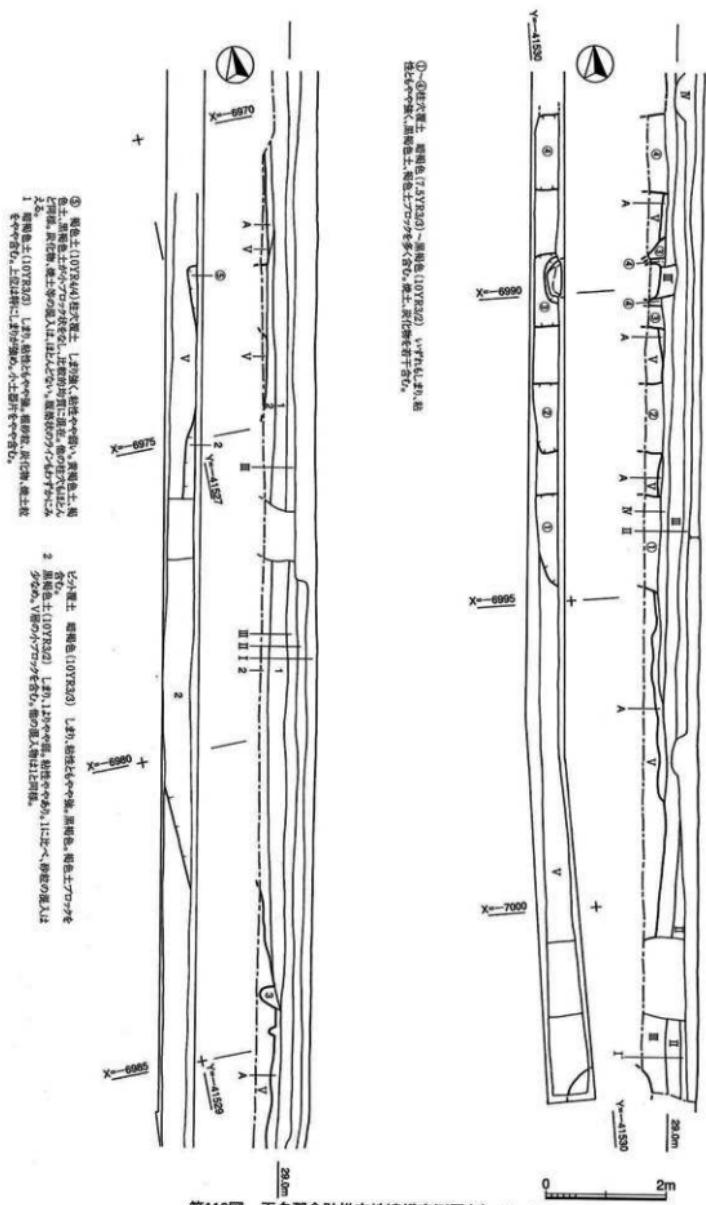
確認しているが、掘り下げを行っていないため、詳細は不明である。そのほか小規模な柱穴2基を検出している(第114図)。

X=-6988付近でも、枝管の工事に伴い柱穴を検出している。東西の規模は約1.1mで、南北は範囲外であるため不明である。両側辺が平行であることから、方形に近い平面形を持つものと想定している(第114図)。

参考文献

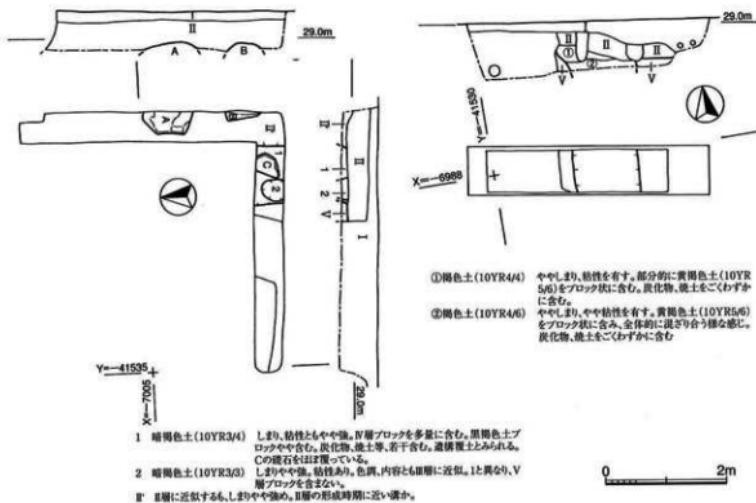
- 田辺哲夫 1956「玉名郡倉跡と推定せられる肥後立願寺の遺構」日本考古学協会業報別編7第18回総会研究発表要旨
田辺哲夫 1956「玉名郡倉跡と推定せられる肥後立願寺の遺構」「熊本史学」第10号
坂田邦洋 1994「玉名郡衙」玉名市歴史資料集成第12集

III 平成12年度の調査



第113図 玉名郡倉跡推定地遺構実測図(4) S=1/80

III 平成12年度の調査



第114図 玉名郡倉跡推定地遺構実測図(5) S=1/80



写真93 玉名郡倉跡推定地調査状況（北西より）



写真94 玉名郡倉跡推定地磁石検出状況（東より）



写真95 玉名郡倉跡推定地遺構検出状況（北西より）

III 平成12年度の調査



写真96 玉名郡倉跡推定地柱穴⑨～⑯検出状況（南より）



写真100 玉名郡倉跡推定地柱穴①～④調査状況（南より）



写真97 玉名郡倉跡推定地柱穴⑪・⑫検出状況（南東より）



写真101 玉名郡倉跡推定地柱穴①～④検出状況（南より）

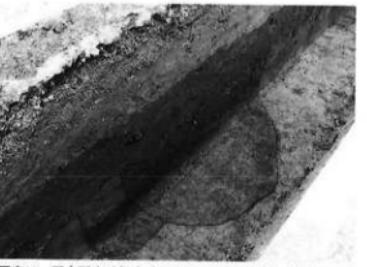


写真98 玉名郡倉跡推定地柱穴⑮・⑯検出状況（南東より）



写真102 玉名郡倉跡推定地調査状況（南より）



写真99 玉名郡倉跡推定地柱穴⑰検出状況（南東より）



写真103 玉名郡倉跡推定地調査状況（南より）

III 平成12年度の調査

13 穂峯遺跡（A地点）

所在 地：山田字穂峯1914-1

対象面積：835.8m²

調査日：12年6月21日

担当 者：末永 崇

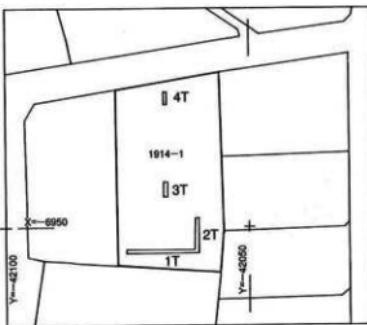
調査地は、小代山から南に延びる丘陵地上に位置する、標高30m~31mの地点であり、現況は畠である。対象地に計4カ所トレンチを設定して埋蔵文化財の状況を確認した。

建物部分のトレンチでは、層位は4層に分かれる。I・II層は畠作に伴う層であり、ローリングを受けた土器片を含む。III層は黒褐色を呈する層で、中世の遺物を含む。IV層は上位の層と比べ、やや締まりが無く、部分的に明褐色土を含んでおり、土器片をわずかに含む。V層は無遺物層と判断され、上面で小穴数基を確認したが、根穴等の可能性もあり、明確な造構は確認されなかった。また、北側に設定した地形確

認用のトレンチでは、道路際で耕作土直下にV層が確認され、北に向けて急激に地形的に上がっていたと思われる。

出土遺物を第118図に図示している。1は土師器の壺であり、底部は糸切り未調整である。2は、安山岩の台石もしくは石皿である。

調査後の措置は、慎重工事である。

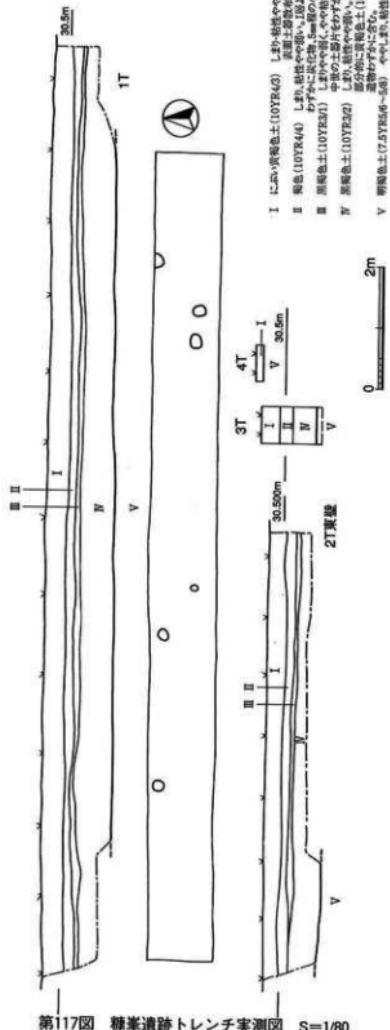


第116図 穂峯遺跡調査地周辺字図・トレンチ配置図 S=1/1,000



第115図 穂峯遺跡調査地位置図(A地点) S=1/5,000

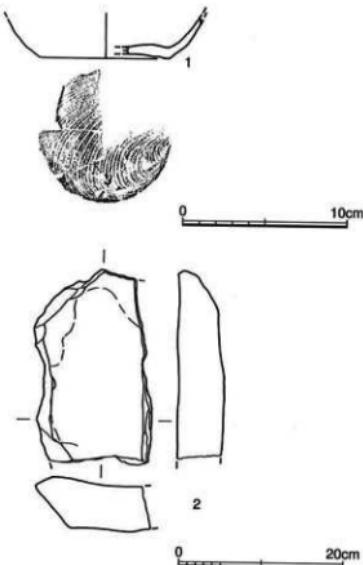
III 平成12年度の調査



にふく質褐色土(10YR4/3)
I 棕褐色土(10YR4/4)
II 黄褐色土(10YR4/4)
III 黑褐色土(10YR4/2)
IV 黑褐色土(10YR4/6)
V 明褐色土(7.5YR5/6-5/5)

しわ状地盤やや弱い。鉢状やく。
地盤やや弱い。表面の水がやく。
地盤やや弱い。表面の水がやく。
地盤やや弱い。表面の水がやく。
中盤の土片がよく、やや劣化する。
しまの、底やや弱い。やや劣化する。
分層がよく、やや劣化する。

やや弱い。表面をやく。
やや弱い。表面をやく。
やや弱い。表面をやく。
表面をやく。



III 平成12年度の調査

14 春出遺跡

所在地：中字陣内1452-2、1452-4の一部
対象面積：259m²

調査期日：12年6月27日

担当者：末永 崇

調査地は、境川左岸の低段丘上に位置し、標高16.7m前後の地点である。周辺では、中尾・春出地区として確認調査を実施しており、古代・中世の遺構・遺物が確認されている。専用住宅の建設に伴い、確認調査を実施した。

調査地内に2本トレンチを設定し、重機掘削により埋蔵文化財の状況を確認した。調査の結果、層位は大きく4層に分かれ、I・II層が耕作に伴う擾乱を受けた層であり、土器片をわずかに含んでいる。III層は暗褐色土を呈する層で、古代の遺物を包含する。IV層は無遺物層と思われ、上面が遺構検出面になる。遺構は、小規模なピット1基を検出している。

調査後の措置は、慎重工事である。

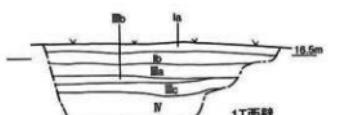


第119図 春出遺跡調査地位置図 S=1/5,000



第120図 春出遺跡調査地周辺字図・トレンチ配置図

S=1/1,000



Ia 山砂(客土)
Ib 黒色土(10YR4/1) あまりしません。粘性を有しない。ビニール等混入。
耕作土。

II 土色土(10YR4/4) あまりしません。粘性を有しない。炭化物、黄褐色の小粒、2cm~3cmの小粒を少量含む。

III 土色土(10YR4/4~4/6) ややしません。粘性を有する。黄褐色の小粒(1cm程)

を多く含み、炭化物をわずかに含む。

IV 黒褐色土(10YR3/3~3/4) 黒褐色土(10YR2/3) あまりしません。粘性を有する。炭化物、黄褐色の小粒等

を多く含み、炭化物をわずかに含む。

以上の粘性が強い。

Re 黑褐色土(10YR2/3) ややしません。粘性を有する。炭化物、黄褐色の小粒等

を多く含み、ごくわずか。粘性が最も強い。

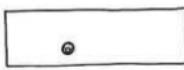
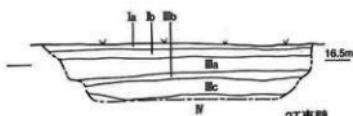
N に近い赤褐色土(5YR4/4) しません。粘性を有する。無遺物層と判断され、

上面が遺構検出面となる。

*ピット埋土 黒色土(10YR2/1) し的があり、粘性を有す。炭化物をわずかに含む。

土器片1点出土。

*遺物包含



0 2m

第121図 春出遺跡トレンチ実測図 S=1/80

III 平成12年度の調査

15 穂峯遺跡（B地点）

所在地：立願寺字西畑880-8、165

対象面積：165m²

調査期日：12年8月9日

担当者：末永 崇

調査地は、小代山から南に延びる丘陵地上の、標高27.4～27.5mの地点に位置し、現況は畠である。調査依頼に基づき、確認調査を実施した。

調査地内に80cm×80cmのトレンチを3ヵ所設定し、人力により掘削し、確認を行った。その結果、耕作土の下は山砂により客土されており、その下から明褐色の無遺物層と判断される層が確認された。よって旧地形は削平を受けており、付近に遺物の散布もないことから、包含層及び遺構が存在する可能性は低いと考えられる。

16 高岡原遺跡（B地点）

所在地：玉名市山田字高岡原2014-1

対象面積：453m²

調査期日：12年10月5日

担当者：竹田宏司

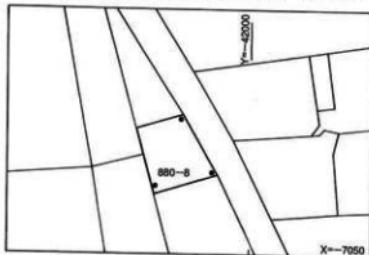
調査地は、高岡原遺跡の東端に位置し、東側に包蔵地の範囲を拡張した部分である。標高は27m前後であり、高岡原遺跡の東側では最高所にあたる。調査原因は店舗の建設であるが、小規模な掘削であるため、工事立会を行うこととなった。

現地表面下20cm前後の表土があり（I層）、その下に20cm前後の旧耕作土とみられる暗褐色土層が認められる（II層）。その下は褐色から黄褐色の粘質土であり、焼土・炭化物等の混入物や、遺物など確認されなかったことから、無遺物層と判断した（III・IV層）。

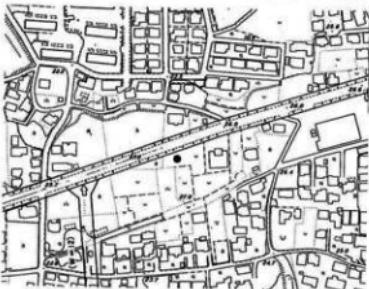
遺構・遺物ともに、確認されていない。



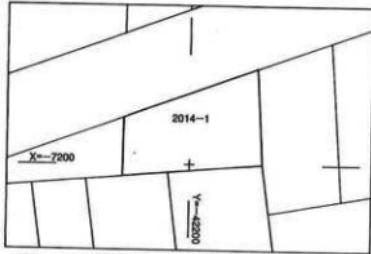
第122図 穂峯遺跡調査地位置図(B地点) S=1/5,000



第123図 穂峯遺跡調査地周辺字図・トレンチ配置図 S=1/1,000



第124図 高岡原遺跡調査地位置図 S=1/5,000



第125図 高岡原遺跡調査地周辺字図 S=1/1,000

III 平成12年度の調査

17 五郎丸遺跡（B地点）

所在地：玉名市山田字白石535-1、534-5

対象面積：533m²

調査期日：12年10月18日

担当者：末水 崇

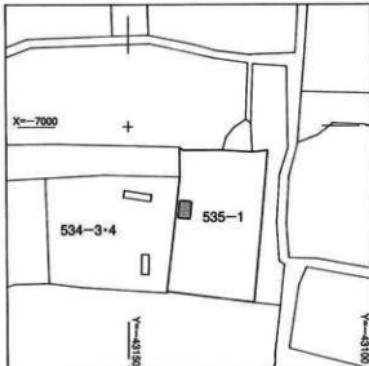
小代山南麓から南へのびる舌状台地の西側緩斜面に位置する、標高約19mの地点である。西側隣接地では、2000年6月14日に確認調査、6月20日に擁壁工事の立会を実施しており、弥生時代中期・後期の遺物が多量に出土し、竪穴住居址の存在が確認されている。

調査地については、造成の時点で約1mの盛土が行われていることが確認されており、建築物の基礎は盛土内に収まるため支障無いものと判断したが、浄化槽については旧地表面に掘削がおよぶため、工事立会を行った。工事が行われた範囲は、南北3m、東西2mほどである。上位の土層については重機による掘削を行い、V層上面で遺構が確認されたため、重機掘削を中止し、人力により遺構の確認及び掘り下げを行った。

検出した遺構は、竪穴住居址2基・ピット1基である。S01は竪穴住居址である。南東隅の部分のみ検出している。柱穴1基を確認しているが、全体の構造・規模は不明である。第129図1～8がS01の出土遺物である。弥生時代中期・後期の遺物が混在しており、竪穴住居址の時期に伴うものは明確ではないが、弥生時代後期の所産であると判断している。S02も竪穴住居址である。S01に切られており、南東隅の部分をわずかに検出したのみである。第129図9～12がS02の出土遺物である。状況は、S01同様である。そのほか、第129図13はピット（S03）、14・15は包含層出土である。15は、瓦器椀の底部である。



第126図 五郎丸遺跡調査地位置図(B地点) S=1/5,000

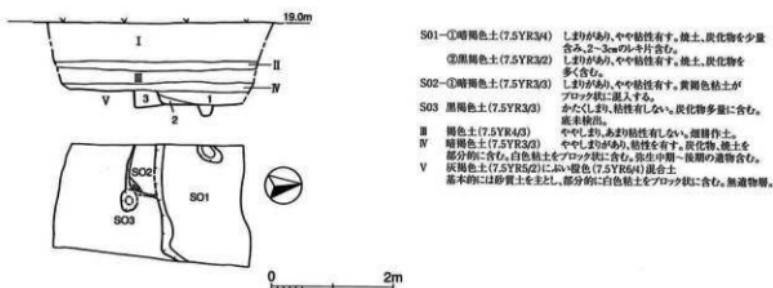


第127図 五郎丸遺跡調査地周辺図・調査範囲図 S=1/1,000

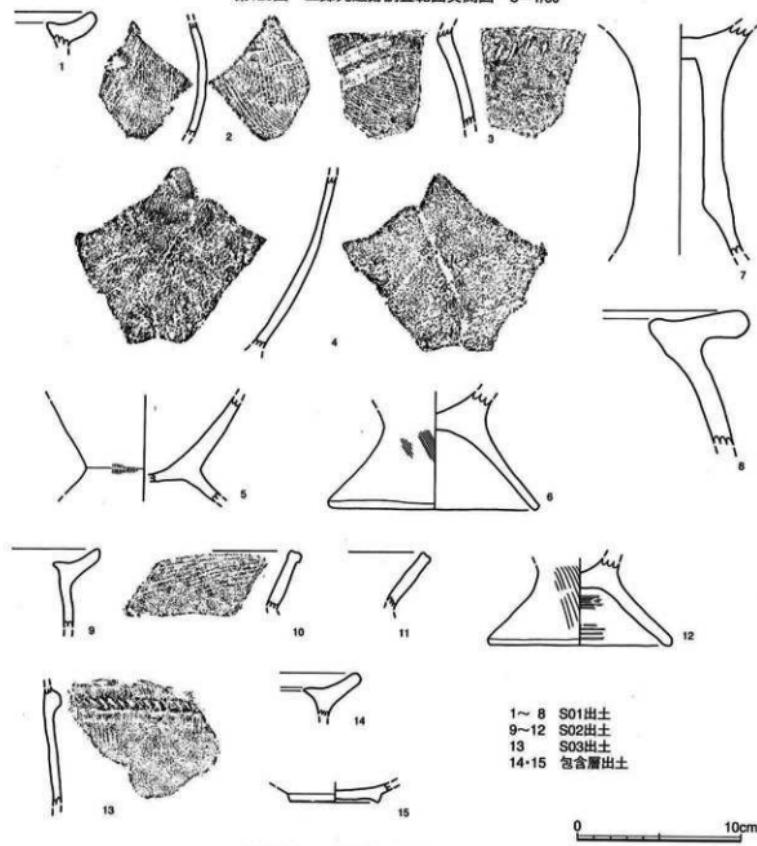


写真106 五郎丸遺跡遺構検出状況（北より）

III 平成12年度の調査



第128図 五郎丸遺跡調査範囲実測図 S=1/80



第129図 五郎丸遺跡遺物実測図 S=1/3

III 平成12年度の調査

18 立願寺廃寺（A～D地点）

立願寺廃寺は、松本雅明・田辺哲夫両氏を中心に、1954年に発掘調査がおこなわれた。礎石などが確認されており、報文によれば、トレンチでの成果と瓦の散布状況などから法起寺式の伽藍配置をもつ寺院跡と推定されている。

1992年には玉名市史編纂事業の一環として、坂田邦洋氏による発掘調査が行われており、礎石建物・掘立柱建物などが確認されている。

従来、立願寺跡が位置する台地の中心部は、進入路が確保できないため、周辺の宅地化が進んでも、依然畠地のままであったが、土地所有者らによって台地上を貫く道路が建設されたことから、近年急速に開発が及んでいる。

平成12年11月から12月にかけて、個人住宅・共同住宅の建設及び市道改良工事に伴い、4件の確認調査を実施した。混乱を防ぐため、A～

Dの地点名を付しており、遺物の注記等は、西暦の末尾二桁を付して、00A～00Dとしている。なお各地点の報文は、調査直後の知見をもとにしており、13年度にD地点の本調査を実施したことから、新たな知見が加わっており、現在では見解が異なる部分がある。

〈参考文献〉

- 田辺哲夫 1955 「立願寺廃寺跡調査中間報告」
日本考古学協会彙報別篇4 第15回総
会研究発表要旨
- 田辺哲夫 1987 「立願寺瓦」を出土する五遺
跡の性格」「乙益重隆先生古希記念
九州上代文化論集」
- 坂田邦洋 1994 『玉名郡衙』 玉名市歴史資料
集成第12集



第130図 立願寺廃寺調査位置図 S=1/5,000

III 平成12年度の調査



第131図 立願寺廃寺調査地周辺字図・トレーンチ配置図 S=1/500

III 平成12年度の調査

立願寺廃寺（A地点）

所 在 地：立願寺字塔ノ尾1214-1、1215-2

対象面積：282m²

調査期日：12年11月6日～11日

担 当 者：竹田宏司

調査地の現況は畠であり、標高は35.3m前後の地点である。1992年に調査が行われた地点の北側隣接地であるが、現在では、両地の間に道路が造られている（第131図）。

調査原因は、専用住宅の建築工事である。予定建物への影響を考慮し、基礎の部分の掘削を避けて、建物の周囲にL字型にトレーナーを設定した（第132・133図）。

その結果、現地表面下30cmの深さから下に、10cm前後の厚さで黒褐色土層（Ⅲ層）が確認され、瓦が多量に出土した。出土した瓦の内、軒丸瓦・軒平瓦を第141図に図示している。瓦の集中は、第1トレーナーの西端付近と、第2トレーナーの中央部及び南端で確認されている。層の解釈については、狭い範囲の調査であるため、判然としない部分もあるが、8世紀までの遺物しか確認しておらず、古代の整地層である可能性もある。

Ⅲ層上面及びⅣ層上面において、柱穴・溝・瓦集中部などの遺構が検出された（第133図）。図上では、径1m程度の方形の柱穴が確認されているように見えるが、検出面で留めており、掘り下げを行っていないため、明確ではない。P9で柱痕跡に見える部分があるが、これは中世の柱穴が切っている状態である。溝状遺構（D1）は、第2トレーナー北端部で検出されており、東西方向に延びている。覆土中に、瓦をやや多く含んでいる。

この結果を受けて、主体者側と協議の結果、設計変更により現状保存が図られている。



写真107 立願寺廃寺A地点調査地近景(西より)



写真108 立願寺廃寺A-1 T全景(西より)

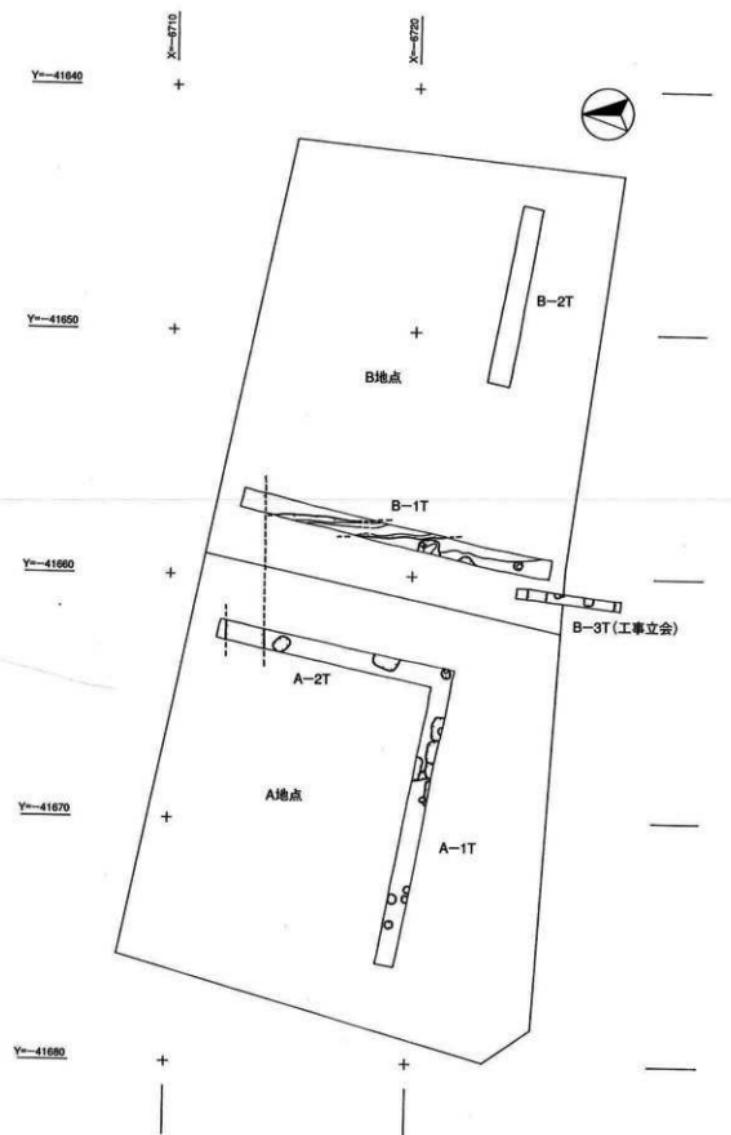


写真109 立願寺廃寺A-2 T全景(南より)



写真110 立願寺廃寺A-2 T遺物出土状況(東より)

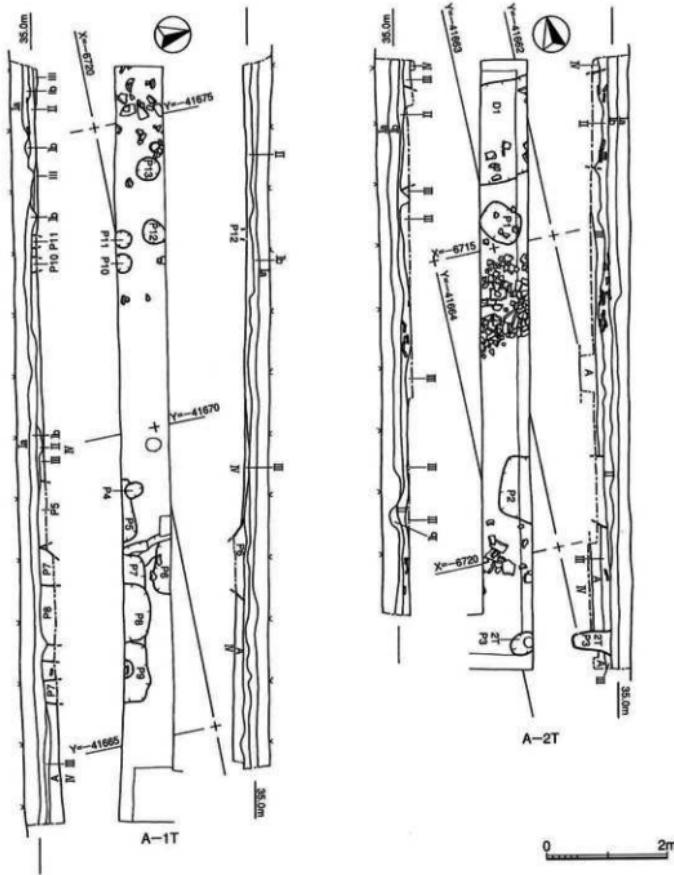
III 平成12年度の調査



第132図 立願寺廃寺遺構配置図(A・B地点) S=1/200

0 10m

III 平成12年度の調査



- Ia 表土(深耕作土)
 Ib 黒褐色土(10YR3/2) しまりややしまり強。小土粒子、瓦片、小礫、燒土、無機物質。やや砂粒子細。深耕作土である。現在の層の基盤をなす。
 II 黒色土(10YR2/1) しまり、粘性としやや強。暗褐色土が底層に混入。燒土物性物質を含む。出土した瓦のほとんどがこの層であり、多量の瓦を含む。透蘇の一部は上の上位から入っており、疊層地の可能性もある。
 III 暗褐色土(10YR3/3-3/4) しまり、粘性としやや強。褐色、暗褐色土の小ブロックをやや含む。焼土、燒化物質をやや含む。やや瓦等、燒土を含むが、正確な深度は不明。堆積のことは上位からなっている。耕種層である可能性の整地層である可能性もある。丁度前では、色調が明るく、やや砂粒子が粗い。
 IV 黑褐色土(7.5YR4/6) しまり、粘性としやや強。泥質土部分も含む。底層はにごりがあり暗褐色に近い部分もある。無機物質と細粒、ローラー圧。
 A 黑褐色土(10YR2/3) しまり、粘性としやや強。Ⅱ層間に混入してしまり強い。褐色土が部分的に斑状地に混じる。燒土、燒化物質を含むが、遺物は確認していない。ⅠTの黒褐色の部分が段がり、この部分がⅡTにかけて存在。地盤の可能性もある。しかし自然堆積の可能性も否定できない。
- P10 暗褐色土(10YR3/4) しまり、粘性やや強い。Ⅱブロック混、燒土、炭化物を含む。Ⅲ層上位から疊層認定。
 P11 P10土に沿ってが、Ⅱブロックを含まない。上部にⅢ層の混入有り。
 P12 暗褐色土(10YR3/3) しまり、粘性としやや強。Ⅱブロック混、燒土、炭化物質を含む。Ⅲ層下で疊層。
 P13 暗褐色土(10YR3/4) しまり、粘性としやや強。黑色土、褐色土、小ブロックや多く混。炭化物質をやや含む。Ⅲ層下で疊層。
 P21 黑褐色土(10YR3/2) しまり、粘性やや強。燒土、炭化物、瓦等を多く含む。Ⅲ層に埋っている判断したところのⅢ層は、色調がやや明るくなっている。Ⅲ層を切っている可能性もある。疊層遺構か、疊層中部に方位が記載してある。何かの關係を認めた可能性がある。
 P22 異常土(10YR3/3) しまり、粘性としやや強。Ⅱ層に近似しており、Ⅲ層上面で耕作。壤土中に瓦を多く含む。
 P23 暗褐色土(10YR3/3) しまり、粘性としやや強。背景ブロック、燒土、炭化物質をやや多く含む。瓦を含んでいる。Ⅲ層上面で検出されるが、色調がⅢ層に近く、Ⅲ層の部分のブランクはやや自信がない。混合物で判断。

第133図 立願寺庵寺トレンチ実測図(A地点) S=1/80

III 平成12年度の調査

立願寺廃寺（B地点）

所在 地：立願寺字塔ノ尾1214-8、1215-4、

1169-4、1169-6

対象面積：282m²

調査期日：12年11月24日～12月1日

担 当 者：竹田宏司

調査地の現況は畑であり、立願寺廃寺が位置する台地上、標高35.2m前後の地点である。1992年に玉名市史編纂に伴う発掘調査が行われた地点の北側隣接地であるが、現況では、両地の間に道路が造られている。なお、西側隣地についても、12年11月6日から11日にかけて確認調査を実施している（A地点）。

調査原因は、木造2階建て専用住宅の建築工事である。建物への影響を考慮し、基礎部分の掘削を避けて、建物の周囲に2カ所のトレンチを設定した。その結果、現地表面下30～40cmの深さから下に、中世の包含層であるⅡa・Ⅱb層が認められ、さらに古代の瓦・土器を含むⅢa・Ⅲb層が確認された。層の解釈については判然としない部分もあるが、Ⅲ層に関しては、整地層の可能性もあるとみている。第1トレンチでは、Ⅲ層上面及びⅣ・V層上面において、柱穴・溝などの遺構が検出された。南北方向の溝1、土坑、P1は、Ⅲ層上面において確認される遺構であり、中世の所産、東西方向の溝2、P2は、Ⅳ層もしくはV層上面で検出されることから、古代の所産と判断している。溝2については、A地点においても、トレンチ北端で検出されている。第2トレンチでは、遺構は検出されなかった。

この結果を受けて、主体者側と協議の結果、設計変更により現状保存が図られている。

なお、D地点として報告している南側市道については、改良工事に伴い、平成13年度に発掘調査を実施している。その際に溝1の続きとみられる溝状遺構を検出しており、ほぼ南北方向に



写真111 立願寺廃寺B地点調査地近景(南より)



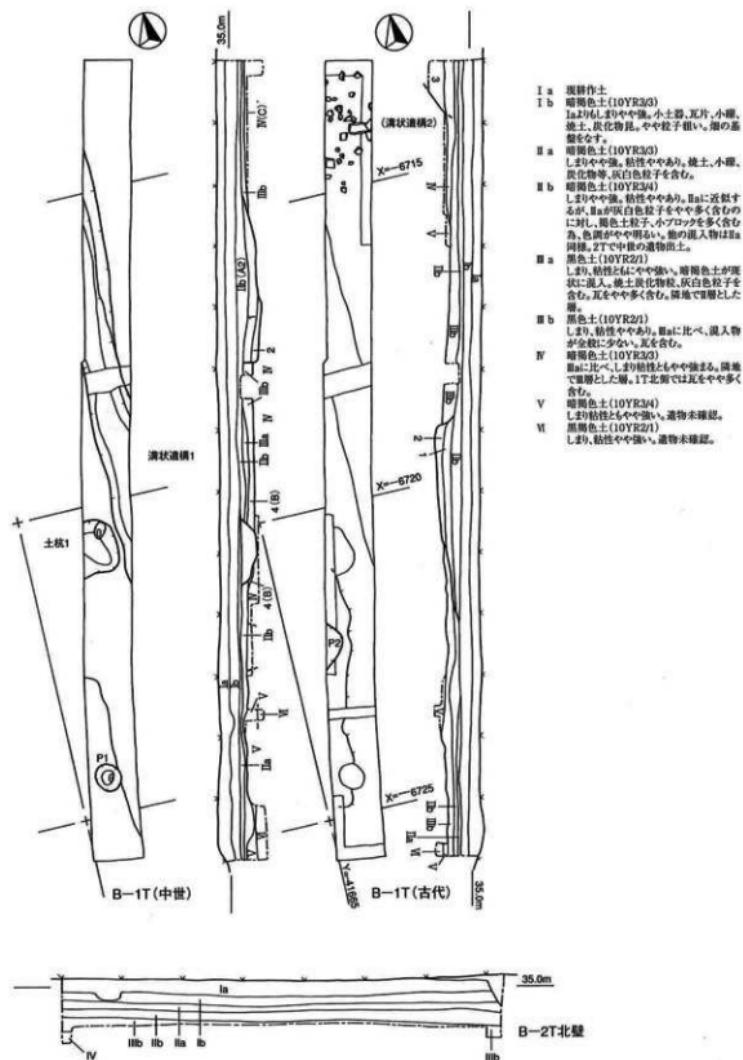
写真112 立願寺廃寺B-1T全景(南より)



写真113 立願寺廃寺B-1T遺物出土状況(西より)

直線的に延びていることが確認されている。この遺構を境に、東西で下位の層序にも変化が認められることから、古代の区画を示している可能性があるとみている。

III 平成12年度の調査



第134図 立願寺廃寺トレーンチ実測図(B地点) S=1/80

III 平成12年度の調査

立願寺廃寺（C地点）

所在 地：立願寺字塔ノ尾1170-1

対象面積：875.85m²

調査期日：12年11月6日～16日

担当 者：竹田宏司

調査地は、立願寺廃寺が位置する台地の東側、標高33m前後の地点である。1992年に玉名市史編纂に伴う発掘調査が行われた地点から民家1軒をはさんだ東側に位置し、2m程度低くなっている。

調査原因は、鉄骨3階建て共同住宅の建築工事である。2カ所のトレンチを設定したところ、南側の第1、北側の第2トレンチとも地表面下20cm前後の深さで、南北方向の溝状遺構が検出された。このため両トレンチの間に、やや短めの第3トレンチを設定した。第1・第2トレンチのみ溝を完掘しているが、第1・第3トレンチは浅い溝であり、深さ1.5mを測る第2トレンチの溝とは別物である可能性が強い。第2トレンチの溝は、覆土下位がほとんど多量の瓦からなっており、廃棄されている可能性が高い。青磁、瓦質の擂鉢、土師器片などが出土しており（第140図）、溝そのものは中世の所産であるとみられる。第1・第3トレンチの溝は、上位が削平されたとみられ、深さ20cm前後残存しているにすぎない。遺物は、瓦及び土師器の小片のみであり、古代の可能性もある。なお、第1トレンチ東側で集中的に検出されている小穴群は、根穴等の可能性が高い。

以上は、調査直後の報文に基づくが、後日、D地点の調査を行った結果、第2トレンチの溝状遺構と考えていた遺構については、北側にも統いていないことが判明し、中世の廃棄土坑と判断するに至った。

この結果を受けて、主体者側と協議の結果、設計変更により現状保存が図られている。



写真114 立願寺廃寺C地点調査地近景(北より)



写真115 立願寺廃寺C-1T全景(東より)

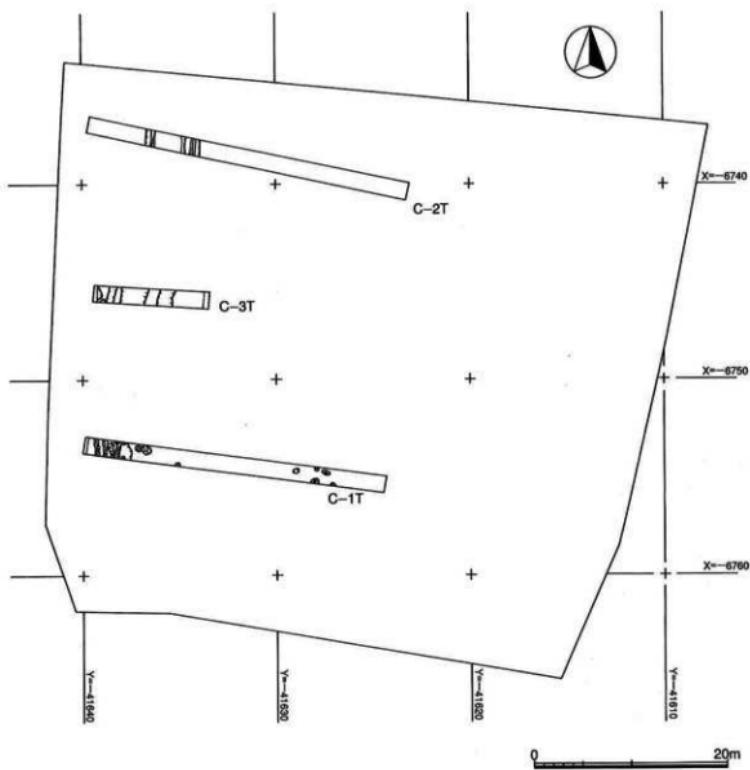


写真116 立願寺廃寺C-2T全景(東より)



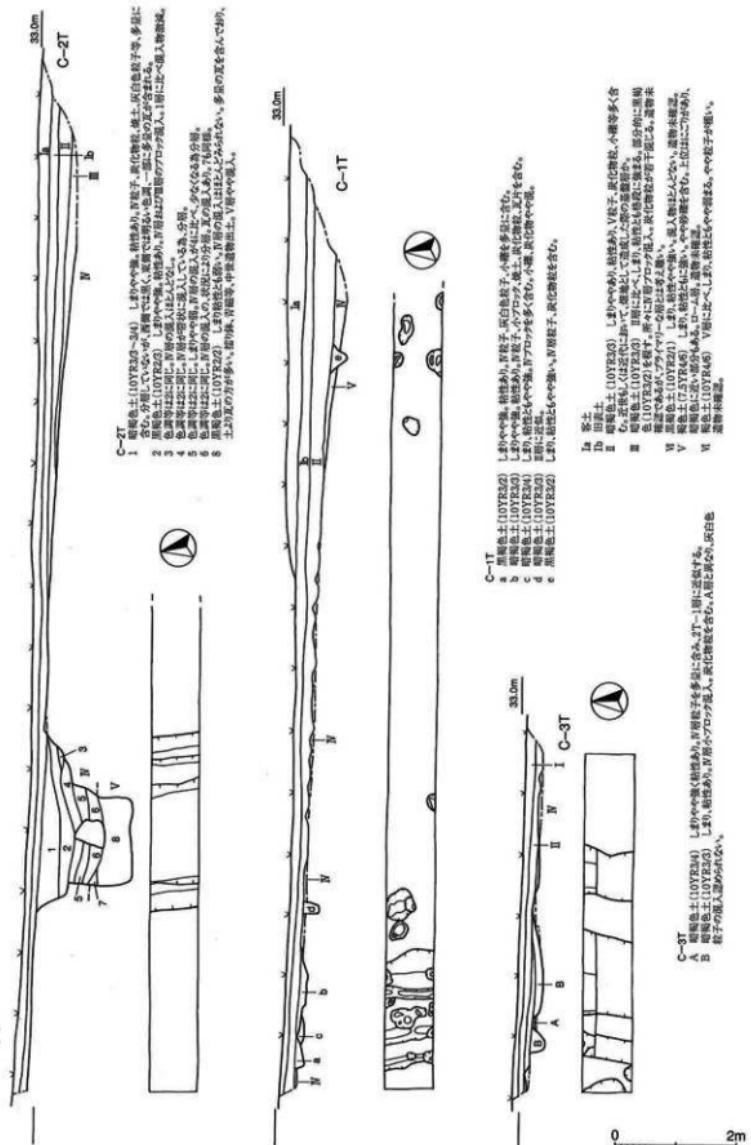
写真117 立願寺廃寺C-3T全景(東より)

III 平成12年度の調査



第135図 立願寺廃寺遺構配置図(C地点) S=1/500

III 平成12年度の調査



第136図 立願寺魔寺トレチ実測団(C地点) S=1/80

III 平成12年度の調査

立願寺廃寺（D地点）

所 在 地：立願寺字松尾原1160～字塔尾1233－2

対象面積：1,300m²

調査期間：12年12月19日～22日

担 当 者：竹田宏司

調査地は、立願寺廃寺が位置する台地を東西に貫く市道で、東西がそれぞれ低くなっている。調査地内での高低差は5mを超える。市道の舗装工事に伴い、確認調査を行った。なお、道路が建設された当初は私道であり、届出はされておらず調査も行っていない。

総延長260mの全域を対象に、18カ所のトレーニングを設定した（第137図）。トレーニングの面積は、調査対象面積の約6%にあたる。第9～12トレーニングを除き、ほとんどの部分で削平を受けており、第1～3、17・18トレーニングについては、Ⅶ層（火砕流堆積物）以下、第4～8、10、13～16トレーニングについてはV・VI層（ローム層・火砕流上位）以下の残存である（第138・139図）。残存状況が良好なのは、第9、11トレーニング及び12トレーニング西側の部分である。この3カ所については、瓦・土器等の遺物を包含するⅢ層以下が残存しており、Ⅲ層・Ⅳ層の上面が、中世・古代の遺構確認面となる。遺物は、5～15トレーニングで出土しており、遺構が確認されたのは、8～14トレーニングである。14トレーニングでは、C地点で検出されていた廃棄土抗と同様の遺構が検出されている。なお、Ⅲ層が残存している台地上のトレーニングについては、A・B両地点のデータが存在するため、あえて完掘していない。

この結果を受けて、既存の道路ではあるが、埋蔵文化財が直接影響を受ける約400m²について、平成13年度に本調査を実施している。



写真118 立願寺廃寺D地点調査状況



写真119 立願寺廃寺D-6T全景(東より)

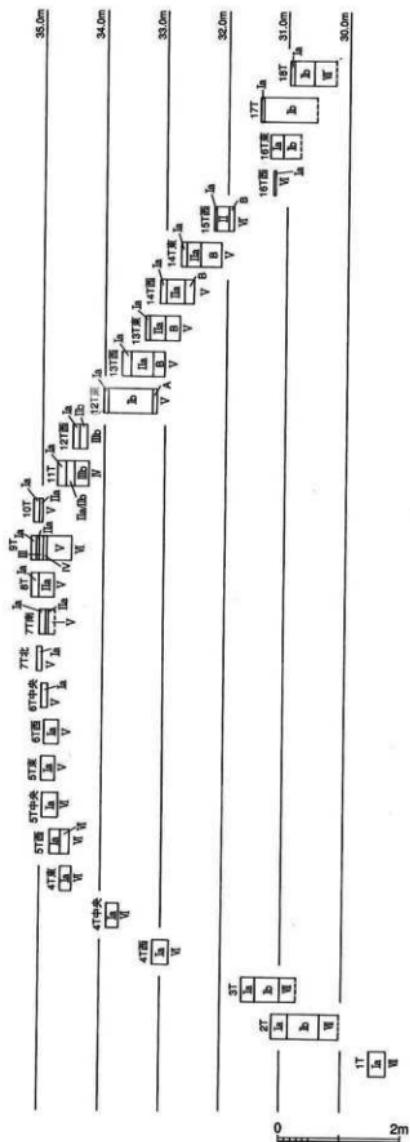


写真120 立願寺廃寺D-9T全景(南西より)



写真121 立願寺廃寺D-14T全景(東より)

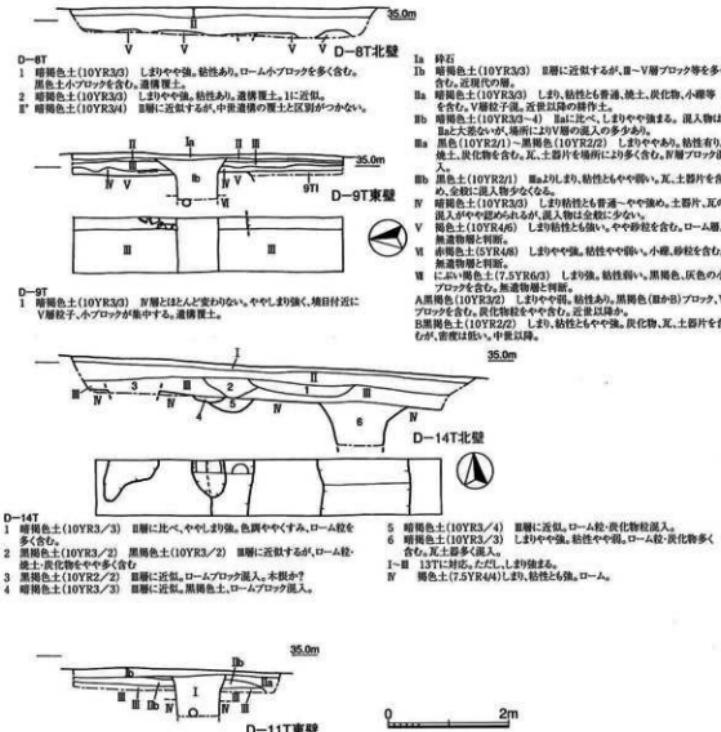
III 平成12年度の調査



第138図 立願寺庵寺 トレーニング断面図(D地点) S=1/80 第137図 立願寺庵寺 トレーニング配置図(D地点) S=1/1,000



III 平成12年度の調査



第139図 立願寺廃寺トレント実測図(D地点) S=1/80

遺物について

A～D地点出土遺物の一部を、第140～142図に図示している。第140図1～4は、A・B地点出土の土器である。1は、須恵器の壺である。外面の調整は回転によるナデ、内面は横方向の粗いナデである。2・3は須恵器の壺・盤、4は土師器の壺である。4は精緻な胎土を用いており、回転ヘラミガキの可能性があるが、器面が荒れており、不明瞭である。5～15は、C地点の第2トレント出土である。いずれも廃棄土坑からの出土である。5～11は須恵器である。

10は壺の口縁部であるが、焼成前に数カ所の窪みがついている。小片であり、意図的なものかどうかは不明である。12～14は中世の遺物であり、12は鉢形、13・14は青磁の碗である。15は鉢形土器であり、調整はミガキである。時期は不明であるが、古代以降の所産ではない。16～22はD-14トレントの廃棄土坑と考えている遺構の出土であり、いずれも須恵器である。全地点とも須恵器の供膳具がほとんどであり、土師器は希である。概ね8世紀後半～9世紀のものがほとんどであり、一部に7世紀代のものも含

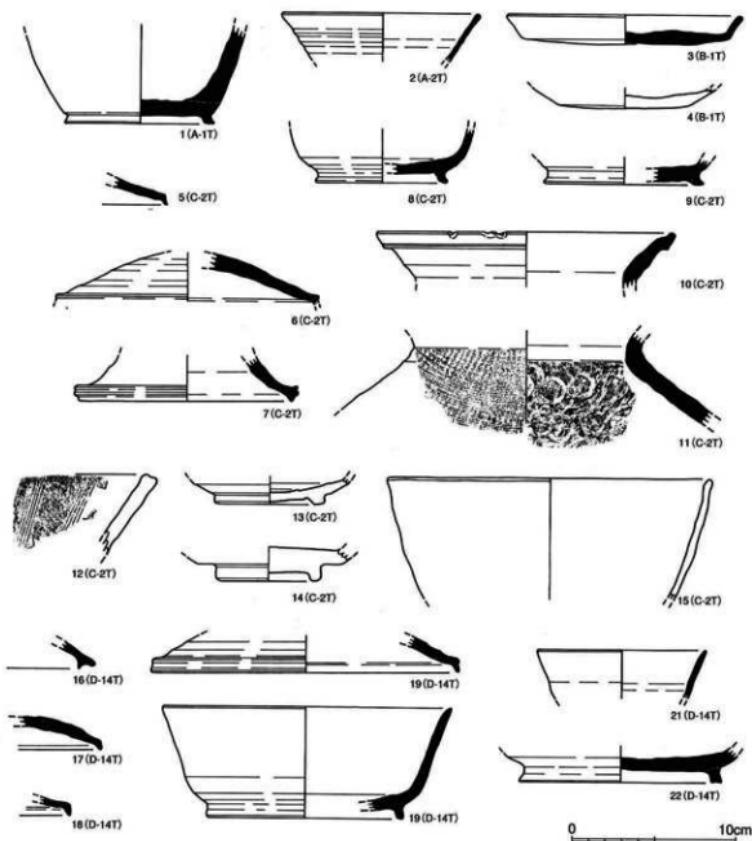
III 平成12年度の調査

れる他、中世の遺物が出土している。

第141~142図は瓦である。第141図1・3は鬼面文軒丸瓦である。いずれも鬼面の鼻から頸の部分のみ残存している。第141図2・4は、複弁八葉蓮華文軒丸瓦であり、嵌め込み式の瓦当部分である。第141図5は、重弧文軒平瓦である。4重の弧のうち最下段部分を欠損している。第142図1は、行基葺きの丸瓦である。繩目のタ

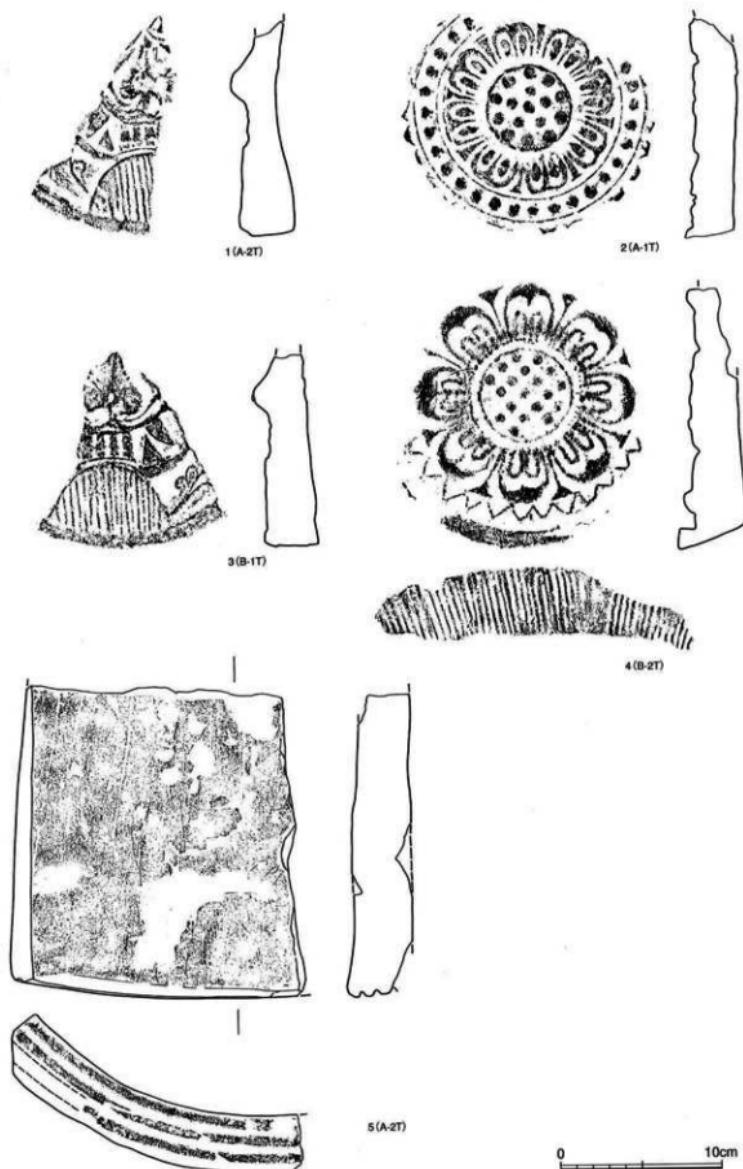
タキが認められる。

製作技法については、十分な検討を行っていないが、確認したものについては、軒丸瓦に瓦当嵌め込み式の技法が用いられていること、わずかな個体数ながら切り離しの際のコビキ痕が認められること等があげられる。タタキは格子目と繩目が認められるが、比率については、確認していない。



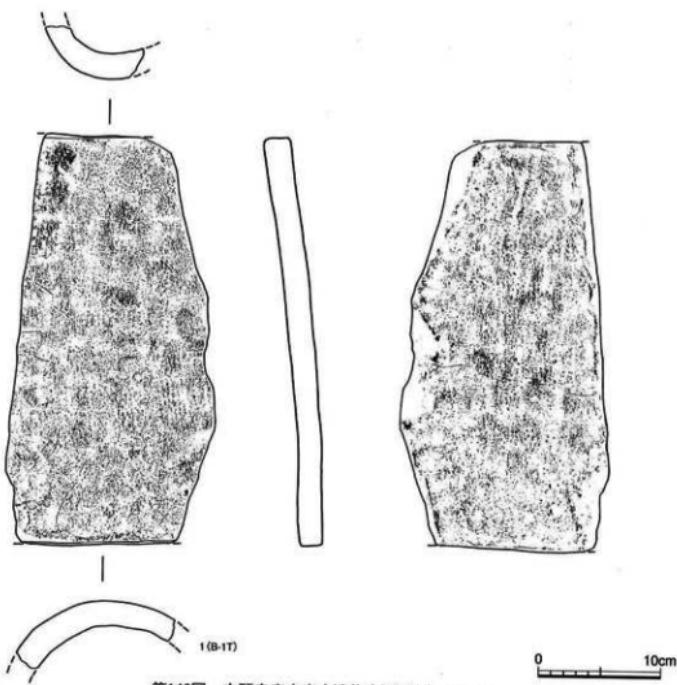
第140図 立願寺廃寺出土遺物実測図(1) S=1/3

III 平成12年度の調査



第141図 立願寺廃寺出土遺物実測図(2) S=1/3

III 平成12年度の調査



第142図 立願寺廃寺出土遺物実測図(3) S=1/4



写真122 立願寺廃寺A地点出土軒平瓦

III 平成12年度の調査

19 一本松遺跡

所在 地：伊倉北方2080-1外11筆

対象面積：48,565.57m²

調査期日：12年11月28日～29日

担当 者：田中康雄

一本松遺跡は、玉名市南東部、伊倉丘陵性台地上に位置する遺跡である。弥生時代から中世の包蔵地とされており、甕植群の存在が伝えられている。調査地は、県養鶏試験場の跡地で、平坦面が形成されており、地形の改変が著しい。

公共福祉施設の建設に先立ち、調査依頼により、確認調査を実施した。敷地内にトレンチを22カ所設定し、重機掘削により実施している。

調査の結果、22カ所のトレンチの内、南端部以外の大部分のトレンチで、表土直下に地山面が確認され、地山の上層が確認された箇所でも数cm程度であった。このことから、以前所在した県養鶏試験場建設の際の造成で、大規模な削平が行われており、遺構、遺物が存在していたとしても既に削り取られていると判断される。南端部については、造成の際の廃土が地山上に厚く堆積しており、遺構、遺物等も確認されなかつた。

その後の措置は、慎重工事である。



第143図 一本松遺跡調査地位置図 S=1/20,000



第144図 一本松遺跡調査地位置図 S=1/4,000

III 平成12年度の調査

20 上小田宮の前遺跡

所在 地：上小田928-2～962-3

対象面積：3,600m²

調査期日：12年11月29日～30日

担当 者：末永 崇

調査地は、菊池川左岸の玉名平野北部に位置する、標高7.9m～9.0mの地点である。一帯は、昭和38年に第1次構造改善事業に伴い、耕地整理が実施されている。

調査対象地区内に12カ所のトレンチを設定し、調査を実施した。その結果、全域にわたって、耕地整理時の整地層及びそれ以前の水田耕作土中から古墳～近世の遺物が確認された。旧水田耕作土から下層にかけては遺構、遺物は確認されていない。東側の11、12トレンチについては、整地層の下には旧水田層は確認されず、さらに下層から遺物が検出されたが、流れ込みとみている。

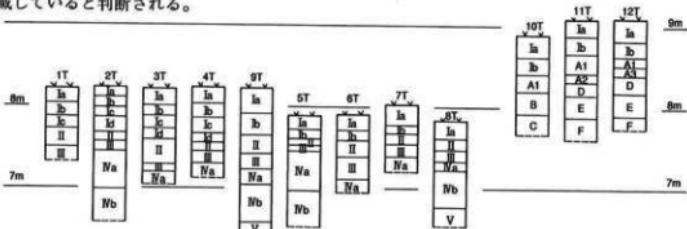
以上のような状況であり、調査地点及びその周辺は、耕地整理の段階までに大部分が削平を受けている様子が伺える。県文化課調査の12トレンチもふくめ、今回調査した範囲では、遺構が確認されなかったことから、12トレンチより東側には遺跡の範囲は広がっていないか、既に消滅していると判断される。



第145図 上小田宮の前遺跡調査地位置図 S=1/20,000



第146図 上小田宮の前遺跡トレンチ配置図 S=1/5,000



I 黄褐色土。あまりしまらず、やや粘性を有す。マンガン、酸化鉄を含む。近世～古代の遺物を含む部分的に灰褐色砂質土が混ざり合う。上层が現在の水田耕作である。

II 耕作赤土。あまりしまらず、粘性を有す。酸化鉄をわずかに含む。近世～古代の遺物を含む。旧水田耕作土。

III 黄褐色土。ややしまり、粘性を有す。酸化鉄を多量に含む。マンガンを少量含む。

IV 黄褐色土。ややしまり、粘性を有す。マンガンを多量に含み、h層はマンガン量が少ない。

V 灰褐色土。あまりしまらず、強い粘性を有す。部分的に砂質土が混入し、色調も暗くなる部分もある。

VI 灰褐色土。あまりしまらず、強い粘性を有す。無遺物層。

A 黄褐色土。あまりしまらず、やや粘性を有す。部分的に砂質土を混入する。遺物包含。

B 灰褐色砂質土。あまりしまらず、強い粘性を有す。無遺物層。

C 黑褐色土。あまりしまらず、強い粘性を有す。無遺物層。

D にじみ灰褐色土。ややしまり、粘性を有す。無遺物層。

E 黄褐色砂質土。しまりなく、粘性なし。部分的に礫片、粗石を含む。

F 灰褐色砂質土。しまりなく、粘性なし。部分的に礫片、粗石含む。

第147図 上小田宮の前遺跡トレンチ土層断面図 S=1/60

III 平成12年度の調査

21 玉名郡倉跡推定地（B地点）

所在 地：立願寺字西段768-2

対象面積：236.66m²

調査期日：12年12月25日～26日

担 当 者：田中康雄

調査地は、玉名市史の資料調査の一環として、1992年、坂田邦洋氏により調査が行われた地点の南側隣接地である。東側の市道は、本年6月から7月にかけて、水道工事に伴い工事立会を実施している。工事立会の際には、調査地東側隣接部分でも、地表面下50cm程度の深さにおいて、方形の掘形をもつ柱穴群が確認されている。

今回の工事については、専用住宅の車庫兼住居の増築であるが、基礎の掘削深度が1mに及ぶため、確認調査をおこなう予定であった。ところが、25日の段階で、設計業者から既に着工しているとの連絡があり、現地の確認に赴いた。その結果、既に基礎部分の掘削が完了しており、四隅のフーチング部分についてはローム層が露出している状態であった。このため、施工業者に対して調査が必要である旨伝え、工事の中止を要請、基礎部分の断面での確認を行うこととした。

翌26日、掘削されている基礎部分について断面および平面での確認を行ったが、ローム層直上まで削平されており、遺構及び明確な遺物包含層は確認されなかった。



第148図 玉名郡倉跡推定地調査地位置図(B地点) S=1/5,000



第149図 玉名郡倉跡推定地調査地周辺地図・調査範囲図 S=1/1,000



- | | |
|-----|---------------------------------------|
| I | 表土(山野) |
| II | 暗褐色土 ややしまりがあり、粘性を有する。土器片をわずかに含む。 |
| III | 暗褐色土 あまりしまりがなく、粘性を有する。土器片をわずかに含む。 |
| IV | 褐色土 ややしまりがあり、粘性を有する。土器片をわずかに含む。 |
| V | 赤褐色土 かたくしまり、強い粘性を有する。(地山) |
| VI | 暗褐色土 ややしまりがあり、粘性を有する。土器片をわずかに含む。通常覆土。 |

第150図 玉名郡倉跡推定地土層断面実測図 S=1/80

III 平成12年度の調査

22 岩崎原遺跡・高瀬藩邸跡

所 在 地：岩崎字南岩原1134

対象面積：597.92m²

調査期日：12年12月26日

担 当 者：竹田宏司

岩崎原遺跡は、標高18m前後の玉名台地上に位置し、弥生時代から中世の包蔵地とされている。遺跡範囲の南側は、近世の玉名藩邸跡と重なっている。

調査地は、遺跡範囲の南端に位置し、現況は宅地となっており、標高は約12.5mである。同じ敷地内の中側には、平成10年に建設された共同住宅があり、基礎工事の際に工事立会を行っている。

建物の範囲を中心に、3カ所のトレンチを設定した。いずれのトレンチも一旦ローム層（IV層）まで削平されており、現在の整地層（I層）との間に、2次的な堆積によるII・III層が存在する。II層は近世以降の瓦・陶磁器等を含む。III層は、形成された時期が不明であるが、混入物はII層に近似しており、近世以降の層であるとみられる。II・III層中より、弥生・中世・近世の遺物が若干量出土しているが、いずれも小片である。いずれのトレンチにおいても、遺構は確認していない。

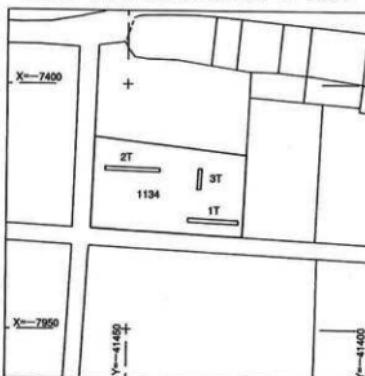
調査後の措置は、慎重工事である。



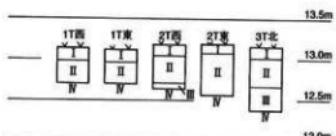
写真123 岩崎原遺跡1T全景(西より)



第151図 岩崎原遺跡調査地位置図 S=1/5,000



第152図 岩崎原遺跡調査地周辺地図・トレンチ配置図 S=1/1,000



第153図 岩崎原遺跡土層断面図 S=1/60

III 平成12年度の調査

23 玉名平野条里跡

所在地：玉名字下深田1252～字土井ノ内1707

対象面積：1,123m²

調査期日：13年2月15日

担当者：末永 崇

調査地は、玉名平野の北部に位置し、標高6.6m～7.0mの地点である。同じ路線の北側は、平成12年1月12日に確認調査が行われており、埋蔵文化財は確認されていない。

調査対象区内に6カ所トレンチを設定し、埋蔵文化財の状況を確認した。調査では、各トレンチでI～V層まで、2トレンチではVI層までを確認した。各トレンチの層位はおむね一致する。堆積状況は、主に砂層と強粘性土が互層状に堆積しており、部分的に砂層が帯状に入る層もあり堆積の変化が激しい。したがって河川の氾濫原であった可能性が考えられる。この内5トレンチのVa層において近代の瓦数点を検出したため、少なくともV層までは近代の堆積と思われる。その他のトレンチでは遺構、遺物は確認されなかった。

今回の調査では、小規模な農道改良工事であり面積も狭小であったため、深く掘削するための十分なスペースが確保できず、VI層以下については確認できなかった。

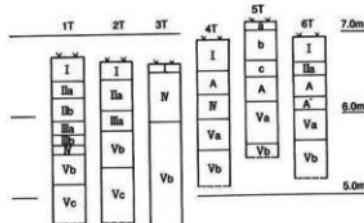
調査後の措置は、慎重工事である。



第154図 玉名平野条里跡調査地位置図 S=1/10,000



第155図 玉名平野条里跡トレンチ配置図 S=1/4,000



- I 灰土
- II a 黄色砂質土 構造なく、粘性有しない。微化鉄分多く含む。わずかに灰色粘性土混入。
- II b 黄色リーフ砂質土(7.5YR4/2) 構造なく、粘性有しない。IIaより微化鉄分、粘性土多く混入。
- III a 黒色粘性土(N2) 構造りなく、強粘性。植物遺体多く含む。
- III b 黒色粘性土(N2) IIaよりやや暗く、強粘性。植物遺体少々含む。砂質土わずかに含む。
- IV a 深灰色砂質土(10YR4/2) 構造りなく、強い粘性有する。植物遺体多く含む。近・現代の瓦出土。
- V a 黑色土(N2) 構造りなく、強い粘性有する。植物遺体含む。
- V b 黑色土(N2) 構造りなく、強い粘性有する。植物遺体少々含む。わずかに砂混入。
- V c 黑色土(N2) 構造りなく、強い粘性有する。植物遺体含む。
- VI 磷青灰土(10BG4/1) 構造りなく、強い粘性有する。

第156図 玉名平野条里跡トレンチ実測図 S=1/60

III 平成12年度の調査

24 吉丸西遺跡

所在地：寺田字榎原825-1、827、828、

829の一部

対象面積：4805.84m²

調査期日：13年3月15日

担当者：竹田宏司

吉丸西遺跡は、伊倉丘陵性台地上に位置し、縄文時代から中世の包蔵地とされている遺跡である。西側には、国道208号線玉名バイパスの建設に伴い、平成13年度から発掘調査が行われている、吉丸前遺跡が位置している。吉丸前遺跡は、中世の居館址の存在が想定されており、同じ尾根筋では、県文化課による確認調査の結果、縄文時代の遺跡が確認されている。

調査地は、吉丸西遺跡のほぼ中央部に位置する、標高約48mの地点である。南側には、現在国道208号線が通っており、すぐ西側の地点で、バイパスが分岐する予定になっている。調査原因は事業所の建設であり、調査依頼を受けて実施している。調査地の現況は畑地となっており、麦が栽培されていたため、トレンチの位置及び規模に制約を受けることになった。

調査地内に8カ所のトレンチを設定し、重機掘削により調査を行った。その結果、5カ所のトレンチにおいて、近世から近代にかけての溝が確認され、陶磁器などが出土した。しかし今回の調査では、耕作物が障害となって、溝の方向・規模などを確認するには至っていない。他のトレンチにおいては、古代から中世にかけての遺物包含層が確認されたが、出土した土器の量は少量であり、いずれも小片であるため、周辺の遺跡からの流れ込みの可能性が高いとみられる。

調査後の措置は、慎重工事である。



写真157図 吉丸西遺跡調査地位置図 S=1/5,000

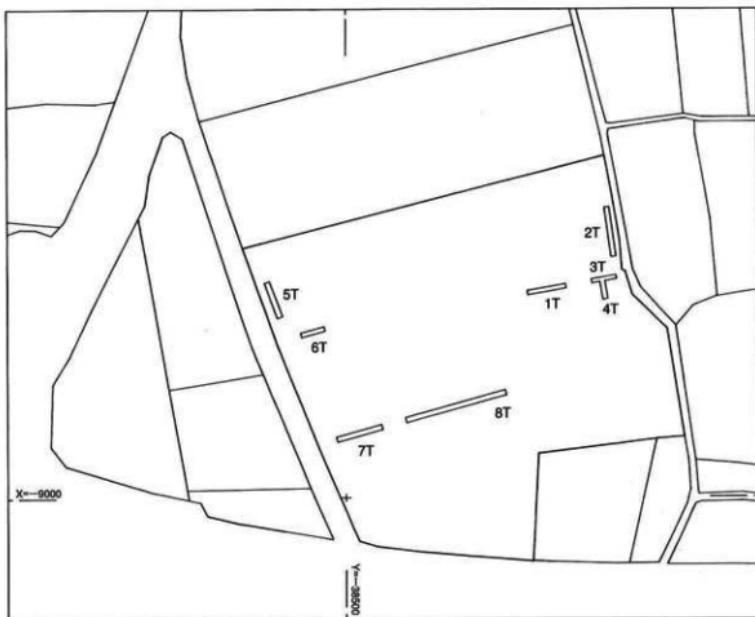


写真124 吉丸西遺跡調査地近景(北より)

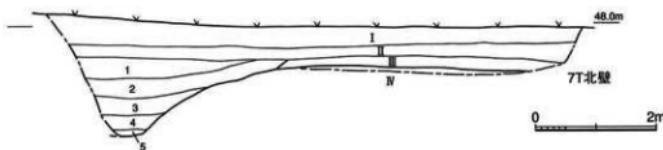
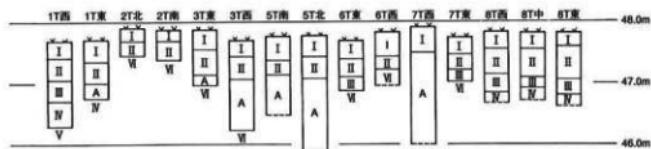


写真125 吉丸西遺跡3・4T調査状況(北東より)

III 平成12年度の調査



第158図 吉丸西遺跡調査地周辺地図・トレンチ配置図 S=1/1,000

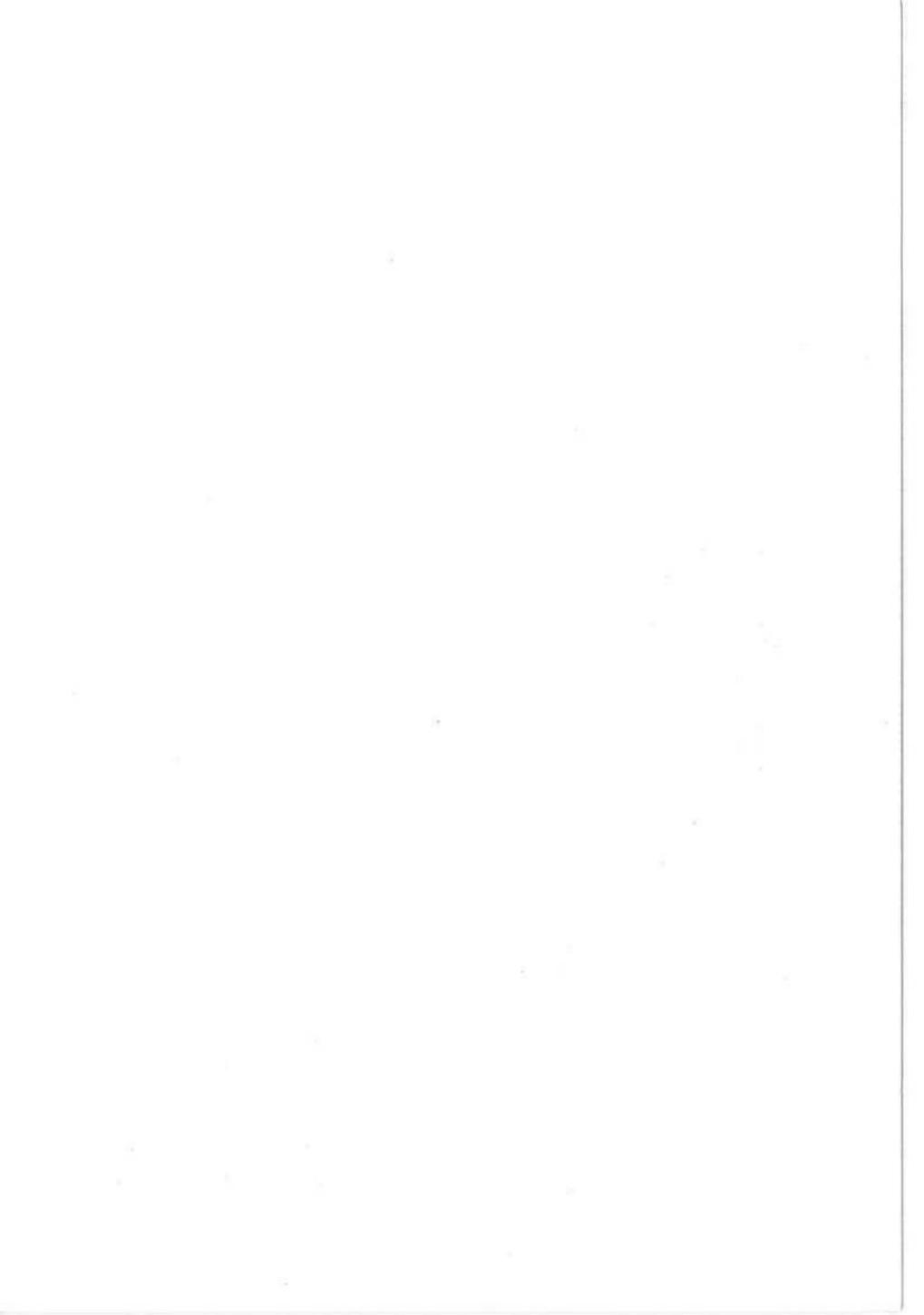


- I 槌作土
- II 暗褐色土(10YR3/3) しまり、粘性やや弱。V層粒子、焼土、炭化物粒や混入。小土器片を若干含む。近縁～近代住跡の撠作土と判斷。
- III 黒褐色土(10YR2/2) しまり、粘性やや強。V層ブロック混入あり。焼土、炭化物や小骨人、骨器等を若干含む。中層の遺物含む。
- IV 黑褐色土(10YR3/3) しまり、粘性も、堅い上にやや強まる。特記すべき混入物なし。遺物未確認。
- V 黑褐色土(10YR2/2) しまり、粘性とやや強い。部分的に暗褐色土が混入する。特記すべき混入物なし。遺物未確認。
- VI 黄褐色土(10YR5/6) しまり、粘性とや強。ローム層、下部はやや赤味が強まり、粘性弱まる。下部以下、無遺物層と判明。
- A : 混合土
- 1 ~ 5 黒褐色土(10YR2/2) しまり、粘性とやや弱い。炭化物・地土粒をやや含む。

第159図 吉丸西遺跡トレンチ実測図 S=1/100

報告書抄録

ふりがな	たまなしないいせきちょうさほうくしょいち							
書名	玉名市内遺跡調査報告書Ⅰ							
副書名	平成11・12年度の調査							
卷次								
シリーズ名	玉名市文化財調査報告							
シリーズ番号	第11集							
編著者名	竹田宏司							
編集機関	玉名市教育委員会							
所在地	〒865-0051 熊本県玉名市築木88-1							
発行年月日	2002年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ一ド 市町村	遺跡番号	北緯	東經	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
蓮華遺跡	玉名市築地	43206	161	32°55'46"	130°32'16"			
古閑遺跡	玉名市築地	43206	163	32°55'47"	130°32'17"			
高岡遺跡	玉名市山田	43206	174	32°56'03"	130°32'53"			
大原遺跡	玉名市立願寺	43206	103	32°56'22"	130°33'24"			
玉名平野朱里跡	玉名市名瀬・南園周辺	43206	483	32°56'10"	130°34'20"			
下村城跡	玉名市下	43206	135	32°56'10"	130°35'56"			
ホカニヤカタ	玉名市牛尾	43206	411	32°55'50"	130°32'40"			
筑地東遺跡	玉名市築地	43206	164	32°55'52"	130°32'11"			
龜甲遺跡	玉名市龜甲	43206	190	32°55'34"	130°33'26"			
城の浦横穴	玉名市下	43206	—	32°56'10"	130°35'56"			
岩崎城跡	玉名市岩崎	43206	221	32°55'49"	130°33'34"	1999年4月1日		
西田遺跡	玉名市築地	43206	053	32°56'42"	130°32'03"	?		
菊尾遺跡	玉名市築地	43206	149	32°55'14"	130°31'21"	2001年3月31日		
五郎丸遺跡	玉名市山田	43206	063	32°56'10"	130°32'19"			
刀研遺跡	玉名市石賀	43206	381	32°58'05"	130°33'33"			
玉名郡倉跡推定地	玉名市立願寺	43206	097	32°56'12"	130°33'22"			
春出遺跡	玉名市中	43206	182	32°55'36"	130°32'38"			
釋迦遺跡	玉名市立願寺	43206	087	32°56'08"	130°33'03"			
立願寺廃寺	玉名市立願寺	43206	094	32°56'18"	130°33'16"			
岩崎城跡	玉名市伊賀北方	43206	276	32°54'39"	130°35'37"			
上小田宮の前遺跡	玉名市上小田	43206	050	32°57'09"	130°35'48"			
岩崎原遺跡	玉名市岩崎	43206	219	32°55'57"	130°33'24"			
吉丸西遺跡	玉名市寺田	43206	251	32°55'05"	130°35'18"			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
高岡原遺跡	集落	弥生時代後期 古代・中世 中世	住居址 土坑・道路・溝 壙状遺構	土器・石器 須恵器・土師器・輸入陶磁器				
下村城跡	城館址	古墳時代後期						
城の浦横穴	墳墓	中世						
岩崎城跡	城館址	古墳時代後期						
菊尾ノ尾遺跡	集落	中世						
玉名郡倉跡推定地	官衙	古代						
立願寺廃寺	寺院址	古代						
五郎丸遺跡	集落	弥生時代中期・後期	柱穴 溝・柱穴 住居址	須恵器・土師器 須恵器・土師器 瓦・須恵器・土師器 須恵器・土師器・輸入陶磁器 土器・石器				



玉名市文化財調査報告 第11集
玉名市内遺跡調査報告書 I
平成11・12年度の調査

平成14年3月29日印刷
平成14年3月31日発行

編集発行 玉名市教育委員会
〒865-0051 玉名市繁根木88-1

印 刷 株式会社 有明印刷
〒865-0022 熊本県玉名市寺田123-1
TEL0968-73-2055